



世界の 林業労働者が 自らを語る

われわれはいかに働き暮らすのか

Bernt Strehlke

ベルント・シュトレルケ 編

菊間 満 訳

J-FIC

ILO 刊行物中の呼称は国際連合の慣行によるものであり、文中の紹介は、いかなる国、地域、領域、その当局者の法的状態、またはその境界の決定に関するいかなる見解をも示すものではない。

署名のある論文、研究報告及び寄稿文の見解に対する責任は原著者のみが負い、ILO による刊行は、文中の見解に対する ILO の支持を表すものではない。

企業名、商品名及び製造過程への言及は ILO の支持を意味するものではなく、また、企業、商品または製造過程への言及がなされていないことは ILO の不支持を意味するものではない。

本書は ILO 本部（ジュネーブ）が下記の書名のもとに刊行した原著を、同本部の許可を得て訳出したものである。

記

HOW WE WORK AND LIVE, FOREST WORKERS TALK ABOUT THEMSELVES.

A global account of working and living conditions in the forestry sector.

[われわれはいかに働き暮らすのか——林業労働者が自らを語る——、林業部門における労働と生活の状況に関する世界報告]

Copyright © International Labour Organization 2003

日本語著作権は 2010 年、日本林業調査会が許諾されている。

凡例

1. 本書は、表題文献の全訳である。

- 1) 原本が絶版のため、翻訳は2007年の同著PDF版によった。
- 2) 同書の連絡先の面接調査者、写真撮影者氏名は原文のままとした。
- 3) 原本の写真はほとんどがカラーであるが、拙訳ではすべてを白黒とし、縮小したカラー写真(p177～p183)で補った。

2. 訳文中の()は原注、[]は訳注である。

3. 同翻訳の現在的意義をより鮮明にするため、次の文献を本書に収録した。

- 1) 菊間満編「日本の林業労働者が自らを語る(2010)」
- 2) 菊間満「森林組合を『労働』から再考する」(国民森林会議『国民と森林』No.107、2009年1月、所収)

森と労働を愛する人のための序文

—日本語訳の刊行に寄せて—

石見 尚

(日本ルネッサンス研究所代表、協同組合研究者)

本書を刊行したILO（国際労働機関）は、第1次大戦の終結に伴うパリ平和会議によって、1919年に設立された由緒ある機関で、第2次大戦後は国連の専門機関になっている。その設立は、労働者の労働条件の改善と社会福祉の向上を図り社会不安を除去することが、平和の維持にとって不可欠であるとの国際的合意によるものである。この思想は、協同組合の先駆者であるロバート・オウエン（1771 - 1858）がすでに説いていたもので、ILOに協同組合部があり、「協同組合セクター論」を提唱した社会学者のジョルジュ・フォーク（1873 - 1953）が初代部長に就任したのもうなずくことができる。

本書は、森の仕事で暮らしを立てる人たちが自らの林業労働について赤裸々に語った報告集であって、それ自体でも興味津々の読み物であるが、ここでは、それが21世紀を考えるうえでどのような意義をもっているかについて述べてみたい。

本文は33ヵ国、55名（うち3名は日本人）の自分史のなかの森林労働に関する短い一節を収録したものである。日本では、訳者のこの資料紹介に触発されて、京都府農村労働組合の7名の組合員がそれぞれ筆をとって自身の「物語」を寄せており、われわれが林業労働者を知るうえで、さらに深みのある一冊になっている。

林業労働者に共通していることは、森のなかの仕事が好きだということである。しかし林業労働は大変な重労働である。しかも多くの労働者がチェーンソーやトラクターなどの高性能機械による怪我の経験を語っている。アジア、アフリカなどの熱帯林では、毒蛇や猛獣に出会う危険もある。それでも、彼らは仕事を持つ喜びを語っている。今日では、事業主は森林作業の機械化にともなって、高性能機械の操作や作業安全のための研修を行い、修了後は試験によって資格の付与を行っている。資格を持たないと、仕事のチャンスが広がらない。この報告を通じ

て感じることは、アジア、アフリカの林業労働者の学習意欲がかなり高いことである。

林業労働者にとって辛いことで共通しているのは、まず賃金が絶対的に安いことである。労働者一人の稼ぎでは家族を養うことができないから、妻も育苗や植林の仕事をするか、他に勤務して収入確保を図っている。夫婦で働くことで、林業労働が続くのである。交通事情が悪い場合、何か月も家族と別れて、飯場暮らしをしなければならない。それでも、子供を学校に進学させ、子供の将来を楽しみにして働いている。

彼らは、雇用労働者としての固定した時間給よりも出来高払いを好んでいる。また雇用されるよりは、一人親方の請負作業人になる志向が強いようである。高性能機械を持ち、助手を使い、仕事を下請けして、自分の才覚で仕事をする人も少なくない。しかし木材価格が低くなれば、機械化貧乏となって、赤字を補填するため、他に転職する。でも森林労働が忘れられないので、また森に帰ってくる人も少なくない。そして子供が林業労働者になってくれることを願う人もあれば、子供には同じ辛い思いはさせたくないという人もある。人それぞれの人生である。

ひるがえって、ILO は人間としての尊厳のある労働の実現を提唱しているのであるが、いかにすれば、林業労働者の低劣な労働条件を改善し、彼らの社会福祉を向上させることができるか。これは他の部門の労働者全般にも通じる問題である。

先に述べたフォーケは、社会経済を次の四つのセクター（部門）に区分した。

- ①資本主義的企業部門
- ②公共（国家・自治体）部門
- ③前資本主義的自営業部門
- ④協同組部門

林業労働者の人間としての尊厳を保つ労働を保障するには、①の資本主義的企業ではできないことは、この報告書を見れば明らかである。②の公共部門も①民間企業に勝る事業経営はできない。

③の自営業部門の場合、この報告書にしばしば登場する一人親方を見ればかなり難しい。

森林作業が鋸、斧、鋤でできた時代には、職人労働で林業部門を支えたものであるが、現代の発達した技術と組織と市場法則の時代には、山林の維持は伝統的

な職人労働ではできなくなった。森あつての人、人あつての森を実現する職人集団を維持してゆくには、④の協同組合に林業労働者を結集することが、まず前提になる。しかし森林組合単独では、林業労働の価値を実現することには限界があるので、協同労働の協同組合や生協、農協などと連携して、協同組合地域社会を創ることが必要である。しかし現代では協同組合だけでも不十分で、労働組合やNPOと連携し、③の自営業も加えた第4セクターを地域に組織する必要がある。これを「社会的人間セクター」と呼ぶと、この「社会的人間セクター」が①の資本主義的企業部門、②の公共部門に対しある条件下では戦略的に対立し、ある条件下では協力しつつ、人間性に基づいた労働を実現してゆくことになるであろう。

このような展望にたつ必要性は、20世紀末から現在にかけて、協同組合は技術の進歩、世界市場の自由化、資本の大型化への対応を迫られているからで、端的に云えば、グローバリゼーション下の協同組合の原理が求められているのである。その一例は、2005年の南アフリカ共和国の新協同組合法の公布である。この協同組合は、もはや伝統的な協同組合ではなく、資本主義的企業との相互乗り入れが可能な制度設計になっている。いまアメリカではこの新型協同組合をめぐる、アメリカ農務省もからんで、数学モデルによる新古典学派の経済学者と多面的要素の相互作用を重視する社会学者の間で激しい論争が交わされている。この事態は、ILOも想定しなかった展開である。

こうした原理的な問題に対処するには、自然の価値を代表する森林、人間の価値を代表する労働を考察に加えなければならない。本書の末尾に添付された菊間満氏の論文、「森林組合を『労働』から再考する」と「訳者解説」は、図らずも協同組合をめぐる大論争に一石を投じるものとなっている。そして、本書の林業労働者の肉声が、今後の協同組合の理論と実践にとって、重要な検討材料になることは必至である。

(2011年1月31日)

はじめに

ILO は長年にわたり、林業労働者に関する極めて多数の報告書と書籍を刊行してきたが、この一冊はこれまでの刊行物と異なったものである。ILO にとっても、その会員である政府および林業と木材産業の労使代表にとっても、関心事はこの部門の社会労働問題であることはいうまでもないところである。それ故、ILO はその出版物において、雇用と収入、労働安全と職業訓練、雇用関係と平等な待遇、この産業の将来と森林の持続的経営を論じている。GDP における林業のシェアに関する、賃金水準・事故頻度に関する、外注と下請け労働への切り替えに関する、低賃金の造林労働での女性労働の割合に関する、さらに林業労働の多くの他の局面に関する、われわれの報告書にあるすべての正確な情報は、当該産業とそこで働く人々に何が起きつつあるのかを理解するために極めて重大である。それにもかかわらず、あり得るのが、それらの情報が一つの核心的な面——現実に暮らす人々との関連、さらにこのような時流に乗った情報が人々の生活を左右する点との関連——を見逃すことである。

ILO の元林業・木材産業専門家であるベルント・シュトレルケは、常に現実の人々に関心を抱き続けてきた。彼は持ち前の思いやりの心、さらに決断力と忍耐力で、世界中の林業労働者の「人生の物語」〔以下物語と略〕の収集にとりかかった。彼自身の取材の旅を伴う努力と、さらに現地の友人と同僚のまさに世界的なネットワークの支援のお陰で——そのすべてがボランティア活動で——、すべての大陸から 55 の職業人生がこの著書でとらえられた。

物語と写真は、個性のない統計とは反対に顔と名前がある。物語と写真は、森林に最も密接に結びついた暮らしがある人々の意欲や願いをも、不安や不満をも表す。暮らしの物語は簡潔であり、油絵のポートレートよりもむしろ鉛筆書きのスケッチである。それらの物語は伝記や逸話の代わりに、これらの労働者の林業という職業と生活と家族の間のきずなを公開することで、どちらかと言えばやや血の通わぬ統計に質感を与える。

中には重要な数字があるが、物語は代表的サンプルを提供するように全く意図されていなかった。しかし、それらの物語は異なる、気候、文化、経済発展の国家水準、ジェンダーと年齢にわたる職業の多様性をまさにとらえる。最年少の労

働者は25歳のブラジル人、最高齢は90歳代のスウェーデン人である。これらの人生の物語には共通の糸が通るが、しかし紋切り型で単純な一般化を退ける。物語のほとんどすべてが森林への関心と、この独特な労働環境への愛着によって一体化されている。彼らはまた逆境での過酷な労働に向けた気質を共有する。彼らは淡々とした調子で、経験した苦勞について話す。事故、孤独、家計のやりくりの困難、加齢による暮らしの困難への不安。一部の人々には林業労働は最後の頼みの綱の仕事であり、他の人々にはかなうなら今一度従事してみたい職業である。

林業の課題は木や森林ばかりではなく、人々も課題とする。この識見は初めてのものではない。職業的な林業労働者は数百万人しかいないが、しかし彼らは重要な鍵の役割を演じる。資格をもった、意欲のある労働者と技術者なしに、各国政府と国際的な政策努力が目指す森林の持続的管理は、決して実現しないであろう。けれども、われわれは森林の内外に暮らす人々について、どのくらいわかっているだろうか。暮らしのために森林を頼りにする人々は誰なのだろうか。本書は、これらの極めて重要な問いに答えることについて、また国際的な政労使の三者構成機関と政策討議を通じて、林業労働関係者のみなさん方に影響を与える方法について意識を高めることに、相当の助けになる。われわれは、この人的側面への関心が高まることにより、社会的対話が意味あるものとなり、なおまたより良い結果がもたらされることを期待する。

部門別活動局長 クレオパトラ・ドゥンビア＝ヘンリー

Contents

森と労働を愛する人のための序文 《石見 尚》	5
はじめに 《クレオパトラ・ダウンビア＝ヘンリー》	9
面接調査者、写真撮影者への連絡	17
序文	19

ヨーロッパ

【フィンランド】 リスト・ニクラ	
チェーン・ブレーキが命を救った。	24
【スウェーデン】 インゲマール・サンディン	
請負業者の仕事は好きだが、大変きつい職業になった。	26
【スウェーデン】 エーリック・セーデルルンド	
請負業者として働くのはあきらめた。	28
【スウェーデン】 ブロール・レーヴグレン	
昔の仕事と暮らしはずっと困難だった。	30
【ノルウェー】 グドゥルン・オルセン	
夫婦で協力して働きました。夫は伐採作業で私は集材作業でした。	32
【イギリス】 エドウィン・ローランズ	
労働組合の仕事に関心があった。	34
【ドイツ】 ユルゲン・コーラン	
昔の同僚の多くは職を失った。	36
【ドイツ／オーストリア】 ハンス・シュタウダッハー	
運良く二度の大怪我から完全に回復した。	38
【ドイツ】 ヴィルヘルム・コッフ	
16 歳から 65 歳まで森林で働いた。	40
【ドイツ／ポーランド】 シルヴィア・クルツパ	
苗畑の季節職に十分満足しています。	42
【フランス】 ミシェル・ブラン	
夏には木を切り、冬にはスキー・インストラクターで働いている。	44

【スイス】 アレン・ファノー	
仕事と暮らしには正しい秩序がある。—————	46
【スイス】 ラミズ・ヘタ	
自分は定評のある個人請負業だ。—————	48
【オーストリア】 クロチルデ・ボーデン	
車はがらくた市のようです。—————	50
【スロベニア】 スタンコ・スロディ	
刑務所では安全な作業手順を考える時間があった。—————	52
【スロベニア】 ヤネス・ローバン	
もしも若ければ、もう一度同じ仕事をするつもりだ。—————	54
【チェコ】 ペトゥル・ニエメツ	
トラクタ購入の借金返済に6年かかった。—————	56
【ルーマニア】 ヴェルギール・ポシュカ	
もしも若ければ、西ヨーロッパでお金を稼ぐつもりだ。—————	58
【ロシア】 オレーク・ルネゴフ	
ゼロから始めなければいけなかった。—————	60
【ロシア】 マテウス・ゲンナージ・イワノヴィッチ	
1万2,000haの森林地域の保護—————	62
【ギリシャ】 ジョージ・ヴァキラス	
林業労働者協同組合の仕事に満足している。—————	64
【スペイン】 エリー・ピラール・リバス	
山火事の消火は、女性には大変厳しい職務です。—————	66
【スペイン】 アントニオ・カステージョ	
林業以外の別の職を探さなくてはならないだろう。—————	68
【スペイン】 ビセンテ・トーレス	
昔はマツの木から炭を作っていたものだ。—————	70
【ポルトガル】 ペドゥロ・アントニオ・カサヴェリャ	
コルクガシの皮剥ぎは見つけられるうちで最高の職業だ。—————	72
【ポルトガル】 イナーシア・ジェローニモ	
田舎で働くのが好きですが、子どもは都会に出て行ってしまいました。——	74

アメリカ

【米国】 ヴァージル・ウォレス	
木材伐採の飯場で育った。—————	76
【米国／グアテマラ】 ファン・オスワルド・アセベド	
月に 600 米ドルをグアテマラにいる家族に仕送りできる。—————	78
【カナダ】 ドギー・コナース	
ハーベスタは日に 24 時間、週に 7 日動く。—————	80
【カナダ】 エド・ベリー	
スキッドが燃えだしたときは危機一髪だった。—————	82
【ブラジル】 ライムンド・ペニシェ・トラヴァース	
認証林で働いているから当時と事情が違う。—————	84
【ブラジル】 アルフレド・ダ・コスタ・ヴィアナ	
樹種は 100 以上知っていると思う。—————	86
【ブラジル】 ジョゼ・ステニオ・ダ・シルバ	
教育がなくても、収穫現場の監督になれた。—————	88
【ブラジル】 ジョゼ・デ・アリマテイア・ペレイラ・デ・カルヴァーリョ	
一番の関心事は、致命的な事故に遭うのを避けたいということだった。——	90
【ブラジル】 エレニルソン・デ・ジェスス・ロペス・ソアレス	
林業の仕事に満足しているが、家族が恋しい。—————	92
【ブラジル】 エジバルド・ジョゼ・ネグレロ	
雨期に収穫は 4 ヶ月間止まるが、給料の支払いは継続される。—————	94
【チリ】 イバン・ルディ・ノランブエノ・モヤ	
最大の問題は、人と機械に仕事を確保することだ。—————	96
【チリ】 ルベン・デ・ラ・クルス・ガジャルド・リオス	
仲間のチェーンソー作業員は、ユーカリの伐採中に致命的な怪我をした。——	98
【チリ】 ロサメル・エドゥアルド・シフエンテス・コネヘロ	
自家用車を持つのは正に夢だ。—————	100

アフリカ

【ガーナ】 オーナブ・バチェ

造林労働者として始めて、今は森林監督官補佐だ。————— 102

【カメルーン】 ピエール・アンゴ

森林がなくなったとき、われわれには何も残っていない。————— 104

【カメルーン】 ポール・モリス・ンナンガ

林業労働は好きだが危険で、雨期は大変困難になる。————— 106

【ガボン】 フランシス・ムボンバ

伐採現場監督になりたい。————— 108

【タンザニア】 エゼキエル・ルクマイ

雄ウシで集材するのが好きだから、続けるつもりだ。————— 110

【エチオピア】 ジェマネシュ・イシャテ

薪の運搬——しているのは本当にロバの仕事です。————— 112

【ケニア】 パメラ・アティエノ

子どもにはもっと良い人生があればよいと思います。————— 114

【レソト】 マープレ・エネスティナ・シィティカ

私の稼ぎのお陰で娘の授業料が払えます。————— 116

アジア—太平洋

【日本】 タカミツ・カワモト

架線集材士になるのが生徒の頃からの夢だった。————— 118

【日本】 ミツユキ・ヤマスギ

自分が植林し手入れした木を見てとても満足している。————— 120

【日本】 ヤスカザ・タヤ

大都会から田舎の生活に戻った。————— 122

【韓国】 アン・グァンヒ

会社が倒産したので、林業労働に就いた。————— 124

【インド】 ナシル・フセイン

石工の次は林業労働者として働き、今は石工に戻っている。————— 126

【オーストラリア】 ルネ・アンガーマン

今まで林業の仕事を後悔したことはない。—————	128
【ニュージーランド／フィジー】コロイ・ジリナカウモリ	
もっと高い賃金を稼ぎに、オーストラリアに行くかもしれない。—————	130
【ニュージーランド】ロジャー・ティ・アホ	
機械化がもっと進むせいで、森林の職を失うだろうか？—————	132
 日本の林業労働者が自らを語る（2010）《菊間満》—————	135
高橋宮子	
山の仕事は夫婦でないと難しいのです。—————	138
高山静代	
現場の仕事は厳しく過酷でした。—————	140
上山康成	
これから先、少しでも労働条件が改善されることを願います。—————	142
東 仁	
欧米で林業労働が子供に継がれるのは、仕事に誇りが持てるからだ。———	144
木虎治男	
機械や重機の買い替え等に多額の費用がかかり、大変困窮している。———	146
足立勝巳	
今では車で 30 分の現場でも、当時は飯場暮らしでした。—————	148
中越守雄	
中学を卒業すると、すぐに父親に連れられて山に入りました。—————	150
 森林組合を「労働」から再考する 《菊間満》—————	153
訳者解説——物語から見えてきたのは、日本の林業労働者政策の転換である	165
編者紹介・訳者紹介—————	175
「物語」の個々人（カラー写真）—————	177

面接調査者・写真撮影者への連絡

Anderson, Esbjörn (Jemanesh Eshete) - Abeli W. Shoo; Mgangamundo (Ezekiel Lukumai) - Apud, Elias; Strehlke, Bernt (Rosamel Eduardo Cifuentes Conejero) - Berger, Christiane (Klothilde Boden) - Blombäck, Peter (Ingemar Sandin) - Bowling, Jill; Opanga, Paul; Mishak Malonga (Pamela Atieno) - Braga Neves, Rosa Maria (Inacia Jerónimo) - Buff, Joachim; Strehlke, Bernt (Hans Staudacher) - Byström, Joakim (Oleg Lunegov) - Chandra, Romesh (Nasir Hussain) - Duikoro, Joni; Strehlke, Bernt (Koroi Cirinakaumoli) - Efthymiou, Pavlos; Strehlke, Bernt (George Bakiras) - Fath, Henning (Francis Mboumba) - Fossier, Erling (Gudrun Olsen) - Freist, Helmuth (Wilhelm Koch) - Frykman, Bengt; Eun-Jung; Kim, Young Chai (Ahn Gwang-Hee) - Gacon, Anne; Scharapan, Pascaline; Strehlke, Bernt (Michel Brun) - Garland, John (Virgil Wallace) - Gayoso, Jorge; Strehlke, Bernt (Ivan Rudi Norambuena Moya; Ruben de la Cruz Gallardo Rios) - Hermelin, Joakim; Fullerton, George (Dougie Connors; Ed Perry) - Holzworth, Peter (René Ungerman) - Kaufhold, Nemo (Vergil Posca) - Lipoglavsek, Marjan; Kumer, Pavel (Stanko Slodej) - Lipoglavsek, Marjan; Poje, Ludvik (Janez Rowan) - Lövgren, Mattias (Erik Söderlund; Bror Lövgren; Ownav Bvakyé) - Marttila, Timo (Risto Nikula) - McDaniel, Joshua (Juan Oswaldo Acevedo) - Mueller, Andrea (Mapule Ernestina Setaka) - Nussbaumer, Marianne (Vicente Torres) - Ota, Ikuo (Yasukaza Taya) - Oyono, René (Pierre Ango; Paul Maurice Nnanga) - Parker, Richard; Strehlke, Bernt (Roger te Aho) - Pokorny, Benno; Jocilene Sousa (Alfredo da Costa Viana; José Stênio da Silva; José de Arimatéia Pereira de Carvalho; Elenilson de Jesus Lopes Soares) - Poschen, Peter (Pedro Antonio Casavelha; Raimundo Peniche Travas) - Rowlands, Edwin (Edwin Rowlands) - Stakanov, Victor (Mateus Gennadiy Ivanovich) - Sterzik, Klaus; Esner (Petr Nemec) - Strehlke, Bernt (Juergen Kollan; Alain Feignoux; Ramiz Heta) - Strehlke, Goetz (Hery Pilar Ribas) - Strehlke, Hella (Antonio Castillo) - Winkler, Norbert (Edivaldo José Negrero) - Wudowenz, Rainer; Strehlke,

Bernt (Sylvia Krupp) -Yamawaki, Sampei; Fujii Chikara; Kazuo Mimura
(Takamitsu Kawamoto; Mitsuyuki Yamasugi) .

序文

林業は多くの役割を果たす部門である。それは木を育て収穫することばかりか、例えば土壌と水資源の保護、地球温暖化の抑制、さらに生物多様性の維持等の重要な環境機能も目的としている。また林業は増加する都市住民のために、自然環境の中でのレクリエーションへのアクセス〔利用の権利〕を与える。

しばしば見落とされるのが、雇用と収入の源泉としての林業の役割である。木々の背後にいる人々は誰なのか。彼らはどのように働き暮らすのか。彼らが人目に触れることはあまりない。仕事は分散した場所で、頻繁に場所を変えながら、孤立して行われるのはよくあることである。仕事の負荷は大きく、災害の危険は高く、しかし賃金と仕事の安全性は低い傾向がある。今まで林業労働は、林業以外の雇用が不足していることから、地方に住む人々にとっての頼みの綱だった。だが今や、ほとんどの若者は村から都会に移住する。

近年、国内及び国際機関と組織が、天然資源の管理は現在と将来の世代の必要を満たすように持続されるべきであると、理解を増すようになっている。持続性は林業経営において極めて重要な課題である。その課題は、適正な森林管理を実行し、破壊的な収穫実施を回避し、収穫の後に適切な森林再生を保証し、劣化した森林の効果的な再生を実行する能力、つまり技術的な資格のある労働者を必要とする。

持続的な森林経営は、自らの生計手段を森林に依存する人たちにとって、社会的に役立つに違いない。労働と生活条件は、有能な担い手を増やし維持するために、魅力的でなければならない。適正な森林管理の認証は、そうした状況に根ざしている。この点に関しては、もちろんこれまでに前進はあったが、まだ多くの解決すべき必要がある。一般的に言えば、状況は憂慮すべきままであり、複数の事例では近年悪化さえしている。

自らの問題に解決の光を投げかけるために、これまで林業労働者は彼ら自身が自分の言葉で話すように求められてきた。これらの物語は、林業に関心を持つすべての人々、森林管理に関わるすべての人々、森林所有者、雇用者、労働者組織、政府組織等の労働と暮らしを改善すべき立場にあるすべての人々に、そして最後になるが重要なこととして林学者と林学科の学生に読まれる必要がある。

物語は、男性と女性、若年者と高齢者、工業国と発展途上国、涼しい気候と暑い気候、手作業と機械作業、したがって林業活動の全範囲を構成し、広範囲にわたり異なる条件下の仕事と暮らしに基づいている。それらの物語は、およそ2年をかけてまとめられた。物語は地球規模で、21世紀の幕開けの林業労働の有様を映す。引退した労働者たちの物語には古い歴史があり、林業労働が長い年月にどのように変遷したのかを示す。

何が林業をそれほど特別にするのか。

林業は生涯の職業か？

かつて林業労働は、ある世代から次の世代に継承されていた。息子は父の仕事を助けて、どのように木を伐採し道具を維持するか学んだ。そうしたパターンはまだ存在するが、姿を消しつつある。今日、労働者が他の職業から林業に仕事を変えることは、あるいは林業に見切りをつけ他に職業を探し求めることは、稀なことではない。今日の社会の他の職業に見られるように、林業の転職率は明らかに増加し、雇用の安定性は減少しつつある。何人かの高齢労働者は林業で送った仕事の人生を今もなお回顧するが、そうした事例は稀になろうとしている。こうした事態の主な理由は、労働力人口の流動性の増加、労働と生活状況に対する不満、さらに機械化による失業である。

併存する高度に機械化された作業と手作業

斧や手鋸のような単純な手作業の道具は、依然として使われている。しかし、木材の収穫において、チェーンソーは今日世界のどこでも見受けられる。運転室に着席した労働者によって操作され、伐採し、枝払いし、横挽きし〔玉切り〕、さらに木材を巻きたてる〔並んで山積みする〕高性能の自走式ハーベスタ〔収穫機〕は、急速に広がりつつある。それらは、発展途上国の大規模な植林地でも見ることができる。異なった種類の荷車用動物による林道までの集材は、まだ姿を消していないが、今やわずかな役割しか演じていない。木〔全木〕または丸太〔全幹材〕を牽引するための特殊なスキッド〔集材機〕、さらに短幹材〔造材された玉〕を道路沿いの土場に運ぶためのフォワーダ〔搬送機〕は広く使用されている。困難な地形ではヤーダ〔架線起重機〕とヘリコプターが使用されている。しかしな

がら、樹木の苗畑において、植林と保護さらに刈り払いには、手作業はまだ重要な役割を演じている。それ故、かなりの技術を必要とする高度に専門家化された仕事は、単純労働と並んで存在する。

直接雇用にとって代わりつつある請負仕事

恵まれた少数の林業従業者しか、森林所有者または林業会社から与えられる安定した仕事、正規賃金と十分な社会保障を享受していない。〔使用者の〕経費節減と〔雇用の〕柔軟性を得るために、これまで多くの労働者が直接雇用から切り離され、請負業者として再雇用されている。この変化が、不況期から回復後に十分な労働を利用できない場合には、高コストの機械の稼働率を維持する目的で、超過勤務時間のような労働条件の悪化をしばしばもたらすのである。さらに、事故、病気および傷病に対する保険が不十分なことが認められる。請負業者の組合は、公正な請負価格を交渉する組合であって、本来そうした困難を克服するよう援助ができればならないが、現実にはそのような組合はどこにも存在しない。さらに組合は、請負雇用の3人か4人の小集団、ないしは一人親方を主として組織する課題も抱える。

給与の格差は大きい

機械操作員に支払われる賃金は、普通、持ち運びできるチェーンソーや植林の手作業労働者よりは遥かに高い。後者のグループのうちで、特に途上国や東ヨーロッパでは、賃金水準への不満は一般的である。賃金は労働者とその家族の食物購入にはほとんど不十分であり、野菜栽培と家畜飼育用の小区画の土地耕作は、生存のための必須手段になる。こうした状況で、上役の海外駐在職員が得る高給は強い反感を買っている。

かなりの事故の危険性と職業病が続く

木材収穫に雇用される労働者の中で、自分自身、事故死を含む危険な事故を経験し、目撃したことのないものはほとんどいない。しかしながら、個人用の保護具は暑いときの着用には不快であるが、広く受け入れられており、危険回避への構えが大きくなりつつあることが示されている。耐衝撃性の運転室に座る機械操作員は比較的安心できるが、多くの労働者は依然として腰と背中への痛みを訴え、

60 歳以上の通常の退職年齢まで働き続けられないと感じている。定年よりずっと前に中途退職した人は昔から多かった。しかし、その人たちの物語が語られることはない。

飯場住まいか長距離通勤か

人里から遠く離れ、ただ悪路を行くか、さもないければ船で行くしかない孤立した作業現場は、林業労働者に飯場住まいをするか、さもないければ会社か個人の乗り物を使い、家と職場の間の長い距離を行かなければならないかの、二つに一つを選ぶことを強いている。今日、工業国では後者が普通であるが、それに対して途上国では天然林伐採が飯場住まいの労働者によって行われるのがほとんどである。飯場暮らしの人たちの主な不満は家族との別居であるが、一方通勤者は早朝家を出て、夜遅く疲れ果てて仕事と通勤から帰る。しかし、幸福なことに、その人たちは家族と週末を過ごすことができる。

責任ある地位への昇進の可能性

工業国では、初級、中級さらに上級の職業は、一般的に相当する教育と専門訓練によって決定される。途上国では、教育と専門訓練を受ける機会が地方に住む人間にとって大変限定されているため、重要な中級の地位はベテランの労働者が就いている。驚くべきは、学校では1年しか学ばず、ほとんど読み書きのできない労働者がいかに上手に計画と監視職務に対処し、知識と経験の一層の向上に熱心なのかを目にすることである。一方、高等教育基準のある先進国では一般の林業労働は多くの場合、首尾良く中等または高等学校を卒業した労働者によって行われている。あるものは実習期間の後、林業訓練学校に入り森林官になる。

女性はいよいよ重労働にさらされているが、賃金差別を受けている

林業で雇用される女性の割合は低下したが、いくつかの国では彼女らは労働力としてまだ重要な役割を演じる。女性は主に苗畑、植林、保育に雇用されている。少数の者はまた木材収穫や消火活動のような典型的な男性労働を実行する。薪採集は、その重い荷物を長い距離運搬しなければならないときは、大変骨の折れることになる典型的な女性労働である。女性により行われる他の仕事のほとんどが、例えば、いくつかの荷物を動かさねばならぬ苗畑での辛い肉体労働も含み、さら

に多くの労働は腰を曲げて行われる。それにもかかわらず女性の賃金は、女性が男性の同僚よりよい成果を上げられる分野の器用さが必要な職業についてさえ、男性より低いのである。

移民者に魅力的な職業

インタビューを受けた労働者の数名は、他所の高賃金に魅力を感じた低賃金国出身の移民であった。一部の移民者は最終的に受入国に定住し、他の移民者は単に出稼ぎ労働だけが目的で来た。移民の家計への貢献が重要であることがある。しかしその金は容易に得られず、労働を比較すると報酬は現地労働者の方がずっとよい。移民は、他の農業の職業においてと同様に、林業雇用の一般的特徴になりつつある。

労働組合と労働と生活条件の改善方法としての認証

かつて特に北欧と中欧諸国において、さらに北米諸国において、労働組合は林業労働者の条件の向上に重要な任務を演じた。今日、組合の任務は多くの労働者が減少したため衰退し、さらに林業労働者は組織された労働者の中ではわずかな集団となった。また、途上国でも労働組合が林業部門に手を差しのべることは減多にない。しかも企業レベルにおいてさえ労働者の組織はあったとしても弱体であるか、または存在しない。ILO と IFBWW [The International Federation of Building and Wood Workers、国際建設・林産労働組合連盟] は、例えば ILO の労働における基本的原則および権利に関する ILO 宣言などの国際基準を、森林認証へ導入するのに成功してきた。インタビューを受けた労働者の何人かは、労働条件は会社が認証手続きを受けてから改善されたと指摘した。

チェーン・ブレイキが命を救った。

リスト・ニクラ、フィンランド（男性）



フィンランドの首都ヘルシンキの約700km北にあり、北極圏まで250kmの人口8,000人の町、ムホスに私は住んでいる。1963年から75年まで学校に通い、大学入学許可を得た後、自己資金を稼ぐため建設現場で働いた。1979年から81年まで、オウルの林業学校で伐木搬出の講習を受けた。そして林業組合、メツァリー協同組合でチェーンソー作業員として職業に就いた。1985年に、その組合から作業指導者の訓練を受けた。この訓練の後、私は自分の労働時間の中で他のチェーンソー作業員を監督した。当時その組合は、地区で15人の伐木搬出労働者を雇用した。1992年にいくらかの副収入を稼ぐために、マッサージ士養成の6ヵ月の講座を受けた。4年間、日中は森林で働き、午後と晩はマッサージの仕事だった。これがあまりにひどい暮らし方だとわかったので、私は仕事を林業だけに決めた。

最近、木材企業は請負業者を雇うようになっており、直接雇用の伐採労働者が雇われているケースは、あったとしてもほんのわずかしかない。それが、私が個人会社を創設することを決めた理由である。私は、自分の会社「森の人——リスト・ニクラ」を1998年4月20日に立ち上げた。仕事は以前と同じだが、今は自分の社会保障、年金等を支払わなければいけない。今も主な雇用者はメツァリー

ト協同組合で、組合とはその年の契約交渉をする。仕事は初回と第2回の間伐になる。選木し、伐採し、枝払いし、造材してから巻き立てる。パルプ材、製材丸太、場合によっては小径木の燃料材を道端まで集材するのを、私は搬出業者へ下請けに出してきた。繁忙期には、1人か2人のチェーンソー作業者を臨時で雇用している。

夏の2ヵ月の間は外は決して暗くならない。それで午前7時から午後4時まで働ける。冬には日の光は6時間しかないから、作業時間は減る。冬には雪が私の仕事の邪魔をする。積雪が40～50cm以上になったならば、能率を上げて働くのは難しい。普通、雪は年に2～3ヵ月続く。賃金の歩合は樹幹の大きさと積雪深によって、1m³当たり3～16ユーロまで変わる。私は平均的な月で約1,500ユーロを稼いでいる。これは生活していくのには十分だが、金持ちになるのには十分な金額ではない！

サンドイッチを数枚食べ、コーヒーを2杯飲んで、その日の仕事に取りかかる。朝は数日、その上に粥を取る。仕事の間は食事休みを2回取り、その時はココアを飲んでサンドイッチを食べる。その日の仕事の後は、妻が用意してくれた美味しく温かい食事を楽しんでいる。

チェーンソー作業時には、安全用具が非常に重要である。だから、私は、目・耳保護付きの保護帽、安全ズボン、安全長靴、さらに手袋を着用している。また冬には、雪よけ用のネック・プロテクターを使う。最近は作業中、事故が起きたならばすぐに電話で助けを呼べるように、いつも携帯電話を持っている。

幸いなことに、今まで大きな事故に遭ったことがない。しかし、1981年の12月21日だったが、凍結木を枝払いしている間にチェーンソーのキックバック〔反発〕が起きた。ガイドバーがあごを打ち、チェーンがほおに切り傷をつけた。運良く、チェーン・ブレーキが作動したが、私には、ブレーキが命を守ってくれたときの事故を思い出させる22針の傷跡が今もある。

私は現在45歳で、妻と子どもが4人いる。妻は幼稚園で常勤の看護婦の職がある。私は大変元気なので、63歳で年金納付が満期になるまで森林で働き続けられると当てにしている。

請負業者の仕事は好きだが、 大変きつい職業になった。

インゲマール・サンディン、スウェーデン（男性）



1945年に南スウェーデンの小さな農場に私は生まれました。1949年に父は1台の小さな農業用トラクタを買い、林業請負業の小規模な副業を始めた。この仕事は農場の活動が少なくなる冬の間のよい副業だった。10歳からトラクタを使って補助的な仕事を始めたが、その仕事が大好きだった。父はその後、私に勉強して林業技術者になるように勧めてみたが、機械への関心が強すぎた。それでクレーン操作員の職に就き、その仕事は8年間勤めた。

最終的に私が林業に従事することになった機会は、ボルボ〔自動車会社〕が屋外試験場建設のため、ある地所を更地にする必要があった1969年のことだった。一人の友人と私で共同経営を始め、中古のフォワーダ〔木材の搬送機〕を1台買った。1974年にわれわれは会社の登録をし、ログマ・プロセッサ〔造材機の機種名〕を使って事業を拡大した。われわれはまた、2人か3人の伐採作業員に下請けの仕事を出した。今日、私は会社の単独所有者であり、会社には2台のフォワーダ、1台のハーベスタ〔木材の収穫機〕と機械移動用の1台のトレーラがある。終身雇用の機械操作員は6人いる。妻はパートで会社の事務仕事をして、私は機械操作に従事しながら全体の事業経営もしている。会社の経営は小さすぎて、経営担当者を雇う余裕は金銭的にない。

われわれの主な取引先は、森林所有者協同組合セードラと教会財団の二つである。仕事の3分の2はセードラから提供を受けている。取引先の一つでも失えば会社は破産を免れないから、私は取引先との良好な関係をよりどころにしており、現在、取引先との関係はよい。セードラと教会財団の両方に、われわれのための職業再訓練コースが用意されている。どのコースでも終了すると、参加者に資格取得に必要な点数が与えられる。点数の取得は、技能試験によって、受講生の技術力向上につながる。われわれ全員が文化・環境の保全活動に従事するグリーンカード〔労働許可証〕を持っている。作業に当たってわれわれは直接監督をほとんど受けないか、全く受けない自主的集団になりつつあるので、こうした資格をもっと取得することは欠かすことはできない。技能訓練の将来性も、今ではわが社の従業員にとっては重要な刺激となっている。

また、われわれは高い安全水準の維持に大変努力している。事故の危険な結果がどのようなものかは、会社に致命的な事故があった1985年に残酷に実証された。われわれが父と息子の2人のチェーンソー作業者に出した下請け仕事で、2人がプロセッサ〔造材機〕用に立木を伐倒している間のことだった。息子は風が伐倒方向を変えたことに気づかずに、伐採後も1本の本をずっと懸木〔伐倒木が他の立木の枝などにもたれ懸かること〕で放っておいた。1時間後、父は木の下で亡くなった息子を見つけた。

われわれの事業は発展の可能性があるが、しかし、いつも多くの脅威に直面している。競争がより厳しくなったと感じる。そして、結果としてわれわれは仕事からあがる利益を切り詰めた。われわれは何回か、単に付け値が採算をとれないという理由で、入札から引き上げを強いられたことがある。腕のよい作業員を採用するのも大変困難になった。われわれがこうした束縛状態の下で、ずっと猛烈に働き、労働日をより長く費やして埋め合わせするのはよくあることである。私自身も週に約60時間働いているから、家族のための自由な週末は減多に持てない。自由な時間があるときは、スポーツの練習に当てている。これは私の大事な趣味で、自分の健康を維持して、仕事量の多さに耐えられるよう助けてくれる。

この仕事はきついが、自分の職業が大好きである。けれども退職のときに、私のどの子も引き継ぐ見込みはほとんどない。一つの選択肢は、多分仕事を甥に引き渡すことだろう。ちなみに、その甥はすでに私の会社で働いている。

請負業者として働くのはあきらめた。

エーリック・セーデルルンド、スウェーデン（男性）



私は北スウェーデンのリュックセレの出身である。18歳で職業訓練学校を終えたとき、林業機械操作員として十分な訓練を受けていたが求職はなかった。当時、スウェーデン経済は深刻な不況にあった。だから請負の自営業を始めることに決めた。そして、私は初めて機械をいくつか購入したが、そのときは不況のお陰で割に安い買い物で手に入れられた。

景気が回復すると、私は徐々に自分の事業活動を拡張し、最後には4台のハーベスタ〔収穫機〕と3台のフォワーダ〔搬送機〕——数百万クラウンの投資だった——を所有することができて、10人から12人いた雇用者は仕事で忙しかった。けれども最も多忙な人間は私自身だった。競争は厳しく、結果として、収穫された木材1m³当たりのわれわれの賃金はますます下がっていったが、同じ時に燃料と他のコストは少しも下がらなかった！ この大きな負担と、機械稼働と雇用職員を維持する必要から、ついに事業の継続をあきらめることに決めた。家族のための時間はほとんどとれないのに、重労働という形で支払わねばいけない代償、機械と職員への責任は、事業の限界収益性の価値があるようにはとても思えなかった。

良い機械操作員というのは、多くの能力が必要である。彼（または彼女）は生

産志向で、機械修理が得意で、技術と生物学について詳しく、独立して仕事ができ、そして進んで長時間、働かなくてはならない。私は、現在、これらの能力が林業会社によって十分に認められていないのではないかと思う。私の昔の仲間の2人のように、多くの請負業者がもっと良い職業を探し求めて林業部門を去りつつあっても驚くには当たらない。仲間の1人は教師に、もう1人は警察官になるつもりだ。

私は1996年に会社を手放して、当初、大きな林業会社に雇われ、機械操作員として働いた。もうすべての機械を動かし続ける心配がいらなくなり、ほっとした。けれども会社はコストカットをしているところだったし、すべてが生産性の一点に絞られているように思われた。作業方法を改善する時間が、さらにその方法を育林の要件に適切に合わせる時間が、われわれには全くなかった。能率と仕事の質を上げるために必要なチーム作りの訓練が最小限まで減らされた。現在働いている人材が、かつての人材と同じようには評価されていないと、私は感じた。

現在、多くの人が小さな町と農村を離れようとしている。この事態が続けば、林業に適した人材を見つけるのが一層困難になるだろう。また、林業の生産区域が大規模になってしまった。そのことが請負業者を、週の間森林内に泊まりっぱなしにし、家を留守にさせている。それは、私と同世代の人々の共感を得てはいない。われわれはまるで振り出しに戻ったようにさえ見える。1930年代と40年代の林業労働もまた請負業者をして、週の間、家を留守にさせたのだった。

私は28歳になり、生き方をもう一度変えることに決めたところだ。非木材生産物を扱う仕事に取りかかるだろう。ベリー、ヘラジカとトナカイ肉の取引に、かなりの将来性を見込んでいる。休暇の季節は、大工仕事と合わせて観光事業で働くつもりでいる。また、観光キャンプ事業にも取り組んでいる。さらに、もし閑散期があったら、空いた時間を埋めるために、小規模の収穫事業に従事して臨時の林業労働に戻りたい。林業労働の必要性はいつでもあるだろうし、熟練労働が不足して、将来はさらに増えるだろうと思う。

昔の仕事と暮らしはずっと困難だった。

ブロール・レーヴグレン、スウェーデン（男性）



私が思い出すのは、北スウェーデンで林業労働を始めた頃のことである。大変困難な生活であり、労働条件は過酷で賃金は劣悪だった。だが私がその後の半世紀を終えたとき、状況は随分と改善された。靴職人だった父には小さな農地があり、乳牛を飼っていた。冬になると、6人の子どもがいる家族が生活していけるだけの副収入を得られる木材収穫の仕事を見つけて、父は喜んだ。

1919年に13歳で小学校を卒業した後、私は、林業会社で木材収穫の請負作業をしていた兄の他に伐採作業員が1人と馬の馭者が1人の、計3人の仲間に加わった。そして1週間後、われわれは労働現場に近い小さな仮小屋に泊まった。冬に、われわれはそこへスキーで行った。われわれは暖をとるのに藁と古いヒツジ皮を被り、並んで板ベッドに眠った。馬は一つ屋根の下に寝起きさせ、われわれはそこで濡れた衣服を乾かした。その臭いがどのようなものか想像できるだろうか！ 馬の馭者は餌を与えるため朝は一番に起き、それからわれわれにジャガイモ、肉とコーヒーの朝食を作った。週の初めにわれわれは新鮮な牛乳を飲んだが、週の最後には酸っぱくなった。その日の遅くなって、寒いときはたき火で体を暖めながら（または暑い夏の間は湖で涼をとりながら）、われわれは作業現場で食事休みを取った。

われわれは木の伐採に手鋸、枝払いに斧、さらに樹皮が凍結している場合は皮剥ぎは重労働なので皮剥ぎ鋏を使った。木材は馬で橇道^{そりみち}を水路まで牽引され、春期にはそこから木材が流送〔河川を利用して木材を目的地に運ぶ〕された。

深雪のときは、伐倒の前に、われわれは木の根元の雪掘りにショベルを使った。1936年から37年の冬の間、雪はおおよそ2mの厚さに積もった。集材するために、われわれは川に着くまでの3km以上の距離を、ショベルで雪を掘って、馬のための道を開かねばならなかった。木材は橇道^{きうま}まで木馬〔木製の橇〕に乗せて、手作業で引いた。それは本当にわれわれが耐えられる限界の労働だった。

全く疲れ切ったわれわれが仕事の後の日曜日に帰宅すると、妻たちは衣類の洗濯と繕いに、それから翌週用の例えば小麦粉、もみ付穀物、ジャガイモ、ラード、ミルクとコーヒーなどの食料を調達するのにかかりきりになっていた。われわれといえ、家庭にいて解決すべきことや収めなくてはいけない自分達の子どもの問題があった。

われわれへの支払い、会社の監督の決定次第だった。われわれは監督が決めた相場を受け入れなければいけなかったが、だまされているのではないかと疑った。われわれが稼いだ額は食物、衣類や道具を買うのにはとても十分ではなかった。前渡金が不十分なところに、作業時期の最後の春に最終的に賃金が決定されるので、われわれはしょっちゅう掛け買いが必要だった。だから家族は、庭と畑の自家栽培、それから家畜を飼育して命をつないだ。

長い年月、私はいくつもの異なる雇い主のために働いてきたが、仕事と暮らしはだんだんと変わってきて、今では前より楽になった。馬はトラクタにとって代われ、流送は道路輸送に代わられた。65歳で働いた森林から引退したときにわれわれは伐採にチェーンソーを使っていたが、枝打ちにはまだ斧を使っていた。われわれはもはや森林内の飯場で眠る必要はなく、毎日車で仕事場から家に帰った。賃金は独断的に決定されず調査に基づいていて、雇用者と労働組合間の協議による出来高払いだった。われわれは毎月給与を小切手で受け取ったので、掛けを頼む必要はなかった。

つらい職業人生だったが、私は健康を保ち、長い退職後の生活を楽しみ、2年前までは家具作りにずっと忙しかった。もしすべてうまく行けば、今から4年後に100歳の誕生日を祝えるかもしれない！ 子どもの1人が林学を勉強し、その子の息子も森林官になったことが、私には何よりの喜びである。

夫婦で協力して働きました。 夫は伐採作業で私は集材作業でした。

グドゥルン・オルセン、ノルウェー（女性）



1929年にスウェーデンとの国境近く、ハルデンに近いノルウェー南東地方の小さな農場で私は生まれました。

15歳で学校を卒業した後に、林業労働を始めて、秋と冬の間、弓鋸〔弓形をした支持棒に細い鋸歯を張った鋸、回し鋸〕と斧で薪を切りました。それがかなり得意で、男性と競うのも苦にしませんでした。春と夏にはわが家の農場で働きましたが、農場にはほとんどが放牧地の6haの農地と、7haの森林がありました。

20歳でハーラル・オルセンと結婚し、それから2人で協力して働きました。夫のハーラルは伐採をし、私は馬搬で集材をしました。私は、ブレーセンと呼ばれた、一緒に7年間働いた黒い雄馬が特に好きでした。雄馬は私の言うことを良く理解したので、馭するのは手がかかりませんでした。馬というのは人間のように多くを学んで、かなり経験を積めるのです。

2人の子どもの小さい頃に、私はどうやって林業の仕事と子どもの世話とをやりくりしたのでしょうか？　そうです、ハーラルは朝に木を伐採し、私は午後それを集材し、そして私たちは子どもを代わり番で世話したのです。

時がたつにつれて、チェーンソーとトラクタが現れ、私たちは生計が立てられるように、働き方を変える必要がありました。ハーラルはチェーンソーを使い、

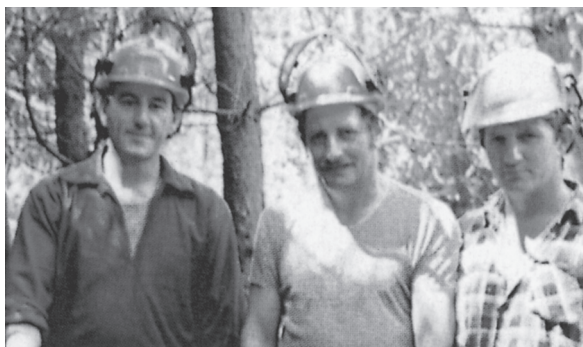
私はトラクタで林道端へ集運材する作業を続けました。それはまだ骨の折れる仕事でしたが、以前ほどはつらくはありませんでした。私たちは大抵4人の大山林所有者のために、出来高払い基準で週40～50時間働きました。農場の食べ物と副収入で、私たちは人並みの生活ができました。

私は67歳で年金を受けて、林業労働から退きました。しかし、農場でまだ働き続けていますし、今は息子が農場を経営しています。私は自分で丸太小屋を建設するのに、持ち山の木を伐倒しました。ローダの付いた私たちのトラクタで掘削をすべて行いました。息子と土地の職人たちは建物の完成を助けてくれました。今、私は大変居心地の良い住居となったこの丸太小屋に暮らしていますが、ハーラルが1998年に死んでからは独り暮らしです。彼はアルツハイマー病を6年間患ったのです。現在、小さな子犬と一緒にいます。以前飼っていた犬は1年前にオオカミの群れに食い殺されました。それは私には大変つらいことでした。

趣味は今も狩猟ですが、その趣味を私はハーラルとともにしました。子どもと孫のみんなが自然、林業、野生生物と狩猟に関心があります。だから孫娘の1人は林業技師になり、林学博士の学位を修得しました。

労働組合の仕事に関心があった。

エドウィン・ローランズ、イギリス（男性）



同僚と一緒にのエドウィン（左）

55 歳になる私は、結婚をして 2 人の成人の息子がいる。学校を修了した 40 年前に仕事を始めたが、当時は 15 歳で学校を卒業するのは珍しくなかった。イギリスの国有林管理と林業振興の政府機関である林業委員会の官舎がある農村地域に、両親と 2 人の妹と一緒に暮らした。両親は裕福ではなくて、私が家族を扶養しなければいけなかった。当時は農村地域の仕事は大変限られていて、それは林業の仕事か農場の仕事かのどちらかだった。

私は父の仕事に仲間入りした。父は熟練伐採者だった。父から斧と鋸の使い方を訓練され、われわれは冬期のほとんどもを巨大なナラとブナの伐採に費やした。われわれは林業委員会、すなわち 1960 年代に約 4,000 人の現場労働者を雇用した委員会で働いた。チェーンソーが登場すると、林業委員会はわれわれに適切な使用法の訓練を実施した。チェーンソーを使い始めたときは 16 歳だった。

われわれは出来高制で働いたので、伐採すればするほど沢山お金を稼いだものだった。伐採は、チェーンソーを使っても大変な重労働だった。昔のチェーンソーは大変重く、騒音とかなりの振動がしたものだ。保護帽、または目・耳保護具は支給されず、手袋も着用しなかった。

晩春の間、われわれは他の労働者と一緒に、苗木の植栽と、雑草の成長抑制

のため、数年生の植林地に化学薬品を散布する作業にしばらく時間を費やした。1960年代の間、われわれは化学薬品の使用時に防護服を着用しなかった。夏の数ヵ月は新植木周辺の草刈りに費やされた。父と私は2人とも、騒音と振動がずっと伴い、伐倒の危険が伴うチェーンソー作業から解放されるのを待ち望んだ。

父は数年前から、チェーンソーで仕事を続けるのは困難だと気づき始めて、仕事のペースを落とし始めた。厳しい肉体労働の労苦が父を害しつつあったのは明らかで、父は強度の仕事ができないことが気がかりだった。父は人生のほとんどを林業労働か農業労働のどちらかに費やして、最終的には59歳で早期退職した。そこで私は、伐採者の他の集団に加わった。われわれはほとんどの時間を伐採に費やしたので、期間中、他の仕事に慣れる時間が足りなくなった。

若い頃の私は、健康と安全問題に関心があった。その産業で起きている事故数、チェーンソーの騒音、振動と排煙の影響さらに化学物質の長期間の影響を懸念した。1970年代後半には、チェーンソー作業者と化学薬品噴霧者用の防護服の導入、さらに林業委員会が訓練を実施したチェーンソー作業者用の新たな伐採技術などのように、作業手順に関する多くの変化がみられた。

私は、地域での労働組合活動にも関わり、さらに1980年代に林業代表者として労働組合の全国委員に選出された。労働組合の任務は、地域レベルでの交渉を必要とした。また、健康と安全に関して改善見込みのある作業分野の特定と、再発防止に向けた事故調査を役割とする現場の安全代表者にもなった。1990年代、私は労働時間のほぼ50%を林業労働に費やし、50%を林業労働者の代表としての活動に費やしたものだ。労働組合は、林業委員会の上級管理者と仕事上の良好な関係を築いている。2000年に出来高制から月給制度へ移行されたが、私はこの交渉の関係者だった。今は自分の全労働時間を、林業労働者の代表として労働条件の一層の改善要求に費やしている。

新しい収穫機械の導入は、チェーンソーを使用する労働者数を減らした。しかし、収穫機械は新しい問題をもたらした。それは、長時間、起伏の多い地形で運用の稼働機械に着席しているあいだ、全身が振動にさらされることである。

林業委員会の直用労働者数は現在約1,500人に減少した。しかし直用労働者にはまだ果たすべき重要な役割がある。直用労働者の職務の一つは、森林管理を都市住民のレクリエーションニーズに合うように支援することである。なお、現在多くの下請け労働者もこの計画の実行に従事している。

昔の同僚の多くは職を失った。

ユルゲン・コーラン、ドイツ（男性）



私はドイツ民主共和国〔旧東ドイツ〕で生まれ育った。10年間の学校教育の後に建築者になったが、結婚後も年中家族と離れていることに満足できなかった。それで1975年、22歳になって仕事を林業労働に変えた。

1987年まではとても好きな職業だった松ヤニ採取者として働き、その仕事からは出来高制でよい金を稼いだ。松ヤニは伐採前の6年間、老木のマツから採取される。立木には冬に樹脂採取の準備がされ、春に樹脂が流れ出すように樹皮に連続して小さな溝が刻まれた。樹脂を採取するために、小さな容器が1本1本の本に固定された。1シーズンの中で、私は割り当てられた立木から10～20tの松ヤニを集めた。松ヤニは化学産業へ、様々な異なる用途の原料として供給された。

1990年のドイツ再統一の後、樹脂採取は不経済な存在として停止された。幸運にも1年早く、私は集材トラクタ操作の訓練を受けていた。それで間伐のマツ材を供給するブルックスウッドチップパー〔木材チップ製造の機種名〕を操作することができた。しかし3年後、この業務も儲からなくてあきらめた。

短期間チェーンソー作業員として働いた後に、選ばれてハーベスタ〔収穫機〕の操作訓練を受けたが、それはブランデンブルク州有林が購入したものである。

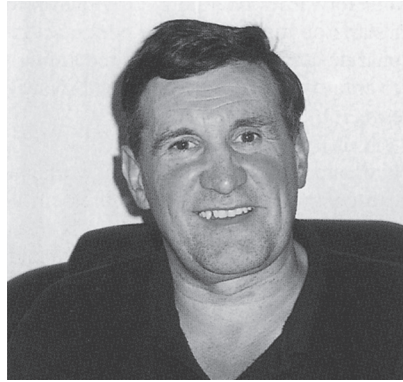
この機械は、一つには通常の生産作業に、一つにはクンスターシュプリングの林業労働者訓練学校の近くで訓練用に使われた。ハーベスタとフォワーダ[搬送機]操作員に対して3～4週間、個別訓練をする3人のインストラクターがいて、私はその中の1人だ。訓練はシミュレータに始まり、森林の中で続けられる。われわれが特に力説するのは、残存木への損傷を避けることである。われわれには、民間企業と州有林から機械操作員訓練の依頼が多数ある。

私は生産作業と訓練を交互にするのが好きだし、時々腰痛に苦しむが65歳の定年に達するまで続けたい。暑い時に、収穫機のエアコン装備の運転室で働くのは大変快適だが、そうでなければ丸1日働き続けるのは難しいだろう。

長期勤続の追加手当のお陰で、収入は時給22ユーロになる。妻は幼稚園で働き家計収入に貢献しているが、2人とも自分の村から仕事に行くのに車が必要である。娘は25歳で子どもが1人いる既婚者で、心理学を勉強しているところだ。18歳の息子は石工で働いている。われわれは持ち家に住んでいて、さらに家族全員に職があることは幸福であり、また現在の状況にかなり満足している。だが、私のかつての同僚の多くは林業の職を失った。それは機械化の別の側面である。

運良く二度の大怪我から 完全に回復した。

ハンス・シュタウダッハー、ドイツ／オーストリア（男性）



私はオーストリアの山間の小さな農場で育った。小学校の後は3年間石工の見習いをし、その後に兵役が続いた。それから建設現場で働いたが、冬の間はずっと仕事がなかった。1970年の22歳の時、南ドイツで働く1人のオーストリア人請負業者が仕事をくれた。チェーンソーの作業方法はもう知っていたが、仲間の労働者は必要な知識と技術がもっと身につくように私を助けてくれた。

ドイツ滞在はほんの数ヵ月にするつもりだったが、新しい仕事が好きなので留まった。1972年に、われわれは大森林地帯が風害でひどく破壊されたばかりの北ドイツに移った。丸太搬出用のティンバージャック〔フィンランド製の収穫機〕に乗り、集材機運転者としてハルツ山地で働いた。そこはトウヒの巨木で覆われていた。森林が皆伐されると、われわれはその地域に残り、州の森林署で通常の収穫作業を続けた。

私は現在も集材機の運転者をしている。けれども、われわれの収穫請負事業が伐採と集運材込みの場合は、私は職務をチェーンソー作業者と毎日交換した。操縦席に1日中座り、丸太取付用の牽引索を100mまで引っ張るのはかなり骨が折れるから、こうすれば仕事に変化がつけられる。作業にあたっては、立木と森林土壌に損傷を与えないよう注意することが必要であるから、搬出ライン上を運転

することだけしか許されない。伐採は州有林労働者が行い、われわれは搬出請負だけを任されることが時々ある。これらの州有林労働者は通常1日8時間労働で1時間の休みを取るが、われわれの労働時間といえば、自宅から作業現場まで自家用車で約50kmの距離を運転する時間を入れて10時間にもなる。昼食時にはオーストリア人の食習慣に従い、私はラードを付けたパンを食べている！

ハルツ山地はほとんどが険しい地形だから、集材機が転覆しないように注意が必要である。1977年に私に起きたことだが、集材機から投げ飛ばされ、腰を2カ所骨折した。幸運にも順調に回復して、3ヵ月後には職務に復帰できた。二度目の事故は、1本の丸太に牽引索を取り付けている間に、小さなブナの木が後ろから私を打ちつけて倒した。片方の肩を脱臼し、脊椎骨が折れた。これらの怪我も合併症を発症せずに治ったのは、幸運なことだった。

私は今、妻と出会ったハルツ山地の小さな村、リーヘンズベルクに暮らしている。妻は以前隣町の銀行で半日働いていたが、職員が減らされて職を失った。われわれは持ち家に住んでいる。1人娘がいて、彼女の連れ合いは収穫機の操作員でラウターベルク地方の州有林で働いている。その連れ合いはなんと5代目の林業労働者なのである！

仕事と妻に満足し、55歳ではかなり健康であると、今も感じている。もう7年か8年仕事を続けたいと思う。時間給としては十分な22ユーロをとり、社会保障も十分に受けて、州有林では評価の高い雇用者との関係もよい。

16 歳から 65 歳まで森林で働いた。

ヴィルヘルム・コッフ、ドイツ（男性）



私は、中央ドイツのベーザー川の河畔にある小さな村で、1936 年に生まれた。父はブルムバルトと呼ばれた面積 8,000ha の隣接する州有林で働く林業労働者だった。父には 10 人の兄弟と姉妹がいたが、私には妹が 1 人しかいない。父は 18 歳のとき、第 2 次大戦で戦死した。

私は 6 歳で村の学校に入学し、15 歳で卒業した。そして石工の叔父の手伝いをし、家の耕作地でも働いた。

16 歳になって、森林で働くのを許された。見習いとして 8 人の集団に加わり、そこで仕事の手ほどきを受けた。それから林業労働者の訓練学校に通い、横挽き鋸、斧と主な道具の使い方、安全作業の方法を学んだ。講師は、林業労働者の経験がある高い熟練技術を持つ専門家たちだった。私は一連の試験に合格して、熟練林業労働者としての訓練期間を終えた。そのお陰でより高い時給をとる権利が与えられたが、しかしほとんどの連中は出来高払いだった。仕事だけでしか訓練された経験がない年上の仲間たちは、学校から戻ってきたわれわれに懐疑的だった。しかし、われわれはよい道具と技術を使えば仕事は楽になり、効率的になることを彼らに納得させた。

1964 年に結婚し義理の両親の家に引っ越した。その家は 1938 年に、農林省の

林業部からの低利貸付と好条件で提供された木材を使って建てられたものだった。庭と作物栽培のいくらかの土地もあった。1970年代半ば、小規模農業がもうからなくなった頃に、農業の建物を観光旅行者向けの休暇宿舎に改造した。そして今は2人の娘の1人と孫の1人がそこに住んでいる。

1964年は私の職業上で幸運な年であり、もう一つの訓練学校で資格を得た後に昇進して監督になった。当時はたった28歳だったけれども、年上の労働者とは大変仲良くやれた。

ブラムバルトの森林はブナとトウヒの混交林で、大部分は極力天然更新に頼った択伐経営がされている。伐採から集材までの損傷を避けるためには、多くの熟練と注意が必要である。長い年月の間に機械が、例えば木寄せ、針葉樹の巻き立てと皮剥き等の、いくつかの最も過酷な手作業にとって代わった。最初のワンマン・チェーンソーはすでに1959年に導入されていた。

木の収穫の他にも、なすべきことは非常に多くある。それは天然更新の補助造林、ノロジカとアカシカ防御用のフェンス設置、若齢林の間伐、林道の補修、ベンチと避難小屋の設置、観光客用の遊歩道開設だ。

1976年と77年に、さらに数ヵ月間の訓練を受けた。責任が一層重く、特に初心者と訓練生を対象にした現場林業労働訓練に関する部署であるフォルストヴィルトシャフトマイスター〔森林官〕になるためである。小さな作業場が設けられ、正規の課外訓練活動が可能な森林の一区画が用意された。私はこれまでおよそ50人の若者に対して、基本的な木工と森林内の遊び場に設置する建造物、機械の整備、自然保護と狩猟動物保護を含むいろいろな業務を訓練した。

最近退職して、林業労働者として送ってきた極めて満足のいく人生を思い出している。異齢の混交林を見るのは大きな楽しみであるが、それは私がほぼ50年以上育てたものである。今もハイカー協会のメンバーの1人として、地域内に通じた遊歩道の整備の手助けをしている。さらに、私は持ち山の小さな森林の仕事でずっと忙しい。その森林は数年前に農地の周りに植林したのだが、今では初回間伐から自家用の木材を提供してくれる。

苗畑の季節職に十分満足しています。

シルヴィア・クルツパ、ドイツ／ポーランド（女性）



過去8年の間、南ポーランドのシレジア出身の私たち女性6人は11月から12月の6週間と3月半ばから5月半ばの2ヵ月、定期的にドイツに働きのいきます。本社を西ドイツに置く会社があつ、東ドイツのエーヴェルスヴァルデ近くの大きな苗畑で働くのです。

11月に到着すると主にするのが、苗木を掘り出して束ねる仕事です。春にはそれと同じ仕事をしますが、植林もします。時々、選り抜きの装飾用の木や灌木を引き抜くために鋤を使いますが、土が凍って根が深く長い場合には厳しい仕事です。しかし、例えば100mの長さの列で大量に育てられたナラやマツやダグラスファー〔ベイマツ、約100前に原産地の北米から移入された〕等の樹木については、レーキタイプのトラクタが根をほぐして土から離れるように苗木を起こし、土を振り落として簡単に引き抜きます。私たちは苗木を拾い上げて数を数えます。それから苗木は、もう一つのトラクタに装備された小さな装置で束にされます。

いいえ、仕事は特にきつくはありません。だって私たちはまだ若いのです。私は39歳で体が病苦を訴えることはありません。しかし、悪天候では仕事はもっと困難になります。もし大雨が降り、厳寒か深雪になったら私たちは全く働けません。

全員がラーティボール [ポーランドのラチブシュ] 出身で、祖先はドイツ人です。しかし共産主義の時代、学校や他のなにもかもがポーランド語でしたので、私たちはドイツ語よりポーランド語を上手に話します。しかし私は、両親とドイツ語で話しました。そして今、息子は学校でドイツ語を覚えるのに夢中です。鉄のカーテンが上げられてからは、その言葉が私たちがドイツで職に就くのを助けてくれました。私たちは、それに大変満足しています。

家のあるところはクシザノヴィツェと呼ばれる、かつてはドイツのクロイツェンドルフとして知られた小さな村です。小学校には8年間、中学校には3年間通いました。その後は3年間パン屋で働き、衣類工場で5年間働きました。息子が1990年に生まれてからは、家事労働が沢山あったので、その仕事をあきらめました。私たちの家を建てるのには何年もかかりました。野菜を育て、暮らしを助けるためにニワトリを飼育しています。

夫は大型の土木機械の操作員で、月250ユーロ相当を稼いでいます。苗畑で私は時間当たり5.50ユーロをとっています。1日9時間の勤務で土曜日には半日の超過勤務です。私たちは無料で小さなトレーラーハウスに住んでいます。飯場はかなり設備が整っていて、快適です。美味しい料理、洗濯機、暖房施設があり、ポーランド番組を受信するテレビもあります。私たちが食物を買うのはすぐ近くの町で、飯場からその町までのバスの往復券は75ユーロです。すべての支出を差し引いた後、私は月当たり約750ユーロを貯金できますが、これはポーランドにいる夫の3倍の金額です。それはとても大きな額の副収入で、私たちが車を買うことさえも可能にしてくれました。



夏には木を切り、冬には スキー・インストラクターで働いている。

ミシェル・ブラン、フランス（男性）



家があるところは、サヴォア・アルプスの村、テネソールだ。父を亡くしたときは兄と私はまだ子どもだった。それでわれわれは田舎で暮らす術の全部を祖父から学んだ。約8haの面積の家族農場で大きくなったが、農場にはウシとヒツジがいて、稼ぎ用のリンゴを栽培する果樹園もあった。5月遅く、われわれはヒツジを山地の高い牧草地に上げに行き、秋に犬を従えたハンターたちが来る前に牧草地から下げた。今日では兄とその家族が農場を経営しているが、兄はまた山間で別の仕事もしている。

私は6年間、村の学校に通い、1958年の14歳のとき、他の数人と共有林で働き始めた。一緒に働いた人たちは、例えば植林や当時はカラマツ製だった雪崩制御用の頑丈な柵の建築等、いろいろな仕事をした。

自分にとって冬の最大の喜びはスキーだった。ピストゥール[ゲレンデ監視員]として、クリスマス休暇以降に大挙して来る観光客のためにゲレンデ整備を手助けた。

兵役の後にスキー・インストラクターの免許状を、それから応急看護員の免許状も取った。さらに自営の木材収穫事業者として働ける職人カード[証明書]を取得した。このように夏の立木伐採と冬のスキー・インストラクターの仕事に備

えて、準備に抜かりはなかった。

冬の間、普段は製材所の請負仕事を2人一組で行った。製材工場が立木を購入し、われわれは伐採をした。作業現場は主に高齢のトウヒ林のある急斜面で、最も大きな木は1本で8m³の材積があった。すべて順調に行けば、われわれは1日80m³の立木を伐採できた。伐採後の丸太を下り坂で滑落させるために、木材の荷揚げ、転がしや出しに大変便利な長い柄の付いた鉤、つまり鳶口^{とびぐち}を使った。

私は他人の仕事をよく見て初歩の技術を習得し、長年かけて腕を上げた。だが、今までに正式な訓練は受けたことはない。大木を動かし、斧とチェーンソーで作業することが危険なのは容易に理解できた。それだから十分注意を払って働いたので、今まで重大事故に遭ったことはない。さらに私は共済農業保険の適用も受けていた。

激しい肉体労働を行う上で大変重要なことの一つは体に良い食べ物だ。いつも午後は、大体1時30分から4時まで火で温めた食べ応えのある食事、美味しいスープと一杯の美味しいワインが付き、その後に昼寝付きの昼休みをとった。だからわれわれは、班がそろって午後の仕事を続けるのに耐えられたのである。それから暑い夏には必ず5～6ℓの水を確保して、十分に飲むようにしなければいけなかった。——もちろん、ワインはもういらない！

仕事の行き帰りの移動は自家用車で2～3時間かかった。車は、われわれが近場で働くときは悪天候の間の避難所として役立ったが、その他の時には伐木搬出現場に小さな避難小屋を建てた。

夏の期間はこのやり方で約35年間働いたけれど、とうとう見切りをつけた。他の出費もあるし、それに高い税金も払いたくなかった。今は自分で建ておえたすてきなシャレー「伝統的な木造家屋」がある村の近場で仕事をしている。今でもまだ、あちこちで木を切っていて、建築現場の仕事もしているところだ。

一方で、私のスキー・インストラクターとしての生活も以前のように続いている。1970年からは、有名なスキーリゾート地、メリベルのインストラクターチームに所属している。そこで仕事仲間のやもめと一緒に暮らしている。秋の好きな気晴らしは狩りである。今しがたも、山の林であった狩りの集まりから戻ってきたところだ。今回幸運だったのは私ではなくて、早足で現れたので撃ち損じた雄ジカの方だった。

仕事と暮らしには正しい秩序がある。

アレン・ファノー、スイス（男性）



もう少しで 30 年前のことになるが、私が森林で働き出したのは 21 の歳だった。その時は 5 人の労働者の集団だったが、今ではわれわれは 2 人の組で働いている。地形がそれほど険しくないところでは、請負業者が操作する収穫機といった機械の類がとって代わったからである。

仕事仲間は私より 10 歳若い。仲間は私と同じく技能証明を取得するために、スイスにあるフランス語圏林業労働訓練センターの訓練に週に 1 回、2 年間通った。われわれが働くのは海拔 500m から 1,000m の標高に及ぶジュラ山地のコミューン〔基礎自治体〕林がほとんどになる。その森林は、低山地帯の広葉樹林と高山地帯の針葉樹林でできている。地形は平野部では若干の平坦地を伴うが、大部分は山がちで急峻である。

われわれはコミューンに雇用されているが、受け取る時給は 30 スイスフラン強になる。コミューンは社会保障をつけて、毎日の食事手当も 15 スイスフラン支給している。機材と安全用具は無償で与えられるが、作業現場が約 15km の範囲内では自家用車での交通費は自分たちで負担している。

作業は 1 年間を通じて変化に富んでいるが、これは私には向いている。伐採は 1 本で材積が数 m^3 にもなる老齢樹の高木林で実行される。今、われわれは天然

林の混交林で第1回の伐り捨て間伐と植林を行っているところだ。今から数年後には、暖房設備用の薪材生産に、ハーベスタ〔収穫機〕が第2次間伐を実行するだろう。最近の植林は、唯一例外的に、例えばトウヒ林の風害があった平地でしか行われていないが、そのトウヒ林は現在ナラ林に転換されつつある。ノロジカ〔小型のシカ〕が沢山いるから、そうした植林地には保護が必要である。また、われわれは林道を開設して整備し、定期的に共有放牧地の柵を修理している。あまりの悪天候で屋外作業ができないときは、室内の作業場でピクニック場と遊び場用のベンチ等のいろいろな木製の工作物製作に従事している。

労働時間は12時から1時までの昼休みと午前午後の各15分の休憩を入れて、午前7時から午後5時までになる。これは、1日にほとんど7時間もチェーンソーを操作するということである。しかし、われわれは何年もの間、聴力保護具を使ってきたし、聴力検査も1年おきにある。今までのところ、私に機能障害はない。体調はよいし、これまで重い病気にもなったことはない。一度ひどい事故に遭ったことがある。その時は足を木の根の陰にとられて転倒し、すねを折り、2ヵ月半仕事を休んだ。バイザー〔^{まびさし}目庇〕と耳覆い付の保護帽、保安ズボン、保護着と安全靴といった保護具の着用は、夏にはかなり暑くなることがある。しかし、そうしたことには慣れているし、われわれは決して無防備で働いてはいけない。

小さな集落ジュルティニーにある11haの両親の農場で私は育った。それから学校を卒業した後に、農場で数年間働いた。父が死んでから森林の仕事に加えて、現在は農場を経営し、小麦、トウモロコシ、菜種、エンドウ豆を栽培している。収穫は請負業者任せにしている。妻は週に2日、ローザンヌの近くで多言語を話す電話交換手として働いている。21歳の息子は農業見習いの後、近くの大きな農場で働いている。娘は今年中に学校を終える見込みで、次は大学の勉強を始めるかもしれない。

こんなふうに、私の仕事と暮らしには正しい秩序がある。世界中にひどく広がった経済的、政治的対立の影響を受けないで、これが続いてくれるとよいのだが。

自分は定評のある個人請負業だ。

ラミズ・ヘタ、スイス（男性）



私は、コソボの小さな村で生まれた。われわれは家に9人の子どもがいたので、大きくなったならば私はどこか他の場所で仕事を探さなければいけなかった。

村の小学校と近くの町の中学校を終えた後は、ホテルとツーリズム免許の訓練を受けた。それからクロアチアのツーリストセンターがあるドゥブロブニクへと北に向かったが、そこは当時まだユーゴスラビアだった。私はレストランでウェイターの職を見つけた。ある日、スイス人女性と会い、彼女と恋に落ちた。彼女を追いかけて、私の年上の兄の1人がすでに園芸と農業に従事していた会社があるスイスのジュネーブに行った。私は兄の仲間に加わり、エラグァー〔庭師〕を専門職にして、木の刈り込みと剪定ばかりか伐採と他の仕事もした。

ジュネーブは公園と私有地に数千本の立派な木を抱く緑の都会だ。市の林業・環境部局は木が良く維持されるように努力している。伐採はすべて許可を必要とし、老木の撤去の後には、若木がその場所に植林されるよう義務付けられている。

私が木を扱う仕事をするのは、初めてではない。本国では、われわれはチェーンソーで木を伐採し、短く切って薪にした。スイスで私は仕事に関してさらに経験を積み、伐採、木登りと剪定の講習に通った。高さが20～30mある木の作業時には、常に十分な装備をし、道具をプロとして使用し、十分に注意しなければ

いけない。最近もジュネーブである木登りが木から落ちて死亡した。私は軽い怪我は数回したことがある。一度、チェーンソーで腕を切り数針縫ったことがあるが、1週間後に仕事に復帰できた。

現在、特殊な業務をしており、いつも3月と4月が納期になる。その仕事は、オーストリアクロマツにつく行列毛虫の巣を切り取ることである。クロマツへの過度の被害を避けるため、地方自治体の規則では、毎年巣を除去し焼却する必要がある。巣は普通枝の先端にあって、たどり着くのは難しい。私は自分の登山用具(スパイク、2本の鋼線付きの樹木用安全帯、長い登山用ロープとアルミニウム製の繰り出しハシゴ)と長さ6mのポールにつけた剪定鋸を使っている。ずっと下から助手が私を巣に誘導するが、繁った樹冠の中にあるので簡単にはわからない。

スイスに着き、永住してから現在12年が経った。ガールフレンドと結婚し、3人の子どもがいる。妻は薬局で働いている。私はスイス国籍をとって、ジュネーブに十分溶け込んだ。こんな生活水準の高い法治国家に暮らせることは格別の恩恵である。

スイスに来て3年後に最初の会社を辞めて、もっと給料がよい会社に移った。そこは剪定仕事で時給35スイスフラン。悪くなかった！　だが、2年前に個人の請負業を開いた。ピックアップトラックが1台と自分持ちの道具がある。前と違って今は社会保障と災害保険の支払いは自分持ちだけど、以前より楽しいし、野外の自営業は好きである。もちろん作業が容易なところでは油圧式ハシゴがおなじみであるにしても、ジュネーブに木登りは沢山いないし、仕事には不足していない。大変元気だし、老齢年金が受け取れるまで仕事を続けるつもりである。もしも若ければ、樹木栽培と造園の訓練を受けて、野外の自営の仕事を探すかもしれないと思う。

車はがらくた市のようです。

クロチルデ・ボーデン、オーストリア（女性）



私は49歳で4人の子供がいます。一番年下はまだ小学校に通い、他の子どもはすでに家を出てしまいました。夫と私は小さな農場を経営しています。

20年前、農場からあがる僅かな収入を増やすため、私は副業を探しました。私たちが住む地域、ウィーンから遠くないヴァルトフィエテルでは、特別な専門的技術がなく高等教育を受けていない人は容易に職を見つけられません。それだから若者のほとんどは都会に移っています。しかし私は、ある宗教的な基金、シュティフト・ツヴェットル〔ツヴェットル修道院〕が所有する私有林の仕事を見つけました。

私がそこで働き始めたときに10人の女性が雇用されましたが、今は3人しか残っていません。賃金節約のために雇用は減らされたのです。植林の多くは、現在では天然更新に置き換えられました。

私の主な仕事は、春にはスプラース〔トウヒ〕とカラマツの植林で、時々は広葉樹も植えます。私たちは夏には、植林地の下草刈りをしています。また、秋には、ノロジカの幼木への食害に備えて防護物を据えるために、何マイルも何マイルも歩いてゆかなければいけません。

その上農作業も集約的なので、夏は私たちの仕事のピークの季節です。私はい

つも朝4時に起きて6匹のウシを搾乳し、子どもに登校の用意をさせています。そして森林から帰ると、夫はすでに、農場で干し草作りと他の仕事の手伝いを待っているところです。夜には小さな子の宿題の世話をしながら、翌日の食事の用意をしています。

今までこうしたすべてのことが順調にきたのですが、不幸なことに母が重病になってしまい、看護を必要としています。そのため私は、さらにとっても大きな重荷を負うことになりましたが、何とかやっています。

森林の作業はいつも野外ですが、私は農作業で慣れています。雨降りのときは濡れるので、着替えます。そのため、私の車中は時々衣類があちこちに散らかって、がらくた市のようになります。1日に4回服を取り替えることもあり得るのです！ 腰が冷えないように注意しなければいけません。ひどい腰痛のため、今まで何度か医者に行かねばならなかったのです。仕事中にたびたびかがむのも、腰にはとても悪いことです。

林業労働の支払賃金は大変低いのです。私の収入は同僚の男性より少ないのです。しかし一番の問題は、冬が始まると失業手当しか受け取れなくなり、私が一時解雇されることです。これが私の収入を半減させるから、年金の負担金支払いができません。

けれども、私は今でも林業労働者という仕事が大変好きです。そして毎春、その仕事に戻ることを楽しみにしています。それは骨の折れる仕事ですが満足していますし、変えるつもりはありません。

刑務所では 安全な作業手順を考える時間があった。

スタンコ・スロディ、スロベニア（男性）



私は、森林が豊かな地域、コンジスカ・ガラ山脈のふもとにある農家に生まれた。何年もあとに、今暮らすところから遠くない場所に自分の家を建てたが、それは森林で40年間働いてきた後のことだった。

みんなが手工具しか使わなかった1930年代の頃、父は私に初めての林業労働を手ほどきした。ある日、われわれが送電線近くの木を伐採していたところ、1本の木が誤った方向に倒れた。爆発があり、停電となって大きな損害が出た。われわれは無傷で避難したが、その後に刑務所投獄の実刑判決を言い渡された。刑務所では安全な作業手順について、考える時間が山ほどあった！

しかし、それは私にとってよい授業だった。林業労働で必要とされるのは勇気や闇雲な力ではなく、危険を回避しよい仕事をするための確かな知識と技術なのである。同様に道具を正しく整備するのも不可欠である。そこで私は、ベテラン

の労働者から学ぶように心がけ、訓練学校へ行き、技量上達のあらゆる機会を利用した。勤勉に取り組んだお陰で、他の労働者を訓練する職に任用された。

手鋸が次第にチェーンソーに置き換えられた 1960 年代の頃には、伐採技術、作業組織、チェーンの歯の目立て、機械整備のように、学び、慣れるのが必要な新しいことが山ほどあった。私はこれらのあらゆる新しい技術の習得に精を出した。そして、先進的なスカンジナビアの作業について訓練を受けるためスウェーデンに派遣され、特に枝払い技術を自国の仲間の労働者に伝えた。

われわれはチェーンソー作業で、最初はむしろ不快に感じた保護帽の使用を要求された。しかし私はずっと着用しなかった。ある日私が丸太を短材に切っていたところ、突然チェーンソーが跳ね返り、私の頭を打った。運良くその時は保護帽を着用していたが、打撃を受けたヘルメットは一部分が切り取られた。その後はいつも保護帽を使用している。致命的な負傷とは言わないまでも重大事故から私を救った保護帽は、注意喚起の品物として壁にかかっている！

もしも若ければ、 もう一度同じ仕事をするつもりだ。

ヤネス・ローバン、スロベニア（男性）



私は、2002年に55歳の定年を迎えるが、職業人生のうち3年間は重労働の仕事であったので、それを2倍して数えると、40年間、林業労働に従事したことになる。

私は、これまで沢山のいろいろな仕事をした。働き始めた年に父は馬搬の集材を教えてくれたが、私はそれが大好きだった。当時われわれは森小屋に住み、自炊したが、後には女性がわれわれのために料理してくれた。夏にはわれわれは夜明けから日暮れまで、12時間かそれ以上働いた。後にはマイクロバスでの移動が用意されたので、われわれは家で眠ることができた。その次に私は働きに行くのに自家用車を使い、走行距離に応じた手当を受け取っていた。

約10年間、私は到達困難な山地に林道を開設するために削岩機を使って働いた。それはきつい仕事で、両手に伝わるその強い振動は、長期間耐えられるものではなかった。

農業用トラクタが馬にとって代わると、われわれは丸太をトラクタ後部に鎖でつないで集材したが、悪路になると前輪が地面との接触を失った。危険なやり方だった。後になってトラクタには、ケーブルウインチ、アンカープレートとフロントウエイトが集材用に取り付けられた。最終的に私は、操作がもっと容易で安

全で生産的な運転キャビン付きのホイール型集材機を運転した。

私が森林でやった最も厳しい仕事の一つは、ヨーロッパモミの大きな丸太の樹皮を皮剥ぎ鋏で剥離することだった。われわれは、土場での木の皮剥ぎのために機械が導入されたときは喜んだ。ブナの燃材を、大槌とくさびで割ることもまたつらい仕事だった。われわれが使った最初のチェーンソーは12kgあって、他の道具と一緒に持って森を上り下りするには相当重かった。われわれは、最初はそれを伐採にしか使わず、横挽きと枝払いはまだ斧で行われた。それから小型の1人用チェーンソーが登場すると、斧の消え去る日々が数え上げられた。また伐採と集材の組み合わせ作業は、例えば懸木^{かかりぎ}を取り払うときのように、木材収穫を以前より容易にするのに役立った。

私はいつも出来高制で賃金を支払われた。そして几帳面に道具——さらに私自身——をよい状態で管理していたから、高い賃金をとれた。仕事用のシャツを2枚いつも携帯し、1枚が濡れると取り替えた。40歳で、恐らく3ヵ月以上病気をしたことはなかった。しかし小さな負傷（切り傷と打撲）は別として、もっと危険な負傷は三度した。一度は斧で足を深く切ったこと、二度は脚の骨折である。

私は今までに家を一軒建てた。結婚して2人の息子がおり、その1人は林業技師になった。退職後はヒツジとヤギの飼育、それから家の玄関の写真に見られるような古い伐採道具の収集を楽しみにしている。また、木材の切り出し競争にも参加し続けるつもりだ。本当に自然に囲まれて働くのが好きであるし、もしも若ければもう一度同じ仕事をするつもりだ。

トラクタ購入の借金返済に 6年かった。

ペトル・ニエメツ、チェコ（男性）



実をいうと私は林業技術官になりたかったのだが、入学から9年後に学校を卒業したときは、この職業への希望者が多くて採用されなかった。それで、林業労働者の全寮制訓練学校に2年間行った。本当にそこが好きだった。18歳で熟練労働者として、プラハの西約50kmにあるルツナ森林管轄区で職を得た。その地域には1万5,000haの森林があり、平地か山がちの地形に育つトウヒとブナが大部分だった。

最初に私は伐採班でチェーンソーを使い、パベル・コウツキーと一緒に働いた。1987年に3人目の労働者、パベル・ペシエクが集材機持ちで加わり、われわれは伐採と集材をした。4年後、われわれ3人は森林管轄区の直接雇用から請負仕事に変えた。この写真には、私と仕事仲間が両側に写っている。

最初はすべてがうまく行ったが、われわれが新しい集材機の購入を必要としたときに、銀行は融資を組もうとしなかった。私は機械の賃借に自宅を抵当に入れなければならず、借金の返済に6年かった。

次に、いくつか別の問題が起きた。われわれの仕事の支払いが遅れたことだ。さらに1997年以降、われわれは生産量が主伐より少ない間伐の時に大抵雇用されていたから、大きな請負額はとれなかった。しかも、今や持株会社数社がその

森林を管理していた。それらの会社に関心を持つのは高い利益だけだから、大きな請負事業体と仕事をするを選択する。だから、小規模な請負業者はその利益を守る組織が必要である。われわれには妥当な請負額と年間雇用が必要なのである。

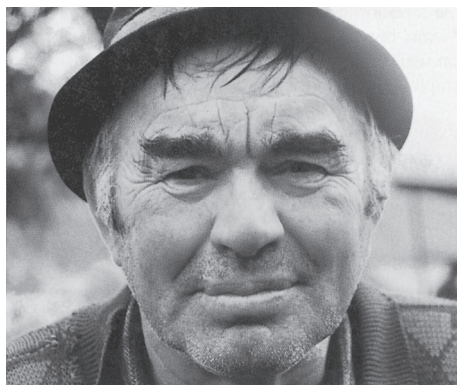
立木の収穫は危険な仕事で、林業労働者の事故補償をいともぬ保険会社は多くはない。かつて私は森林管轄区の補償を適用され、二度の事故の際に会社から補償金を得た。私は一度チェーンソーで脚を切り、4週間仕事を休んだ。そのとき、われわれにはまだ耐切断パッド装備の保安ズボンがなかった。二度目の事故はトラクタの作業中に起きて、欠陥ハンドルが私の頭を打ち骨折した。今度も4週間の治療期間だ！ だから今、われわれは大変用心して、役に立つ安全用具はすべて使っている。われわれはまた、チェーンソー作業とトラクタ運転を定期的に交替している。

私は現在41歳で、年に一度健康診断を受けている。チェーンソーが原因の白^{はく}蟻^{ろう}病は患っていないが、15%の難聴を患っている。その他の点では全く異常はない。われわれの労働時間は全く弾力的である。夏には朝6時から働き始め、8時から10時間働いている。冬には1時間遅く始め、8時間しか働いていない。必要ならば超過勤務もしている。

こうした困難はあるが、私は仕事に満足し家族にも満足している。妻は店員として働いていて、息子はコンピュータ科学を勉強している。娘は前に中学校を卒業し、今は自然保護と景観管理の勉強を望んでいる。

もしも若ければ、 西ヨーロッパでお金を稼ぐつもりだ。

ヴェルギール・ポシュカ、ルーマニア（男性）



私は、今までの全人生をルーマニアのモルダヴィア地方の小村、ヴォロネツで送った。ここは沢山の針葉樹のある山がちな土地である。古い男子修道院が一つあり、今では旅行客が訪ねてきて、何人かは村に宿泊している。

私は、昔から今まで、ずっと林業労働者である。また、一区画の土地があって、ウシ、ブタとニワトリを飼育している。甥のクリスチャン・コジャーリ（右の写真を参照）と一緒に働いている。われわれは、クリスチャンの父と3人の組だった。しかし、その父は木が本人に落ちたときひどく怪我をして、その後亡くなった。森林の仕事は危険である。1本の木が私の脚を打ったのが原因で、現在少し脚を引きずっている。そして、クリスチャンは19歳だが、1ヵ月前、1本の木が本人の近くに落ちてきた。幸いそのときは事故を免れた。クリスチャンは村の学校に通い、自動車工の見習いをした。彼はできれば運転免許を取って、トラック運転手になるのを望んでいる。

現在、われわれ2人は村の近くのトウヒ林を伐採しているところである。われわれは、伐採にロシアのドゥルージバ製のチェーンソーを、さらに枝払いには斧を使っている。集材は馬搬でやっている。私には、私の指示をすべて完全に理解する老馬が1頭いる。われわれの2頭目の馬は若くてまだ調教中である。

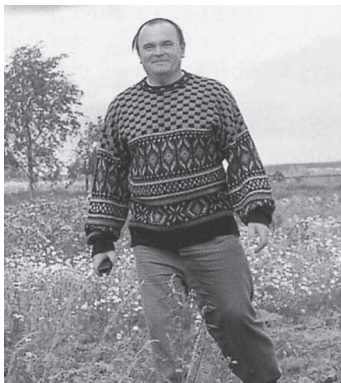
森林官は立木に極印^{ごくいん} [必要な印を打ち込む] し、われわれは伐採から横挽き [玉切り]、さらに丸太の販売からトラックに積載する土場への集材までの全作業をやっている。われわれの賃金は収穫本数によって支払われている。チャウシェスク支配下の時代の長年の勤務のお陰で、62歳の私も少額の年金を受け取っている。実際問題として、その時代にもっと伐採する木材はあったし、もっと安定した収入があったので、われわれは今よりもっと裕福だった。

森林の仕事は骨が折れて、危険で支払いもよくない。もしも若ければ、お金を稼ぎに西ヨーロッパに行くつもりだ。村人の1人は5年やって、金持ちになって帰ってきた！



ゼロから始めなければいけなかった。

オレーク・ルネゴフ、ロシア（男性）



私は、モスクワから約 1,000km 離れたウラル山脈西斜面にあるチュソヴォイという町近くの小さな村、ヴェールフニャヤに生まれた。

ソビエト体制下、われわれの地方にはリマンスキー DSK [住宅建築コンビナート] と呼ばれる大きな木材加工コンビナートがあって、年に約 30 万 m³ の挽き立て材 [製材品] を生産した。コンビナートはパーティクルボードとプレハブ住宅も生産した。

1980 年代半ばにソビエト連邦が崩壊すると、このコンビナートのすべてが破綻した。これは、木材収穫のために雇用されてきた多くの政治犯が釈放されたことが理由の一つだった。そのため、木材供給ばかりか木材製品の販売も、さらに生産基盤が丸ごと壊れた。土地の人たちは産業設備を略奪し、廃墟だけが残った。

私が 1990 年代半ばに兵役を終えたときには失業者が沢山いて、職はなかった。国家が救済できないのはわかりきっていた。さらに、銀行は新設企業の設立に融資する用意がなかった。それでわれわれは、何から何まで自己資金に頼るしかなかった。

私は運よくスウェーデンから、チェーンソー駆動で低価格の移動式小型製材機を手に入れられた。これが私の会社レスサルビスの始まりだった。最初に私は枕

木用に材を切ったが、あとでわれわれは、小規模製材工場のネットワークを介してイタリア、オーストリア、ギリシャとハンガリー向けに販売可能な建築資材の生産を始めた。われわれは、電動鋸を使用し、屋根はあるが暖房なしで作業する古い製材工場に生産の一部を移転して、経営を拡大できた。

この仕事を始めたときは、われわれは村民の中で小さな集団だった。しかし今ではレスサルビスは70人の常勤者を雇用し、冬場は100人以上を雇用している。

伐採と枝払いは、ほとんどが旧式の軍用チェーンソーで行われる。次に、伐採木の一部が土場で造材されるが、その道路端までの集材には旧式のクローラタイプの林業トラクタが使われる。われわれには生産物の荷揚げ、巻き立て、荷積み用の機械がないので、完全に人力に頼らなければいけない。これはつらい労働だが、われわれの地域では利用できる唯一の労働なのである。われわれは利益を投資して、その状況を徐々に改善できるようにと願っている。

会社の労働者のうち、伐採と製材工場は出来高払いである。その労働時間と稼ぎ高は、天候条件と時期次第で変動する。われわれは日曜日と他の休日込みで、通常12時間と隔日のシフトで働く。木挽き〔伐採〕作業者は、現在の状況では高い賃金である月額約200米ドルを稼いでいる。

1万2,000haの森林地域の保護

マテウス・ゲンナージ・イワノヴィッチ、ロシア（男性）



私は、シベリアのクラスノヤルスク地方にあるトロイツク村に生まれた。1974年に学校を卒業した後、通信部隊で兵役に就いた。その後は、2年間皮なめし工場で働いた。次に木材産業に就職して、18年間トラック運転手として雇われた。仕事は、丸太を森林から製材工場に搬送し、木製品を工場から顧客に、または客車に積み込むために搬送することだった。最後に私は、森林局からトロイツカヤ駐在の森林管理官に採用された。

私が責任を持つのは1万2,000haの地域である。職務は主に森林を保護し、森林伐採と植林を監督することである。われわれは、毎年約60haを植林し、さらに野生生物管理も手伝っている。

管理する森林は、針葉樹と広葉樹の混交林である。主な樹種はマツ、カラマツ、ドイツトウヒ、ヨーロッパモミ、ヒマラヤスギ、カバノキとポプラである。野生生物は豊富で、アカシカ、クマ、オオカミ、オオヤマネコ、キツネ、ミンク、ビーバー、カワウソ、エゾライチョウ、ツルと沢山のカモがいる。

私の悩みは自動車なしに森林を巡回していることだ。自動車は主任（写真を参照）しか使えない。私の1日の労働時間は通常午前7時から午後5時まで続く。われわれが森林火災と戦わなければいけないときは、仕事は火が消えるまで続く。

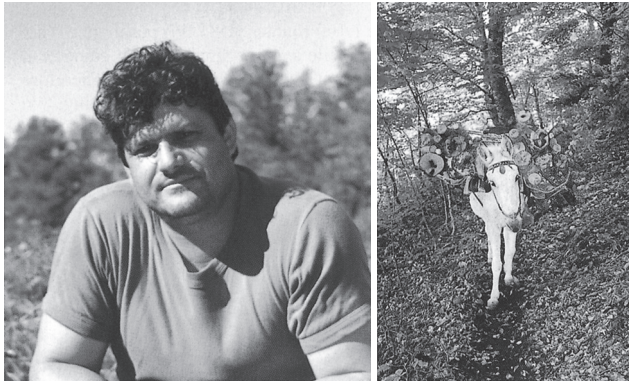
賃金はかなり低い。私は月に 1,100 ルーブル（30 米ドル）を得ている。その金額は私自身と妻、そして子どもの生活を維持するには少なすぎる。しかし、村には他の有給の仕事はない。それだから、われわれはブタ、ニワトリとアヒルを飼い、そして私は魚釣りと狩猟に行っている。われわれはまた、販売用に樹実を採っている。



魚釣りから戻り、丸太小屋の正面で兄弟と一緒にマテウス（右）

林業労働者協同組合の 仕事に満足している。

ジョージ・ヴァキラス、ギリシャ（男性）



私の家は人口 1,100 人の村、タクシアルヒスにある。われわれは、国の最北にあるハルキディキ地方の山地の高所に暮らしている。山地を覆うのは、われわれの主な収入源であるナラとブナの森林である。森林のほとんどは国有林であり、テサロニキ大学の森林官によって管理されている。

村出身の 20 人とともに、私はホロモン林業労働者協同組合の組合員だ。組合には伐採用具、チェーンソー、ラバ、トレーラ付きトラクタと帯鋸がある。森林署長は、組合に立木代金払いの伐出契約を与える。われわれは森林技師が極印した木材を収穫する。われわれは木を伐倒し、横挽き〔玉切り〕し、さらに組合用の薪の集積場に運搬している。そこでは、木材を暖炉に適当な短材に切断するために帯鋸が使用される。われわれは、薪の販売からいい利益を上げている！

われわれの仕事のやり方は、私が 20 年前に協同組合に加入してからほとんど変わっていないが、森林は変わった。大径木がほとんどなくなってしまい、今、われわれは小径木の間伐を仕事にしている。そんな条件では、ラバの使用が短材の束を林道端まで運ぶのに便利である。ラバは仕事を大変良く知っているから、信頼できる仲間である。以前、われわれは 20t の木材が入る大きな窯で炭を作ったが、今では減多に行われない。

われわれは保護帽やこれらの類の保安用具を全く使わない。今まで何も深刻なことは起きなかった。起きたのはただの小さな切り傷か打撲である。年長の労働者は私に、仕事を教えてくれた。われわれは機械が動くように何とか維持管理する。要するに、われわれにはそれで十分なのである。

私は森林の仕事が好きである。そしてわれわれは集団で大変うまく仕事を進めている。夏には、われわれは早朝から働き始め、暑くなる頃に仕事を中断する。1年のうち寒期には仕事を8時頃に始め、昼食休みをとって午後も働いている。

森林署は、われわれの協同組合を年に約9ヵ月雇用している。道具、機械、燃料や他の代金を支払った後でも、この期間に1人当たり約2,500ユーロの稼ぎがある。年の残りの期間、われわれは個人で仕事をするが、例えば造林とクリスマスツリー用の木の伐採、リングや他の果物の収穫と建設現場の仕事と、あらゆる種類の仕事をしている。

私は今、41歳になる。同僚のほとんどは私より年上で、私と同じく6年間村の学校へ通った。今日、われわれの子どもは9年間小学校へ通い、隣の町の中学校に通っている。多くは大学入学試験に合格し、都市に住んで勉強を続けている。私の17歳の息子はあまり勉強に関心がない。息子が学校を卒業した後は、ぶらぶらしないで私と一緒に森林で働くことを願っている。

山火事の消火は 女性には大変厳しい職務です。

エリー・ピラール・リバス、スペイン（女性）



私は、1968年にバルセロナに生まれました。5年前にポーランド系の夫と、2人の子どもと一緒に、過去40年の間ずっと激しい過疎地域であったスペインの北西部にあるガリシアに引っ越しました。すべての村々が寂れていて、破滅に向かっていました。かつて精力的に耕作された耕地は荒地になっていました。けれど、私たちには美しい景色、人里離れた場所の平穏、そして地価の低さが魅力的でした。

寂れた村の一つで、私たちは家と一区画の土地を買いました。それはカストロ・カルデレスから約15km離れた、私たちの子どもが学校に通う小さな町です。私たちは大きな菜園を持ち、ニワトリとウサギを飼っています。沢山の食用のクリ、クルミ、果樹が庭にあります。家の設備はかなり整っていて居心地がよいですが、さらに私たちは家計が許す限り家の改修を続けています。夫は大変腕がよいので、私たちの後から移住した近所の家の修繕を助けています。夫は大変稼ぎのよい職人で、わが家の稼ぎ頭です。

お金をもっと得るために、私はカストロ・カルデレスの共同体「基礎的地方自治体」が毎年組織する消防隊と一緒に、6月から10月まで働いています。私たちは8人で、3人は男、5人は女で、二つの班で働きます。私たちの装備は防護

服、ファイアービーター [スコップ状の火消し]、鍬で、背負いの消火ポンプはありません。もしも大火事になったときは、私たちには水タンクと消火ポンプ装備のトラックのようなエンジン付き機材を持つ専門集団が補強されます。職務はかなり危険ですが、私たちのチームには、起伏の多い地形での転倒が原因の捻挫と骨折を除けば、これまで重大事故はありませんでした。しかし、数年前私たちの地域の一班の全メンバーが炎に取り囲まれ、火事で命を失いました。

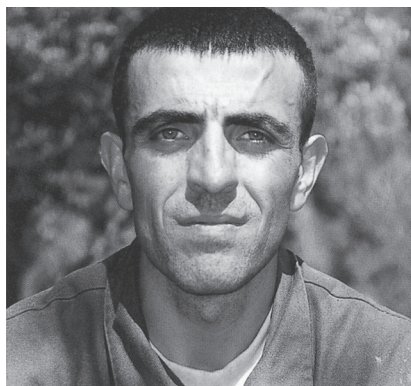
山火事がないときは、私たちは地表に可燃物があるマツ林を掃除し、防火帯と連絡路を障害物がないように維持しています。ガリシアでは一般的に夏によく火災が起き、特に私たちの州のオレンセではスペインの他の地方よりも多く起きます。県と市町村は、私たちの地方では主に地中海マツとクリからなる残存する森林植生の保護に非常に熱心です。

通常、私たちは朝8時から午後4時まで働き、4日目に休みをとります。しかし、火事の間はもちろん仕事は朝早くから始まり、そして暗くなるまで続き、また夜のシフトもあります。その結果、私はほとんど家を留守にし、家族のための時間はほとんどなく、家族はおろそかにされます。私たちは自分の食料と飲み物を仕事に持ってゆきますが、最大の問題は自分の飲み水を切らしたときの脱水症です。山火事の消火は大変厳しい職務です。1日が終わると、私は本当に疲れ切っています。

私の賃金は月に約625ユーロです。これは季節雇用としては多くありません。私は他の仕事を選びたいのですが、私たちの地方で見つけるのは大変難しいのです。

林業以外の別の職を 探さなくてはいいけないだろう。

アントニオ・カステージョ、スペイン（男性）



私は地中海のマホルカ島に住んでいるが、生まれたのはその首都バルマである。学校と兵役を終えて、島の森林を保護する公的機関のイバナットで職に就いた。島はマツとわずかなカシの森林が大部分で、面積は約8万 ha ある。他の5万 ha は、焼失区域の劣化した植生がほとんどである。環境上の理由から残存する森林を保護し、主な収入源である観光のため、島を魅力的に維持することが重要である。

イバナットでのわれわれの主な職務は、冬の山火事と夏の消防に対する予防対策である。われわれは公有地の管理、例えば枝の刈り込み等もしている。数少ない雨の日には、われわれはピクニック地用の木製のベンチやテーブルを作って屋内で働いている。

10年前に働き始めたときは毎年数百件の森林火災が起きたが、組織、機材と訓練が改善されて、今ではその数は大きく減少した。当初私は訓練を受けなかったが、およそ5年前にわれわれは消火と安全な作業手順、例えば荷の揚げ方に関する授業をいくつか受けた。しかし、これは持病の腰痛を和らげはしなかった。仕事の状況から、われわれの訓練の練習成果を応用するのがしばしば不可能なことがある。

私は8人の班で働いている。班は1人の監督、4人の専門労働者と3人の助手からなる。われわれは防火帯の開設にブラッシュカッタ [ベースマシンに装着された地拵えの作業機]、チェーンソーと手道具を使っている。ヘリコプターが労働者と水の運搬に使用される。大抵の場合、火が100～200m²の面積を焼き尽くす前にどうにか消火している。緊急事態のときには、ヘリコプターが許可を受けて、個人の水泳プールから水バケツを一杯にして運んでくる。デッキチェアと日傘が回転翼の風でグルグル回り始めたならば、それはプールの持ち主には恐ろしいことである！

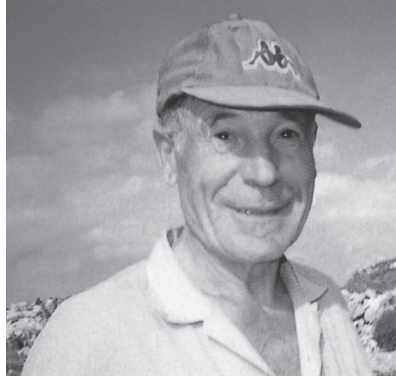
幸運なことにひどい事故に遭ったことはないが、同僚は何回かチェーンソーでひどい自傷事故をしたことがある。私は8年前、辛うじてある事故を免れた。そのときは木の剪定をしていたところ、10mの高さで足下の枝が折れた。落下したが運良く別の枝で止まった。最近は木登りのすべてが、以前は手に入らなかった登攀用ハーネスを使う専門家によって行われている。

私は超勤手当付きの月給で終身雇用されている。妻と2人の子どもと一緒に、義理の両親の家に家賃なしで住んでいるけれども、自分の収入でかなり上手にやりくりしている。正規の労働時間は午前7時から午後2時までである。それで火災警報が入らない限り、午後は家族と過ごすことができる！

しかし、ハンディキャップは健康状態である。腰痛は別にして、腱の炎症が発症したり回復したりし、ぜんそくも患っている。いつか監督になり、もっと軽い肉体労働になるようにとずっと望んできたが、新しい規則ではスペイン本土で2年間訓練コースを受ける必要がある。一体誰がその間、私の家族の世話をするというのだろうか。残念ながら、私は林業以外に別の職を探さなくてはいけないだろう。

昔はマツの木から 炭を作っていたものだ。

ビセンテ・トーレス、スペイン（男性）



観光客がイビサを見いだす前には、この小さな地中海の島で暮らしを立てることは難しかった。この島はおよそ 20km × 30km しかない。多くの人々はもっと良い生活を探し求めて、南アメリカに移住した。私の叔父の一人はキューバに行き、他の叔父と父はアルゼンチンに行った。しかし、父は7年後、農場を継ぎに戻り、父が亡くなってから、私は代役を果たした。当時私は20歳で、母と弟と妹の世話をしなければいけなかった。

農場は農地が7haとマツ林が16haある。これは大面積に見えるが、土はやせていて、雨も多くない。私はイチジク、アーモンド、黒豆、ブドウを育て、菜園を持ち、ヤギ、ヒツジ、ブタとニワトリを飼っている。昔はこれがわれわれの暮らしを支えた。しかし、われわれは現金も必要だったし、このお金を森林から手に入れたのだ。

冬にわれわれはマツの木を切り、夏に木が乾燥してからもっと質の良い丸太にして販売した。さらに残った木から切削用の手鋸と斧を使って炭を作った。木材は山積みされ、土と石の壁で覆われた。われわれは最上部を開けておいて、燃焼を始めるために底に穴を開けた。焼きが順調に進むと、最上部も覆われた。そして2番目の穴が開けられ、最初の穴が閉じられた。穴を閉じて新しい穴を開ける

手順が、木材が炭に焼き上がるまで繰り返された。これにはおよそ8日間かかり、その間は連日連夜窯の番をしなければいけなかった。冷却後、炭は袋に詰められ、ロバで海岸まで運ばれた。その炭は商人に売られたが、商人はそれをイビサの町にある市場まで船で出した。

木炭は1950年代以降まで料理に使われ、それ以降、徐々にガスにとって代わられた。かなりのお金を木炭で稼いだが、稼ぎはわれわれが米や他の必需品を買うのに必要だった。

今日、われわれはほんの一部の薪を除けば、林地から大変わずかなものしか調達していない。私は現在68歳になるが、まだ果樹、菜園と動物の世話をしている。妻は近所に建てられた別荘で手伝いをして、いくらかの金を稼いでいる。息子とその妻、そして二人の子どもはわれわれと一緒に暮らしている。息子は漁師をしている。

生活は以前よりずっと楽になったが、かつてわれわれは近所の人たちと雑談する時間がもっとあった。そして、時計を必要としていなかった。太陽が一日中、案内してくれた。

コルクガシの皮剥ぎは 見つけられるうちで最高の職業だ。

ペドウロ・アントニオ・カサヴェリャ、ポルトガル（男性）



コルクガシの皮剥ぎは、私が見つけられるうちで最高の職業である。ここでは私は時給 10 ユーロを稼ぎ、食料のような追加手当もあるから、ほかのどんな職業も同額の報酬は払えないだろう。この辺りのほかの仕事では、私は多分時給 5 ユーロ以上得ることはないだろう。ただ残念なのは、コルクの皮剥ぎは年に約 2 ヶ月、夏は普通 7 月と 8 月にしかできないことである。

われわれは他のどんな道具も使わずに、斧でコルクの皮を剥いている。それは簡単であるが、コルクだけが除かれるように、木を切り込まないように注意が必要である。品質についても知っている必要がある。最良品はボトルコルクに使用される。

初めて削られるバージンコルクは、防音用のコルクパネルのような、接着剤で接合された粉末コルク材料から作られるものにしか使えない。われわれは木の根元にコルクを置き、それがトラクタで収集され、運搬され、巻き立てられる。コルクの皮剥ぎが、仮に 10 年に一度ならば最高の生産物が得られるので、われわれはいつも木に皮剥ぎの年月日の印を付けている。コルクは大変高価なので、私は見張りをして、集められたコルクが盗まれないように注意している。見張りのときは暇つぶしに、コルクで水飲み用のカップを彫っている。

この地域には非常に多くのコルク加工工場がある。牧草地に生える、そして作物畑にさえ生える木の多くも、コルクガシだ。コルクガシのドングリはほかのカシの果実より劣るが、ブタの餌として使われる。

17 歳からコルクの皮剥ぎをしてきたのは、父には何も財産がなかったからである。土地もなく家もなかった。私は 1933 年にここエボラモンテに生まれた。16 人の兄弟姉妹がいて、9 歳で働き始めた。最初はブタを世話して、その後はいろいろな農業の仕事をした。柵の修理、ウシの番人、ブドウの収穫。いつも季節仕事だから、一つの仕事から別の仕事に移ることになる。夏にはコルクの皮剥ぎである。現在、私は 68 歳になり、まだそんなふうに働いている。1 人の娘と 2 人の孫の小さな家族がいる。われわれにはまだ土地はないが、私には家が 1 軒とオートバイが 1 台ある。



買い手がコルクを運び去るまで、この住処に監視人として泊まる。

田舎で働くのが好きですが、子どもは都会に出て行ってしまいました。

イナーシア・ジェローニモ、ポルトガル（女性）



私は、リスボンの南、多くの産業があり、同様に多くの森林もあるセトゥバル地方に暮らしています。16人の男性と4人の女性、同じコミュニティ出身の全員が、6月から8月までアルト・ピナのコルクガシ所有者に雇われ、コルクを収穫しています。

この職業は18歳からしてきました。現在、私は55歳で、監督である夫は58歳です。私たちには2人の子どもがいますが、子どもは都会で働いています。私たちの中には60歳を超える人がいますが、30歳代の若い夫婦も一組います。その夫婦には、自宅で祖母と一緒に暮らす娘が2人います。

私たちは働くために、毎日約120kmを乗り物で家から行き来しています。女性たちの一人が調理した温かい食事をとる昼休みの1時間を入れて、仕事は午前8時に始まり午後5時には終了します。食事を終えると、女性たちはその後片付けをして、男性たちは仕事を続ける前に道具を研ぎます。

男性はコルクを剥がすのに斧を使い、さらに木の高みに登るための短いハシゴをもっています。女性はコルクを積み上げます。私の仕事はトラクタを運転して、長い棒杭状に巻き立てられる場所にコルクを運ぶことです。

昼の間は気温はしばしば30度を超えますので、私たちは薄着をして、日よけ

に帽子をかぶっています。いつも仕事は非常に順調に進みますから、私たちは毎日コルクの山が長くなるのを見るのが好きです。しかし、時々、雨、火災、またはトラクタの故障が仕事の邪魔をします。

私自身や夫のように、40年以上長くこの仕事に携わってきて、大変専門的に仕事する人たちが何人かいます。今、私たちは以前より暮らし向きがよくなりました。賃金は1日85ユーロと高く、男性は出来高払いでボーナスも受け取ります。私たちは毎週の金曜日に支払いを受けます。

コルク収穫の期間以外は、私たちは年中ずっとマツとユーカリの新植、植林地の手入れのようなほかの森林の仕事に取り組んでいます。

私たちみんなが田舎で働くのが好きだといわなければなりません。1日の労働時間は長く骨が折れますが、好きな仕事と暮らしをできる限り長く続けたいのです。



木材伐採の飯場で育った。

ヴァージル・ウォレス、米国（男性）



太平洋岸北西部にある木材伐採の飯場で私は育った。父は伐採夫の親方で、母はミザリー・ウィップ〔悲惨な鞭、大径木横挽き用の2人挽き手鋸〕と呼ばれた手鋸の向こう端に着いていた。母は1916年6月11日に仕事を一休みして、私に命を与えた。木材伐採の飯場で育つということは、仕事のあとについて、あちこちへと何度も引っ越すということである。

学校教育はほとんど受けなかった、そして処女林の巨大な切り株が残され、伐採の後に自営農業用に開墾された土地、スタンプランチズ〔切株牧場〕で早くから手伝いを始めた。大不況の真っ最中に、17歳で父のパルプ材伐採に加わった。厳しい時代だった。経済が悪化する前まで父は1日で6米ドルを稼げたが、大不況の間、人はだれも1日仕事でほんの1米ドルしか稼げなかった——たとえ稼げたとしてもだが。

状況が回復してから、枕木、丸太、挽き材を運搬するトラック運転手として働いた。そして、1947年に自分の会社ラッキー・W・ロギング・カンパニーを立ち上げて、その栄光の日から公有林の環境配慮によって操業停止になるまでの間、ノースウエスト地方一帯の木材収穫に再び着手した。自営の木材伐採業者として働き、組合には加わらなかった。私の基本原則は自分の雇い人を公平に扱うこと

だったが、同じく期待したのはみんなが沢山働くことだった。

伐採親方たちは非常に誇りが高く、時給の労働者よりずっと多くの金が取れるところでは出来高払いで働いた。1950年代に、ある伐採親方はキャットスキナー、つまりブルドーザ操作員が1日たった20米ドルしか稼げないところを、日に70米ドル稼ぐことができた。

ラッキー・W・ロギング・カンパニーで、私はいつも運が良かったわけではない。長い年月の間に、13回の怪我をした！ 手鋸とチェーンソーで自分自身を切り、脚を三度折り、倒木が当たった。伐採夫としての退職は1980年にやって来た。損傷した首が原因で木を見上げて見極められなくなったのが、そのときだった。

けれど今も十分健康で、背筋を伸ばして歩き、めがねはいらない。愛用のスティール社のチェーンソーで薪を切って、近所で販売する小さな会社を経営している。

妻のスージーとの間には5人の子どもができた。わたくしたち2人は勉強を続けて、ともに高校の卒業証書をもったのは私が54歳のときだった。今は男やもめなので、孫が最愛の人である。子どもが大好きで、森と動物の話をしてやる。オールド・ウッズマン [年寄りの森林の住人] として、学校でも話をし、森林の暮らしと仕事について本を数冊書いたことがある。

月に 600 米ドルを グアテマラにいる家族に仕送りできる。

ファン・オスワルド・アセベド、米国／グアテマラ（男性）



私は米国でグアテマラ人植林班の班長をしている。30 年前に、グアテマラのウェウエテナンゴ県の小村に生まれた。父は小区画の土地を耕作し、マメ、トウモロコシとコーヒーを栽培した。私が 18 歳のとき、2 人の兄弟とともに、働き口を求めて米国へ旅をした。われわれはバスとトラックでヌエボ・ラレド近くのメキシコ国境に行った。リオ・グランデ川を渡った後、ジョージア州にたどり着き、タマネギ収穫の仕事を始めた。収穫の仕事が終わると、サウスカロライナの海岸で建設の職に就いた。9 ヶ月後、われわれは稼いだすべての金を持って帰国した。以来毎年、私は仕事のある米国からグアテマラへ帰っている。

5 年間植林班の職に就いたが、それは現在米国で私がしている中では唯一気に入った仕事である。これまでずっと班長を受けもってきたし、今は外国人労働者ビザを持って合法的に入国している。働き先の会社は私のビザを用意し、航空券の費用も援助してくれる。当然のことだが、徒歩よりは飛行機で入国する方が好きである！

国境を違法に越境すると危険なこともある。自分が合法になる 1 年前にアリゾナで越境して、ほとんど死にかけたことがあった。手引きの人間と一緒にナリス・デル・ディアブロ、通称悪魔の鼻と呼ばれるルートをたどって越境した。われわ

れは砂漠で道に迷い、食べ物と水が底を突いた。私の人生で、国境警備隊員に会って嬉しかった初めてのときだった。彼らはわれわれに水と食べ物を与え、国境の向こう側に送り返した。われわれはそれで1週間待って、違うルートで越境した。

植林時期の12月には、私は毎年ジョージア州のアトランタへ飛んでいる。ウェウエテナンゴ出身で大部分が血縁者と友人である15人の班員と一緒に働いている。われわれは大規模植林地のテーダマツ植林に、米国南部をあちこち旅してまわる。滅多に一つの場所に2週間以上滞在することはない。ホテルとトレーラー・ハウス駐車場に滞在し、週に6日、日の出から日没まで働いている。われわれの給料は苗木1本当たり0.02～0.04米ドルなので、お金を稼ぐために精を出して早く働かなければいけない。

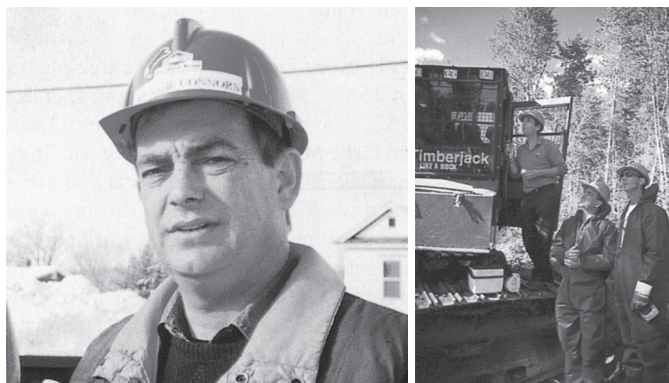
私は、男たちの監督、さらに移動と班員の宿泊施設の準備もしているので、追加手当がある。英語を多少勉強してきているから、班を雇用したことのある請負業者や土地所有者との連絡もとってやっている。班員のために通訳し、米国で何とかやっていけるように力を貸している。

新植時期は3月遅くまで続き、その時は除草剤散布班を率いている。われわれは最近伐採されたばかりの場所に除草剤を散布している。有資格散布者として訓練を受けた経験があるので、自分自身と私が監督する男たちのために、大変厳しく安全策を講じている。

班の男たち全員が働き、稼ぎ、そして彼らの家族へ仕送りをするためにここに来ている。仕事はつらいが、それだけの価値はある。米国で、私は家族に仕送りする月600米ドルという十分な金を稼ぐことができるが、一方グアテマラでは1日の労働で5米ドルしか稼げない。私の稼ぎで、今は妻と子どものために都会に一軒の家を建てて、小さなタクシー業を始められるようになった。妻は小さな店と縫製業を始めたところである。

ハーベスタは日に 24 時間、 週に 7 日動く。

ドギー・コナーズ、カナダ（男性）



私は 12 歳になると森林で働き始めた。初めての仕事は、父が仲間と丸太を馬で集材するのを手助けしたことである。

ニューブランズウィックの中心地でわが家がある地区・ドークタウン周辺の森林は、世界中に製材品と紙を輸出するための産業用の丸太とパルプ材を供給する長い歴史がある。

1979 年に高校を卒業した後、アルバータとニューブランズウィックの製材工場で働いた。1981 年には地元の請負業者と一緒に、チェーンソーを使った伐倒と枝払いの仕事に行った。5 年後に中古のスキッド [集材機] を購入し、自社の森林と州有地の立木伐採権を持つ JDI (J.D. アーヴィング株式会社) を主な取引先に自分で請負業を始めた。

1990 年に JDI から地区の一級機械収穫事業者になるように求められ、それが一連のまるまる新しい問題をもたらした。参考になる過去の知識はない上に、操作員たちはその仕事の訓練を受ける必要があった。機械操作と整備について自分もわずかな教育さえ受けていないのに、2 人の補充操作員を訓練した。われわれ 3 人は 4 月から 1 月までの収穫期間中、1 日 24 時間、各人 8 時間、1 週間 7 日のスケジュールで、ハーベスタ [収穫機] を動かした。妻は、給与、燃料供給

の管理、部品在庫と他の日常業務の処理について助けてくれる。運転台での長時間労働（操作員の一人が欠けた場合は再三の二重シフト）、日常の点検・保守と機械部品修理などの数え切れない労働時間が理由で、私は JDI から多くの生産・品質賞を受賞した。しかし、初めの頃は不慣れから修繕費は高くなり、故障時間も長くなり、ハーベスタの耐用年数を縮めてしまった。思っていたよりも早く、古い機械の下取りなし同然で、新しいハーベスタを1台、608 ティンバージャック〔収穫機種名〕を買わなければいけなくなった。そして今は3台目のハーベスタに乗っている、また608 ティンバージャックである！（2人の兄弟と私が写っている写真を参照）

長労働時間と30万～40万米ドルに達する機械投資をしながら、自分にも操作者と同じ額の賃金を支払った。しかしだ、2001年末に会社の銀行預金はちょうど5万米ドルあり、そこから自分の労災保険料、ハーベスタ自体の保険料、ハーベスタ車体の修理仕上げと操作用品の準備に必要な費用を支払った後には、口座預金は7,000米ドルに激減した。これは、それまで収益は一つも上げずに経営したのに加え、さらに新しい機械の購入には現在の市場金利で新たな調達資金が必要だということである。この状況に納得していない。それはまさしく、暮らしを立てること、昼夜兼行で働くこと、ハイリスク・ハイストレスと多くの心配事を抱えて事業を営むことにある。そこへ持ってきて、脊椎板を5つ損傷しているから重い荷を持ち上げることができない。

他のハーベスタ操作員たちも気がつけば同じ状況にある。その多くが2002年の春、稼ぎに出るための機材準備に借金をしなければいけなかった。われわれは、現在の仕事の単価が前々から低すぎるので、JDIが公表した単価切り下げに抗議した。だが残念ながら、われわれには大規模林業会社以外に仕事を見つけるための可能な選択肢がないので、やむを得ず指示された条件で働かざるを得ない。

スキッダが燃えだしたときは 危機一髪だった。

エド・ペリー、カナダ（男性）



私は、南ニューブランズウィックの農場で育ち、幼い頃は農場と森で父と祖父の手助けをした。1980年代半ば、高校を終えた後はチェーンソーで木材を伐採し、運材用のフォワーダ〔搬送機〕を借りて、請負業者の仕事を始めた。他の請負業者のほとんどが皆伐に携わっていたのに対して、私は択伐の収穫を専門とした。夏には予備伐の収穫間伐も行い、こうして広い範囲の取引先に供給した。

1990年に、自分が運転して、もっと操作性の良い集材機を1台購入した。最近はダンプトラックを1台購入し、薪を自宅のサセックスから80kmの範囲内で販売している。

今年の夏には、13歳の息子がスキッダ〔集材機〕を使って働き始めた。息子は森で働くのが好きで、事故防止の技術と育林の仕事に関心がある。ある日、私が伐採していた箇所から離れた場所でスキッダが炎上した。息子が教えてくれた。「お父さん、僕は消火器の留め金を外そうとしたけど、煙がひどすぎた。いくら良い空気を吸わなくてはいけないから、飛び出して、ちょっと空気を吸って、また中に飛び込んで、消火器を手にとって火を消した」。危機一髪だった。われわれは集材機を失ったかもしれなかった。

現役生活では、今まで沢山の事故を経験した。落下物による打撲、落下、多少

の切り傷。しかし、決して長い間仕事を休んだことはない。起きた中で最悪の事故は、スライディングスキッド〔地曳き集材機〕と木の間に押しつぶされたことだった。仕事の危険性は承知しているし、助手と私自身は目・耳保護付きの保護帽、保護ズボンと安全靴を必ず着用している。

数年前に南ニューブランズウィック林産物販売委員会に関係するようになった。結局その理事長になり、2002年にニューブランズウィック全地方の4万人の所有者を代表する植林地所有者連合の会長に選ばれた。われわれの主な目的は、木材産業との効果的な取引の立場を確保し、持続的収穫を管理する仕組みを確立することである。過去20年にわたるわれわれの組織の主な業績は、政府と所有者が共同出資した林地管理作業を維持してきたことである。認証はもう一つのやりがいのある職務である。われわれは植林地所有者に役立つ自分たちの構想を発展させるつもりだ。

長い年月の間には、人並みの収入があったよい時期もあるし、請求書が積み重なりかなり悪い状態だった時期もある。妻のヘレンは保健省に勤務している。子どもは4人いて、16歳、13歳、10歳と8歳になる。概して、今日までかなりよい人生であった。

認証林で働いているから 当時と事情が違う。

ライムンド・ペニシェ・トラヴァス、ブラジル（男性）



私はおよそ20年以上前に森林で働き始めた。その前は農場の手伝いで働き、さらにパラの州都ベレンの近く、生まれた村であるエレットウイアの周りで臨時仕事をした。手作業で丸太を運搬するのが初めての仕事だった。ある日、チェーンソー作業員が作業現場を離れなければいけなくなり、すぐに戻るといった。しかし、その後、作業員は再び姿を見せなかったし、自分も手がすいていたからチェーンソーを使ってみようと思った。それは古い型の低機能のチェーンソーで、チェーン・ブレーキと防振装置も付いていなかった。作業員がそれを使って働くのを見たことがあったから、チェーンソーを手に取り、初めて木を伐った。うまくいった、それで続けた。要するにそれが、私がどうやって林業の仕事の始めたかである。

当時われわれは、安全用具を使わなかった。短パンとTシャツを着て、ただ働いたものだった。運良く、私自身は事故に遭ったことはなかったが、物騒な事故を目撃した。同僚の1人が大きな丸太の下に押さえられた1本の細く撓んだ棒を伐っていた。棒に鋸の歯をあてると、棒が跳ね返ってきた。鋸は無防備の同僚の胴体を右側からなで切りにした。おびただしく出血していたので、われわれは大きく急いで同僚をピックアップトラックに乗せ、病院に運ばなければいけなかった。

死なずにはすんだが、ひどい事故だった。

今は当時とは事情が違う。この企業では、仕事の安全性が認証されてきた。私がこの職場に就職したのは1998年で、翌年、生涯で初めての訓練コースを受ける機会に恵まれた。それ以後ずっと伐木作業に携わったけれども、伐木作業には危険が伴うから私は講師と指導の内容に感謝した。私は樹木や樹種や育林方法についてあまり知らないし、自然についても、また保護帽と安全ズボンについてもよく知らない。われわれは森林経営やその関係者たちとも全く関わりがなかった。つまり、われわれがすることは、木の買い手が現れたら、そこへ行って木を伐り、搬出をすることだけであった（私と助手の写真を参照）。

今は、ある班の一員である。班では2人のチェーンソー作業員と1人の助手と一緒に働いている。チェーンソーの使用と収穫木の選別作業を交代で行える。班には、伐採用の印がついた木と要保護木も記された地図がある。また、切れの良い鋸、安全用具、くさびがあるので、木の伐倒方向を制御できる。私はそのやり方を知っているから、残存木は損傷を受けず、班も安全である。班では何とか1日に25～30本の木を伐採している。順調に行けば、345レアルドルの基本賃金、毎本当たり0.60レアルドルのボーナス、そして月目標達成のもう一つのボーナスを入れて、1ヵ月600レアルドル（およそ240米ドル）を稼ぐことができる。

私は林業で働いて、全く幸せだ。14歳と11歳の2人の娘と11歳の息子と、子どもが3人いて全員が学校に通っている。自分は1年しか学校に行かなかったが、子どもには勉強をさせたい。子どもが林業で働くようになれば、もしかしたら安全と健康の監督に、森で時々われわれと同行する、あの若い女性のような労働安全技師になれるかもしれない。

樹種は100 以上知っていると思う。

アルフレド・ダ・コスタ・ヴィアナ、ブラジル（男性）



私は 35 歳になる。パラ州のモカジューバに生まれて、そこの学校には 1 年間しか行かなかった。字は少しは読めるが書き方は知らないし、計算には計算機を使わないといけない。林業労働を父から学んで、18 歳から今まで森林で働いた。

初めはコショウのプランテーションでも働いたが、1995 年からは立木収穫の分野だけで働いている。仕事は会社のチェーンソー作業員の助手として始めた。数年経って助手から昇進して、2001 年までチェーンソー作業員だった。

昔から木の名前は知りたかった。知識のお陰で、入社したときはもう完全に森林の話題と仕事に精通していた。それで、会社のスカウト〔森林調査員〕に昇進した。この異動は私の人生を大きく好転させてくれた。以前は仕事はずっと厳しいのに給料は少なかった。チェーンソー作業員に昇進したあとは、この職務がどんなに困難かを知っていたから、助手の労働を軽減するよう骨を折った。チェーンソー作業員は、肉体的な負荷も大変高い。今はスカウトとして、重量物を運ぶ必要はなく、給料はずっといい。そして何より毎日何か新しいことを学んでいる。また、改善したのは私の生活ばかりではない。われわれの会社が取得した最近の認証の結果、以前と比べて労働者全員に高い安全と良い労働条件が確保されている。

写真に木の胸高直径を測定している姿が見える。これは森林調査〔森林経営計画を立てるための林内調査〕ばかりでなく、樹幹の格付けと樹種特定の一環である。測定しているのはアビューラナ・ヴェルメルハ〔学名、アカテツ科〕と呼ばれる非収獲樹種で、われわれは固定標本地の一つで発見した。他に、森林調査班では5人が働いている。樹種区分の記録に2人。収獲見込みの木のつる切りに1人。1人は調整係で森林調査簿に記入し、1人は樹幹に木の番号を付けている。

私は、自分の仕事に大変満足している。でもいつかは植物鑑定者になりたい。今は木の通称は知っているが、学名は少ししか知らない。だから、学ばなくてはいけないことが沢山ある。字があまりよく読めないの、学習は経験に頼っている。エンブラパ〔ブラジル農牧調査研究公社〕から来た数人の研究者に同行する機会に恵まれたとき、私は野外調査の間、ずっと木に関する多くのことを学んだ。われわれの会社は収獲用の約60の木について調査記載しただけだが、今では私は樹種を100以上知っていると思う。

次の目標はよい住宅を持つことである。家族はタイランディアの近くに住んでいるから、私は週末には訪れることができる。子どもは3人いる。最年長は養子で13歳、学校に通っている。その下の子はまだ3歳で、妻とともに家で赤ちゃんと一緒にいる。子どもには私の知っているすべてを教えるつもりである。森林の仕事の成果として、子どもによい教育を与えられることに満足している。

教育がなくても、 収穫現場の監督になれた。

ジョゼ・ステニオ・ダ・シルバ、ブラジル（男性）



私はセアラ州のソロノボレで生まれた。今は38歳になるが、1985年からずっとパラで働いた。パラに仕事を見つけに来たとき、職に就ける唯一の仕事は立木の収穫だった。学校では1年しか勉強しなかったから、事務の仕事は見つけれなかった。

私はスキッド〔集材機〕操作員とトラクタ運転者の助手として働き始めた。その後は2年間をスキッド操作員として送り、それから昇進して、収穫作業関連のすべての機械と労働者の調整に責任を持つようになった。毎日、労働者に担当の仕事と持ち場を伝えている。また、機械類がうまく稼働しているかも点検しなくてはいけない。もし問題があれば、管理者は私の責任にする。だが、稼ぎは1ヵ月1,480 レアルドル（約400米ドル）と高い給料で、1,000～1,200 レアルドル（1ヵ月に約300米ドル）の出来高ボーナスも受け取っている。

私が木材を扱う仕事を始めた頃は、だれもができる限り早く森林から木を収穫することにしか関心がなかったから、事故が沢山あった。神のお陰で、一度も事故に巻き込まれることはなかったが、事故に遭った多くの人と死んだ数人の人を見てきた。収穫地区は町から遠く離れていて、われわれは完全に隔絶された生活を送っていた。また、班は業務の必要からたびたび編成替えされたので、班員が

互いに顔見知りになることは決してなかった。だが最悪なのは、家族と離れていることだった。時には、家族からの連絡がないままに、森林で60日暮らしたことがあった。

認証企業の状態は今日改善されている。私は最初、企業から与えられる図面と計画表を使うのが少し難しかったが、今では多くが改善されてきている。労働者には前より多くの保安用具があり、われわれは事故防止にずっと気をつけている。班は前より長い時間一緒に働いているので、お互いに気が通じるようになり、それが職場での関係をよいものにしている。収穫地区は町に近いので、われわれは毎週末に家族に会うことができる。私は時々その週の間、自分の家で寝ることさえできる。9歳と6歳の2人の息子がいて、妻はわれわれの小さな家で面倒を見ている。

森林で働きたいという学校や大学で教育を受けた人たちを、私は理解できない。勉強する機会がなかったのも、私はこの状況なのである。さらに昇進するために必要な資格が自分にはないことはわかっているが、現在の職業が大好きであるし、これまでやり遂げた水準には本心から満足しているといわねばならない。私は教育を受けなくても、何とかいい職を得て家族の面倒を見てきたのである。

けれども胃炎をずっと患っている。そのため、どんな場合でもマラリアを避けなくてはならないから、森林で働くのを辞める必要があるだろう。実際、このシーズンの後にこの仕事を辞めるつもりだし、われわれは家族でシングァラに行き、そこで私はウシの放牧の仕事をするつもりである。

一番の関心事は、致命的な事故に 遭うのを避けたいということだった。

ジョゼ・デ・アリマテイア・ペレイラ・デ・カルヴァーリョ、ブラジル(男性)



私はマラニョン州のペドレイラス出身である。18歳の時から森林でずっと働き続けた。それ以前は農場で働いたが、農業労働はどんな展望も与えてくれない。小学校は1年間しか通わなかった。現在39歳になる。

農作業を辞めてからすぐに木材を扱う仕事に働きに行き、以来、他にどんな仕事をするのも考えたことはない。スキッダ〔集材機〕の助手として仕事を始め、後に助手からスキッダ操作員になった。以前、われわれは長時間労働で給料は少なかったから、林業労働は望ましい仕事でなかった。また、誰も安全に関心を持たなかったので、事故が沢山あった。数人の友人は、森林で仕事をしている最中に死んだ。同じことが自分の家族に降り懸かるかもしれないと私は大変心配だった。だから、今までの一番の関心事は、いつも致命的な事故に遭うのを避けたいということだった。今日では、労働条件はずっとよくなった。特に今働いている認証企業には以前より多くの安全保証がある。

スキッダ操作員として、チェーンソー作業員のほぼ倍にあたる十分な給料を得ている。出来高ボーナスはないが、収穫のない雨期の間でさえも、通年で基本月給がある。機械に問題があればすぐに整備士に修理の電話をしているが、時々修理が済むまで長く待たされる。自分の仕事には満足している。仕事はチェーン

ソー作業員より楽だと思うが、スキッドの運転台は大変暑くなる。体はひどい揺れにさらされるが、それが慢性の激しい腰痛の原因である。一方で運転台は操作員を防護して、仕事をより安全にしている。自分の助手にスキッド操作を教え始めたところであるが、これには手間がかかるだろう。概して、自分の同僚や会社とは大変うまくやっていると思う。

森林で稼いできたお金で、小さな家を買うことができた。息子と娘はすでに若者となっている。娘の15回目の誕生日に気がついたことは、なんと多くの時間が過ぎ去ったことか、そしていつも林業労働に夢中になり子どもの成長を見てこなかったということだ。残念なことだが、どんなにお金があってもこの失われた機会を取り戻せはしないだろう。

しかし、われわれの生活は家族が近くに住んでから改善された。収穫地区の近くに家を買うことなど、考えもしないできたが、妻が私を説得した。実際、家を買って近くに家族がいることは、これまで私がしてきたことの中で最善のことだった。もしこれが前からわかっていたならば、ずっと早くしただろう。毎週末、妻と家族と家に一緒にいられるのはなんと素晴らしいことだ。

来年、森林で働くのを辞めるつもりでいる。そして小さな衣料品店を持つ私の夢を実現したい。だが店を始めるために、もう少しお金が必要である。自分の額に汗して働き、もしこの夢を実現できるならば最高である。

林業の仕事に満足しているが、 家族が恋しい。

エレニルソン・デ・ジェスス・ロペス・ソアレス、ブラジル（男性）



私は、マラニョン州ピニエイロス近くの小さな農場で生まれ育った。10歳のときに、家族を助けるために働き始めた。小学校しか卒業できなかったのが、正しい読み書きを知らない理由である。現在 25 歳になる。

林業労働で金を稼ぐのは農場で稼ぐより簡単だと、ずっと思っていた。しかし本当に、農場に比べて林業労働は安全かどうか、いくら稼げるかどうかを、人は知るわけなどない。

これまで3年間、ずっと現在の会社で働いた。この会社にはほとんど職業経験がないまま入社した。この職業に関する訓練を受けたことは一度もないけれど、現在チェーンソー作業員の助手をしている。仕事は非常に危険である。2人の同僚は事故に遭ったことがある。1人は指を折り、もう1人は脚を折った。

われわれの昼休みはたったの45分で、午前7時から午後5時まで働いている。昼食は車で運ばれてきて、飯場では飲料水も供給してくれる。

一般的に言って林業労働は満足できるものであるが、かなりつらいと思う。自分の山刀とその他の道具に加えて、私はガソリン、チェーンオイルと水の入った重たい箱を運ばなければいけない。これは大変体力を消耗するが、出される食べ物はよく、時間通りで、その上騒音がないからわれわれはよく眠ることができる。

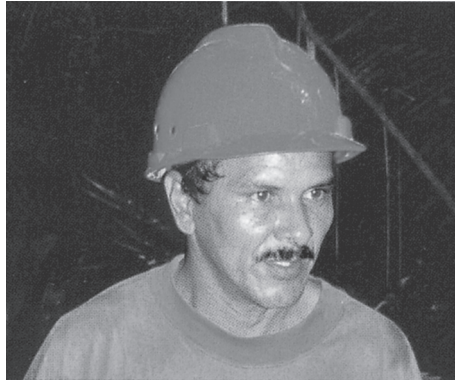
飯場には約 70 人が暮らしているが、われわれには十分な広さがある。給料はあまりよくない。他の会社の給料はもっと多い。私は自分で健康保険を負担しなければいけない。会社が援助するのは、事故があった時だけである。私は、もし怪我か健康障害が起こったら、公立病院に行かなければならないが、そこはあまり満足のいかない病院である。だから、多少稼ぎは少なくなっても安全な労働条件の方が望ましい。

これからも森林の仕事を続けようとは思わない。同僚はいい人たちだが、私は家族が恋しくてたまらない。家族が住んでいるところはマラニョンからかなり離れているし、そこを訪れるためにはバスと列車に乗って行かなければならない。年に 2 回だけは何とか家に帰っている。一番年下の息子はわずか 3 歳である。もし自宅をあまり長く留守にするならば、息子は私の顔を忘れてしまうだろうと心配している。私の望みは子どもが成長するのを見ることである。

父は、小さなドラッグストアを持っている。私が何とか共同で金をいくらか工面すれば、この仕事が大きくなるように援助できるだろう。そうしたら、われわれは一緒にその経営ができる。今年は年末までずっと林業の仕事をして、いくらかお金を稼いで父の家に戻るつもりである。いつか、わが家を持ち、家族を安心させることができればいいのだが。われわれはみんな、望むものを得るために一生を戦わなければいけない。誰が知ろう、車がたとえ高価であっても、もしかすると、いつか私が 1 台の車を持つことを。叶うかもしれない幸運を夢見るのは、素晴らしいことである。

雨期に収穫は4ヵ月間止まるが、 給料の支払いは継続される。

エジバルド・ジョゼ・ネグレロ、ブラジル（男性）



私は、1959年にアマゾン州にある人口3,000～4,000人の集落、マウエース村で生まれた。マナウスという首都から村までは、ボートでおおよそ14～18時間かかる。

両親の小さな家で、5人の姉妹と4人の弟と一緒に育った。当時は、村の学校の施設は粗末だったけれども、両親は私が6歳のときから働き始めた11歳のときまで、何とかして小学校に通う機会を与えてくれた。

わが家の小さな農場の他に、収穫時期は現場の労働者としても、さらにゴムの木の樹液採取者としても私は働いていた。生活は父が亡くなると、さらに苦しくなった。それは私がちょうど14歳の時だったが、三番目の子でも長男だったから家族全員を助けなければいけなかった。

20歳になると木材会社で働き始めた。リオ・ブランコがある州のロライマへ移動し、そこでチェーンソー作業員の助手として働いた。まだ家族を扶養しなければいけなかった。

3年後、もっと家族の近くにいたかったので、アマゾン州に戻り、イタコアチアラで職を見つけた。チェーンソー作業員として働いた。会社は、食事を毎日3食提供したが、少なくとも私の胃袋は満たしてくれた。

あの頃はまだ自分の家族がなかったので、もっといい報酬を探し求めて、あちこち気楽に移動できた。骨の折れる職業だったが、チェーンソー作業員として働くのは好きだった。

9年前に、日に3度の温めた食事と健康管理が提供される新設の会社、プレシャス・ウッド・アマゾンで働く機会を生かして、私は何とかイタコアチアラに戻った。初めて業務訓練を受け、さらに初めてローインパクト・ハーベスティング〔環境保全的収穫〕についても聴講した。現場では1ヵ月間、定向伐採〔倒す方向を定めた伐採〕の訓練を受けた。そのときにイタコアチアラに自分の家を買った。6年前に結婚し、今、子どもが2人いる。1人は2歳の娘で1人は3歳の息子である。

長年伐採に従事していると、何をやっているかはわかったつもりになるが、その通りではない。本当は、ただの事故防止技術という問題ではなく——私にはその時家族がいたから、違う角度で考え始めた——特に人は年をとってゆくから、長く働くために体力を浪費しないことという問題でもある。

プレシャス・ウッドでの最初の年には、チェーンソー作業員として働いた。だがその後は昇進して、伐採班の班長になった。最後は、会社にある5つの伐採班の監督に指名された。

雨期には全部の収穫作業を停止せざるを得ないが、それはわれわれが年に8ヵ月しか仕事がないということである。けれども、給料は同じ額で年間を通して支払われている。木材収穫のない4ヵ月の間、私は数人の友人の臨時仕事を手伝っている。

プレシャス・ウッズ・アマゾンは地域の主要な雇用者である。私と同じように、多くの人が働き口と収入を同社に頼っている。だから、われわれは同社が存続するようにベストを尽くしている。

最大の問題は、 人と機械に仕事を確保することだ。

イバン・ルディ・ノランブエノ・モヤ、チリ（男性）



私は、1958年にバルディビアから約40kmにある農村で生まれた。祖父は林業労働者で、父もそうだった。家族は子どもが6人いて、金に不自由していた。2人の兄は数年しか学校に通えなかった。私は9歳で入学したが、同じ年の他の子どもに追いついて、運良く17歳まで勉強を続けられた。中学校卒業の1年前に退学して、森で仕事している父に加わった。1975年頃はわれわれはまだ木の伐倒と横挽き〔玉切り〕に手鋸を使い、チェーンソーが手に入ったのは、その後だった。

1987年に、われわれは好条件の大きな請負仕事を取る機会があった。前金を渡す1人の木材バイヤーを見つけたので、われわれは労働者を雇用し事業を拡大できるようになった。

われわれの会社は年を追って成長し、現在では50人を雇用している。荷積みクレーン装備のトラック、さらに2台のトラックと雄牛の2頭引きが8つある。最近買い取ったのは、丸太を林道端まで長距離集材するためのウインチ装備のトラクタが1台、さらにクレーンが一つ付いた古いトラックが1台で、林道端で玉切り材の選別と巻き立てに使うつもりである。

会社は販売用に1ヵ月におよそ900～1,100m³のパルプ材と薪、さらに300m³

の丸太を生産し、いろいろな木材の買い手に配達している。そのほとんどが広葉樹である。われわれは私有林所有者からの立木購入に加えて、小規模農民が伐採した木材も購入している。

手作業の労働者には月に10万8,000ペソ、チリの公式最低賃金が支払われる。チェーンソー作業員は19万ペソを得るのに加えて、2万～3万ペソの出来高ボーナスも受け取る。社会保障の負担金は会社から直接支払われる。だから、従業員の数は安定し、特に機械操作員は極めて安定的だ。

大変幸運だったのは、起ち上げ資金なしに請負会社を開業できたことだ。私はまったく独学で腕を鍛え、どんな特別な訓練やコースにも通わなかった。父は昨年死んだので、今は1人で経営している。

自分の職業が好きだが、それには沢山の仕事を必要とする。だから今抱えている最大の問題は人と機械に継続的な仕事を確保し、十分な木材の売上げと資金繰りを確保することである。週に丸6日働いているが、家族と一緒に日曜日を楽しむことはできる。

仲間のチェーンソー作業員は、ユーカリの伐採中に致命的な怪我をした。

ルベン・デ・ラ・クルス・ガジャルド・リオス、チリ（男性）



私の家はバルディビアから遠くない農村、サンタ・エルビラにある。両親には7 ha の小さな農場があった。2 人には12 人の子どもがいて、暮らしを立てるため身を粉にして働かねばならなかった。私は5 年間学校に通い、読み書きを学んだ。学校は20km 離れていて、往復で3 時間の道のりを馬に乗って通った。最初は農場で、次は森林でという労働の日々が続いたから、あの頃は大変だった。

今は58 歳で5 人の子どもがいる。3 人の娘と2 人の息子、その息子の1 人は死んだ。もう1 人の息子は私の伐採班で働いている。われわれの班は、アカシアの薪とユーカリのパルプ材を伐採する5 人の男と、さらに雄牛の2 頭引きが二つである。班の1 人はチェーンソー伐採、横挽き〔玉切り〕と木の枝払い作業をする。雄牛は、薪が割られ、パルプ材が巻き立て前に皮剥ぎされる道路端まで、木材を集材する。パルプ材の長大丸太の運搬はきつい仕事で、若い班員によって行われる。

今まで重病を患ったことはないし、ひどい事故に遭ったこともない。しかし、7 年前、ユーカリの伐採中に、仲間のチェーンソー作業員が致命的な怪我をした。1 本の大きな枝が頭に落ちてきて、保護帽の前を打ち、額を骨折した。仲間が勤め先の請負業者が支払う災害保険で補償されたのは幸運だった。それで夫を亡く

した妻は補償金を受け取った。

われわれは小型のピックアップ・トラックで通勤している。美味しい朝食をとった後、およそ午前7時30分に家を出て、午前8時に働き始める。昼休みは12時から1時までで、大体午後5時30分に仕事を終える。

冬の雨がひどいときは、仕事を中断しなければいけない。小雨の時は上着を着るが、内側はびしょびしょになる。われわれが住んでいる近くの作業現場には、雨宿りの小屋はない。

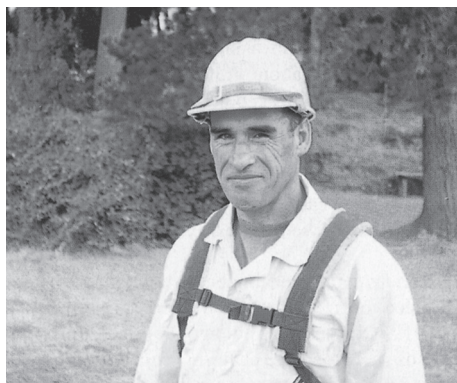
班は直請けでなく、請負業者から孫請けで雇用され、賃金は出来高払いである。1m×1m×1mの層積[薪を積み上げた体積で実材積と異なる]の薪から、われわれが得るのは純定額給で1,500ペソになる。パルプ材の場合は、24m×1m×1mの層積で、チェーンソー作業員では正味1,100ペソ、ウシの集材では1,500ペソ、皮剥ぎと巻き立てでは1,800ペソになる。

チェーンソー作業員は月に約20万ペソを稼げるが、新米の現場労働者の稼ぎは約9万ペソになる。チェーンソー作業員は多かれ少なかれ安全訓練を受けていて、推奨された保護用具——目・耳保護付きの保護帽、安全ズボン、安全靴と安全手袋——を着用している。他に着用するものはあまりよくない、特に履き物に関しては。

われわれは班で協力して仕事をし、それがかなり効果を上げている。若者たちはこの職業を続けることを望んでいる。自分はこの暮らしと仕事に満足しているし、これからもずっと長い年、続けられることを期待している。

自家用車を持つのは正に夢だ。

ロサメル・エドゥアルド・シフエンテス・コネヘロ、チリ（男性）



私は森林消防部隊の一員である。マツ林の真ん中にある小さな飯場に配置されたわれわれは12人いる。私は41歳で最年長だが、まだすこぶる元気である。火災警報がなると、われわれは道具を持って近くに駐機するヘリコプターに走り、5分以内には空にいる。ヘリコプターはわれわれを火災現場のできるだけ近くに運び、それからわれわれは活動を開始する。われわれの業務は火災の消火である。とげの多い植物の深い下生えはよくあることだ。1人は藪を通り抜けるため、チェーンソーを持って前進する。他の人間はレーキ〔熊手〕を持って続き、約1m幅の帯状に地表の可燃物を全部取り除く。前進する火を止めるためには最高のスピードで働かねばならないが、大部分は警報が発せられてから半時間で消火に成功する。その時までには、われわれは完全に疲れ切って、防護服の中はひどい汗でぐしょぐしょになる。

われわれはコンセプション出身の請負業者レネー・バルディビアに雇用されているが、彼はわれわれの業務を、三つの林業会社、すなわちフォレスタル・ビオビオ、フォレスタル・ミラレムとフォレスタル・セルコが連合したソシエダート・デ・プロテクシオン・デ・ビオビオ〔ビオビオ保護協会〕に供給している。月給は手取りで12万8,000ペソになる。食べ物と宿泊は無料である。飯場は手入れ

が行き届き、食事は素晴らしい。業務を遂行するために、われわれは万全の体調でなければいけないし、よい食べ物の他に体の訓練も重要になる。テレビは見られるし、遊べるゲームもいくつかあるが、飯場の孤立性と常時待機という現実が生活を困難にしている。しかし、12日の飯場暮らしの後、われわれは3日間解放される。私はすぐバスに乗って故郷のトメに行くが、そこはおよそ60km離れている。何人かの仲間の労働者は、家に着くのに200kmも移動しなければいけない。

私は独身で、母と兄弟の1人とともに暮らしている。トメで生まれて、18歳まで11年間学校に通った。それから、プレハブ住宅製造工場労働者の1年を含めて、沢山の違った職業に就いた。山火事の季節が終わると、主に植林に、さらに植林地の伐採と林道作りに携わり、今まで14年間林業に従事してきた。

今の職業をもう4年から5年続け、その後は林業以外の、家のもっと近くで、給料がもう少しよい仕事を探すことを考えている。われわれ全員が、森林火災消防隊員という現在の仕事に対して賃金は低すぎると考えている。だから、自家用車を持つことは正に夢である。

造林労働者として始めて、 今は森林監督官補佐だ。

オーナブ・バチェ、ガーナ（男性）



私は、1965年にガーナのアシャンティ地方アフアホ・アノ南地区にあるンパサーソで生まれた。私の村の人口は1,500人で、住民の多数はココア、キャッサバとオオバコ等の作物を植える農民である。

私には妻と4人の子どもがいて、3人の兄弟と2人の姉妹もいる。2人の兄弟は木材会社の林況調査で働き、1人は建設労働者である。姉妹は主婦で農民である。彼らのすべてがアシャンティ地方に住んでいる。

1971年から81年まで中学校修了証〔学制が異なる〕を得たンパサーソの小学校に通った。卒業後、村の近くで最初の仕事を林業局の造林労働者として始めた。1981年から92年の間は、これが私の主な仕事だった。われわれは主にマンソニア・アルテミサ〔アフリカン・ウオールナット〕とチークの造林をしていた。その仕事は大変つらかったけれども、いい職だった。労働時間は午前7時から午後5時までだった。一度山刀で脚を深く切ったことがあるが、それ以外は軽傷と小

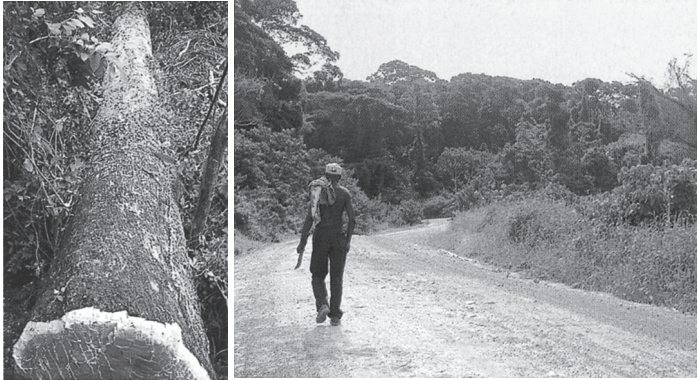
さな事故しかしたことがなかった。造林労働者としての私の給料は月に7万5,000セデスだった。

1992年に保護林の補佐になるため仕事を変えた。現在の私の主な職務は、測定と違法伐採を防ぎ発見するためのパトロール活動である。私の給料は月19万4,000セディス(約26米ドル)とささやかだが、仕事が好きである。私の職務には、例えば倒木に当たることや、万が一だがパトロール中に違法伐採者に遭遇するといった関連する危険性も若干ある。違法伐採者は時々大変攻撃的になり、私は一度連中の一人とひどい格闘をしたことがあった。補佐として始めたときから、これまでマシランゴ、ニナヒニでずっと働いている。そして1999年からは、10年輪伐期〔伐採後、再度伐採するまでの管理期間〕の天然林択伐が実施されるアベシワのティンテベポ保護林で働いている。

労働時間は造林労働をしていたときと同じだが、職場まで歩かなければいけないから、今の1日は朝5時から始まる。その週の間、私は保護林近くの村に滞在し、妻と子どもには1週間にわずか1回か2回しか会えない。違法伐採のパトロールは週末と休日の間も実施されなければいけないので、私が望むほど家族とよく会うのは難しい。給料がもっと高くなればいいが、自分の職業が好きだ！

森林がなくなったとき、 われわれには何も残っていない。

ピエール・アング、カメルーン（男性）



森林開発の分野で働いているから、私はかなり疲労困憊^{こんぱい}している。近くで起きていることを見る機会は、私の唯一の休日である日曜日の今日しかない。日曜日の夜には、私が暮らす村、メヨマコットの家に帰っている。

私は35歳で、林業会社で働いている。これまで東カメルーンと沿岸カメルーンの湿性熱帯林は全域にいたことがあるし、コンゴにさえいたことがある。しかし、父の死後は遠く離れて働き続けられなくなり、村に帰って昨年結婚した。とはいえ、妻にはあまりよく会えない。

ジュンム地方で働いていた4年前に、チェーンソー作業員の仲間の労働者が1本の倒木に当たって死んだのを見た。そのときは、ほとんど自分の職に見切りをつけるところだった。われわれは奥地林で働いていたから、病院への救急搬送は不可能だった。仲間は重度の頭部外傷を負っていたが、即死はしなかった。われわれには若い見習いがいて、私が仲間を他の労働者のところまで2km以上運ぶのを手伝ってくれた。翌日、その見習いは仕事の危険を恐れて退職した。私は彼を責めはしない。

一日の労働時間は午前5時30分頃の早朝に始まり、午後6時くらいに終わる。私は林業技師が十字に極印したばかりの立木へ向かって道をたどる。時々助手

と一緒に働き、時々私は1人だけで働いている。立木を伐倒する前に、われわれに力を与えるように、事故からわれわれを守るようにと神に祈っている。同僚が殺されたときに、何故神が私の祈りに応えてくれなかったのかは、私は知らない。

木が倒れてくるときに、私は大丈夫だと作業中の周りの他の人たちがわかるように、独特の叫び声を上げている。それから、次の木にとりかかる。危険な木については、他の人の手を借りるようにもしている。10～15本の巨木を、数日で伐倒したこともある。

われわれの主な食事は仕事を終えた夕方になるので、日中はごくわずかしか食べない。ご存じの通り、森林には野生生物が沢山いて、われわれはわなや鉄砲で捕らえるので、肉が豊富にある。われわれは、飯場に来る女性たちに肉を多少売りもする。

上司の白人監督たちが関心があるのは木材だけだ。監督たちは木材をどんなに取っても取り飽きはしない。私は月に15万CFA(200米ドル)を稼いでいるが、監督たちは数百万CFAを得ている。私は数トンの汗をかきながら、劣悪かつ危険な条件で、次々と木を伐倒している。

森林がなくなったとき、われわれに何が残っているというのか？

林業労働は好きだが危険で、 雨期は大変困難になる。

ポール・モリス・ンナンガ、カメルーン（男性）



私は、カメルーンの南西にあるクリビという海沿いの町近くの村、アンジェック／アフアン＝オヴェンで生まれた。成年[20歳]になる1年前に学校を退学し、しばらくサッカーをしていた。6年前にデアネという村に移って、森林開発の仕事を始めた。デアネはカメルーンの熱帯雨林の主な河川の一つ、ニヨン川の河岸にある。その村は国の海岸地域と南部地域の境界にある。

デアネに到着したのは11月の晴れた朝だった。伐採監督は私を村の長のところまで連れて行き、長は自宅に宿泊させるのに快く賛成してくれた。電気もなく、日没後は村は死んだも同様である。若者のほとんどが村を去ってしまっていた。その村での最初の夜、私は自分がするはずの仕事を考えて眠ることができなかった。午前6時に1台のピックアップトラックが、私をでこぼこ道沿いの伐採現場まで連れて行くために到着した。われわれは沢山の丸太が地面にころがっている土場に到着した。伐採現場の監督が職務を区分けしてから、労働者が森に入った。唯一土場に残っているのは、丸太に極印し測定する労働者しかいなかった。2台あったクローラトラクタは、1台は集材ラインを通すためで、もう1台は伐採現場から土場まで丸太を集材するためのものだった。

集材作業に入る前に、一連の様々な業務がある。記録係は、収穫木に届く道を

ならすのが仕事の集材ライン伐採係を連れて、収穫木を探す。伐採後に記録係は丸太に極印をし、それから集材機が丸太を荷揚げし、土場まで牽引する。

仕事で奥地林での記録係を始めたが、それはヘビに咬まれる^か恐れがある危険な職務である。実際、この事故は、2年前に私に起きた。仲間が私を助けてくれて、応急処置を施してくれた。昨年、私はほかの業務に移された。今は、ある時は土場で働き、他の時はドゥアラ港の貯木場で働いている。10ヵ月前、1本の丸太が私のそばに落ちてきたが、運よく押しつぶされずにすんだ。打撲傷と7日間の就業不能ですんだものの、会社は診療費の支払いを拒否した。

とはいえ、森林開発に関して私が好きなことは、自然とともに、そして自然の中で働くことだ。ある人はまた、人々を魔法使いたちから守る、あのブベング[マメ科の樹木]のような木の陰に不思議な事物を発見したりもする。しかし、雨期の労働条件は大変困難になり、しかもあまりに危険である。

最悪なことは、ほとんどの監督が正直でなく、道理に背いているという事実である。われわれに支払われる賃金は、得る権利のある賃金より少ない。仕事を始めた時から、私は今までに一度の昇進もしたことがない。私の給料は月に6万CFA[CFAフラン]である。妻と5歳と2歳の子どもは町に住んでいるが、私の給料は家族が月に20日しか暮らしていけない金額のままである。

伐採現場監督になりたい。

フランシス・ムボンバ、ガボン（男性）



私は、ガボンの首都、リーブルヴィルを本拠地とする IFK（インダストリエル・フォレストィエール・デュ・コモ）と呼ばれる木材産業会社に勤務している。天然林の収穫計画を立てるのが私の仕事である。われわれは奥地の未伐採地にラインを切り、森林を 250m × 1,000m の区画に分割しなければならない。これらの区画の中で、収穫木が特定され、極印される。私は 8 人の班で働き、われわれは磁石を一つと山刀を何本か使用している。私の仕事の成果は、収穫のもとになる立木の材積地図である。われわれの主な立木は、1 本で約 5 m³ の収穫材積があるオクメ〔アフリカ産の広葉樹材〕である。25ha の一区画で、われわれは平均で 20 数本のオクメの立木を、そしてうまくいけば他の収穫樹を 2 本収穫できる。

伐採班の到着に遅れずに林地地図と材積地図の用意ができてるように、われわれは先だって仕事を順調に進める必要がある。天候が許す限り、われわれは雨期の間であっても 1 年を通して働いている。ぬかるむ地面の上を、さらに繁茂した下生えの中を前進し、他の班のメンバーとの連絡を確保するのは大変困難なことである。動物（ゾウ、ヘビまたはヒョウ）から攻撃される危険性もある。

本当は土木技師になりたかった。中学校に通ったが、最終試験の 1 年前に病気になった。家族は私を援助することができず、さらに自分で生活を立てなければ

ならなかったので、復学できなかった。

20歳になると石油会社で働き始めた。そこには2年間いた。それから6ヵ月間、植物学の講義を受け、伐採会社でシェフ・ドゥ・ソンダージュ〔調査主任〕として、未伐採地の林相図〔立木資産地図〕を作成する職を得た。けれども7年後、私が切迫した家族問題の解決のため3日間リーブルヴィルに行かせて欲しいといったところ、会社側が拒否したからこの会社を辞めた。その後は、終身雇用で社会保障が適用される IFK に入社した。

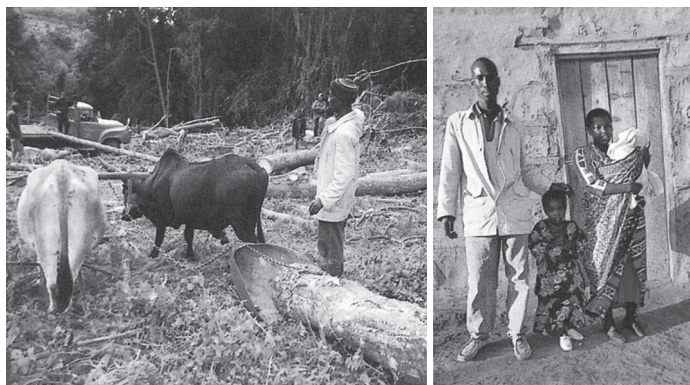
私にとって人生で最も重要なことは、仕事と家族である。妻と2人の子ども——息子は6歳で娘は12歳——はリーブルヴィルに住んでいる。残念ながら、私の家族は労働者用専用に建てられた伐採飯場に滞在できない。2週間の仕事を終えた後、われわれは4日の休みをとるが、ほとんどの人間は、その休みを社有船で河口を渡るのに1時間かかるリーブルヴィル行きに当てている。

差し当たりは、もっと経験を積むために、今の職を続けるつもりでいる。自分の仕事を上手に、さらに同僚と仲良くやっていけば、今の仕事で昇進する見込みがあると思う。私は今、29歳になる。将来いつか、作業組織と人事管理の教育コースに参加したい。そうやっていけば、伐採現場管理者になる機会があるものと信じている。

私が正規の給料を得ていることを知っていて、いつもお金を要求してくる親類がリーブルヴィルにいる。そこから離れた所で、家族と一緒に暮らせればいいのだが。

雄ウシで集材するのが好きだから、 続けるつもりだ。

エゼキエル・ルクマイ、タンザニア（男性）



父はアルーシャ地方にあるルマニャータ村で家畜番をしながら、自給自足の農業を営んでいる。父には4人の妻と12人の子どもがいた。私はその5番目の子として、1974年に生まれた。7年間村の小学校に通い、その後はできれば中学校に行きたかったが、父は畜牛の世話の手伝いを望んだ。われわれはワアルーシャ族であり、子どもの教育より畜牛を大事にするマサイ族と同じ部族である。

1995年に父と他の村人が近隣の研修林にある針葉樹造林地の集材用に、ウシの提供を求められた。農地の耕作に畜牛を使う村人は、ウシを林業作業に使うと台無しにされると思ったけれども、父と他の2人は求めを受け入れて、私にその仕事をするよう言った。それぞれ一対の雄ウシと2人のウシ飼育係からなる3班が3ヵ月訓練を受けた。作業現場近くと、飼育係が飼料を保管し夜間寝るための小さな小屋近くにも、畜牛用の柵囲いが造られた。

最初はその職が本当に好きではなかった。その上、村の友人たちは私を軽蔑した。しかし今、私は森林の仕事に習熟し、わずかだが安定した収入がある。村で有給雇用はかりにあったとしても少ししかないから、逆に羨ましがられている。

朝、私は雄牛にトウモロコシのさやを与えてから仕事にとりかかる。数時間後、われわれは半時間の休みを取り、さらに仕事を続ける。仕事が終わった後、ウシ

は草を食み、水を飲み、そして夜には柵囲いに入れられる。週に2晩小屋で眠り、さらに動物の世話をするのが私の役目である。

最初は、われわれの給料は時間給で生産性は低かったが、今は出来高給である。それで、われわれはスキッピングパン〔玉櫛、皿状・板状の部分に木材の先端を乗せ、後方を引きずって搬出する、写真を参照〕のような改善された道具を使い、生産と稼ぎも多くなった。私は1労働日当たりで4万シリング（およそ2.50米ドル）を稼いでいる。このお金を使って妻と2人の息子という家族を養い、ダウリ（私が妻のために義理の両親に支払った金）を徐々に返し、そして何はさておき家族と暮らす自分の家を建てることができたのである。

自分の職業が好きで、ずっと続けるつもりでいる。いつか自分の2頭引きのウシを買えるようになり、全く自営の集材業者になればよいと思う。

森林官たちは、ウシ集材がトラクタ集材と比べて金がかからず、さらに環境保護に役立つので、われわれの仕事に満足している。

薪の運搬 ——しているのは本当にロバの仕事です。

ジェマネシュ・イシャテ、エチオピア（女性）



私の家は9人家族です。私の母、6人の子ども、1人の孫と私自身。夫は10年以上前に亡くなり、たった1人で薪の運搬人をして働き、私たちの暮らしを立てています。

住んでいるのはアディスアベバ郊外のグレレ村です。私たちの小さな小屋は政府のものですが、木と土で建てられています。小屋は1部屋で三つのベッドと一つのテーブルしかありませんが、私たちは月に1.5ビル（0.18米ドル）を払っています。水は、近隣の公衆送水ポンプから30リットル当たり10セントの値段で買えます。

特に電気料金が値上がりしてからですが、運がよいことにアディスに住んでいる多くの人たちが薪で料理をするのです。これは、私たちにはお金を稼ぐ好機です。他のどんな方法で生き延びられるでしょうか？ 貧しくて無教育の女性が就ける仕事は他にはありません。

私は午前9時頃に家を出て、政府がアディス近くの山地に造林したユーカリの森林へ、2時間かけて歩きます。私たちは林床から落葉と落枝をかき集めるのを許されています。ユーカリ樹皮で包まれ、ロープで結束された30kg ちょっとの1束に十分な量を集めるのにはおよそ3時間かかります。互いにその肩に束を担

ぐのを手伝い、それから一番大変な仕事をやってくるのです。家への帰り道は、私たちが担ぐ荷物が重いので、倍の時間がかかります（写真にある私の仲間が薪を運搬する姿を参照）。私たちがしているのは実際のところロバがやる仕事です。私は夕方6時頃になってやっと家に帰り着くのです。

翌朝の5時に、私は束にした薪を販売業者のところまで売りに行きます。業者は15～20ビル（1.8～2.4米ドル）を支払いますが、乾期はもっと少なくなり、雨期と薪の需要が多いときはもっと高い値段です。そのお金で、私たちは食物を1日1日買っています。

家に帰るのは午前7時で、子どもが準備した朝食をとります。私たちは伝統的なインジェラ（テフというこの地方の穀物からつくったパンケーキ）を食べますが、パンとコーヒーを飲むのは時々しかありません。日中は1日中何も食べませんが、道筋の村の人からもらった水を飲んでいきます。夕方の2度目の食事は、またシェロ（ヒヨコマメのシチュー）付きのインジェラです。

薪を手に入れることは、特に大変暑くなる5月にはつらい仕事ですが、束が濡れて地面がぬかるむ大雨の時期も同じようにつらい仕事です。曇りで小雨しかない6月から7月は最も良い時期です。私は週に6日働き、日曜日しか休めません。

私たちの多くが薪を集めているので、原料調達の競争が沢山あります。そして、アディスが大きくなるにつれて森林までの距離が前より遠くなり、さらに近隣の森林は姿を消しています。だから私は野菜を育ててアディスの市場で売りたい、けれども私には菜園がありません。

子どものいる1人の娘を別にすれば、自分の子どもは全員が学校に通っています。彼らのためにできることは他にありません。教育のお陰で、子どもの人生には私よりもっとよい機会があればいいと思います。

子どもにはもっと良い人生があればよいと思います。

パメラ・アティエノ、ケニア（女性）



私はルオ族で、出身はケニアの西部にあるニャンザ地方です。49 歳になるひとり親でして、20 歳、17 歳、13 歳の 3 人の子供がいます。2 人の年上の子供もは女の子で、一番下の子は男の子です。

政府の森林局に勤務する父の友人に頼んで、私はそこに就職することができました。1980 年 8 月 20 日にキスム森林署に配置され、後には 1983 年にヌゴン森林署に、1986 年にカルラにある現在の森林署に転勤しました。私は、子どものために学校の近くで働かねばならないので最初の転勤を要請しました。2 回目の転勤要請は、自分がもっと仕事の経験を得るためでした。

今までに正式な林業技術訓練を受けたことはありませんが、現場の訓練を通して自分の腕前を磨いてきています。両親は基礎の初等教育を保証してくれましたが、中学校には行きませんでした。

森林局に就職してからは今日までずっと、苗畑の係員として働いています。職務は、苗木への散水、床替 [移植]、ビニールホースの注水、剪根処理^{せんこん}そして雨期の植栽です。苗畑で育苗される一般的な樹種は、パイン [マツ]、サイプレス [イトスギ類]、ユーカリ、グレビリア・ロブスタ [シルキーオーク] とドブヤリス・カフラ [ケイアップル] です。

普通は午前4時30分に起床し、朝食を用意して午前5時くらいには私が働く森林署に出かけます。家計を心配して、通勤には約15kmの距離を歩いて行きます。2時間かかり、森林署に午前7時30分から7時45分の間に着きます。ちょうど午前8時に、私にその日の職務を割り当てる苗畑長に指示を仰ぎます。苗畑の作業は普通、作業評定を考慮して行われ、例えばその日に限っては1,500本のポリエチレンチューブへの注水を求められることもあるのです。私の職務は昼前にほとんど完了して、午後1時頃には家に帰ります。時々職場で昼食をとりま

す。

家への帰り道では、危険なことが時々あります。どうしてかということ、失業した若者から襲われる危険性があるマザレのスラム街を横切らねばならないからです。今までに2度、浮浪者に襲われたことがありました。家に着くとほっとします。それから、いつもは子どもに手伝ってもらい、夕食の用意に取りかかります。

給料は月3,500Ksh〔ケニアシリング〕ですから、これで自分と家族のための日用の必需品を賄うのは難しいように感じます。必需品の中には食料、授業料、交通機関と衣料品が含まれます。おおよその支出は、食料に1,200Ksh、住宅に1,400Kshと交通機関に500Kshです。私は労働組合には入っていませんが、国民社会保障基金（私たちの年金制度）、国民医療保障基金と協同組合に毎月出資をしています。私の社会保障基金への出資金は最近、月80Kshから200Kshに増えました。

もしも私たちのウイミンズ・グループから受けている協同組合ローンとクレジット契約がなければ、私は子どもの授業料を払えないだろうと思います。給料を補うために、私は編みものとカギ針編みをして、販売用のテーブルクロスをつくっています。現在は長女をコンピュータ学校に入学させる前に、協同組合のクレジット・ローンを終わらせようと頑張っています。いい教育を受けて、自分の子どもには私よりもっとよい人生があればよいと思います。

時々体が疲れますが、私は苗畑の仕事が好きです。55歳で退職したあとは、田舎で自分の苗畑を始められたらよいと思います。

私の稼ぎのお陰で 娘の授業料が払えます。

マーブレ・エネスティナ・シティカ、レソト（女性）



私はバソート族で43歳になります。夫と私が住むのは人口約3,000人の村、クベツァーナです。私たちには5人の子供がいます。男の子が1人と女の子が4人です。子どもは1974年から85年の間に生まれました。3人の女の子は、もう永遠に家を去りました。ほかの1人は高校に通っていて、まだ私たちの世話になっています。家にいるのは男の子だけです。だから彼は水汲みをしなければいけませんが、それは本当は女の子の仕事なのです。

夫は野良仕事をしています。私は家族の世話をし、それからハウレンソウ、トマト、テーブルビート [赤カブ]、タマネギ、カラシとダイコンを育てる庭の管理をしています。私たちには十分なお金がありません、だから自家用の野菜を育てなければいけません。私たちはトウモロコシを畑から収穫しています。私は今までに、家と敷地の近くに、モクマオウの木、ラジアータ・パイン、それから例えばリンゴ、アンズとモモ等の果樹を植えてきました。

8年間、ずっと苗畑で働いています。稼ぎは多くありませんが、お陰で娘の授業料が払えます。最初は年に10ヵ月雇用されましたが、今はたった4ヵ月の雇用に減っています。

苗畑では、私はポット苗木を栽培しています。私たちは半時間の昼休みを挟

んで、午前8時から午後4時30分まで1日8時間働いています。私は、昼食に、調理したトウモロコシの食事、パーパをとります。私たちの仕事は、苗のポット詰め、播種、移植、除草と水まきです。仕事の出来は天候条件次第です。夏の豪雨の間は、私たちは仕事を中断せざるを得ません。冬には凍えるように寒くなり、かなり不快なことがあります。

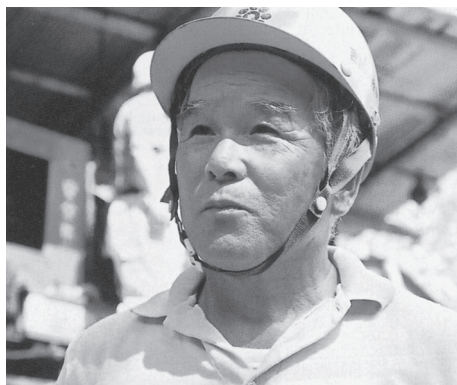
苗木は土壌浸食の防止と薪の供給用に植栽されています。昔は私たちはあまり木に関心を持たなかったのですが、今ではそれらが大変必要なことを知っています。

家に帰ると、私は家と庭の世話をします。午後8時に、私は世話を終えてテレビの前でくつろげます。——テレビが映る時間です！



架線集材士になるのが 生徒の頃からの夢だった。

タカミツ・カワモト、日本（男性）



私は、日本の本州の南の村、柿木村〔島根県鹿足郡〕に住んでいるが、そこは過疎の山村地域である。急斜面はほとんどがヒノキ（ジャパニーズ・サイプレス）とスギ（ジャパニーズ・シーダー）で覆われている。われわれの村の当初人口 3,000 人のうち、1,000 人が都会に去った。残るわれわれはほとんどが農業と林業に従事している。私自身は林業労働者であるが、販売用のキノコとワサビダイコンも栽培している。父は林業を兼業する農民だった。2 人の弟は私と同じ林業労働者である。

私は小学校・中学校に行って高校に進んだ。しかし、学校の成績はあまり芳しくなかった。実際の役に立つことにもっと関心があった。男子生徒の頃はずっと、長さ約 1 m で厚さ 5 cm の木材を引っかけて斜面を谷に滑り落とすスパン 100m の架線を張って遊んだ。

1950 年代の半ば、私が 15 歳のとき、われわれが暮らす森林に最初の集材機器が導入された。それらは急な山腹から道路まで架けられた索で丸太を搬送し、また丸太をトラックに積み込むための強力なウインチだった。私がどれくらい興奮したか想像できるだろう。私は時間があるときはいつでも、架線集材の操作を見に行った。集材機のエンジンの音、ウインチドラムと架線を走る搬器の音、さら

に全木または全幹材を搬送する音は、私の耳には音楽だった。夢は、いつか私自身が集材機の操作員になることだった。

だから高校卒業後の疑う余地のない選択は、森林で働くことだった。最初私は短期間、私有林で雇用された。その後、父が私に、もっと集材機に精通するために国有林に移るよう助言してくれた。5年後に私は辞めて、家の20haの私有林で父に加わり植林の仕事をした。私はまた下請けで、伐採、横挽き〔玉切り〕と架線集材作業に従事した。しかし、これらの事業は国が1970年代の不況になってからは将来性が乏しくなっていた。幸いにも私は、2万ha以上の森林を管理する、有名な企業、吉川林業会社で職を得た。その会社で私は社会保障を受け、月給を取り、週に5日の労働をしている。

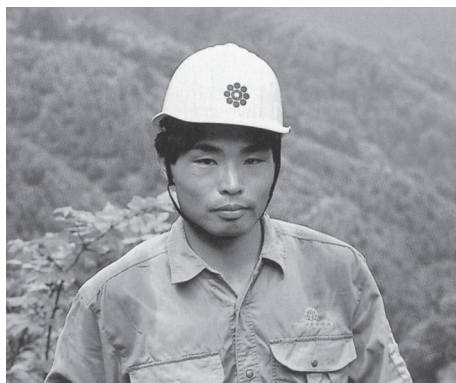
現在、ヒノキ全幹材の収穫に従事している。6人の班で働き、1人は集材機操作員、2人は木寄せ、1人は荷かけ、1人は荷おろし、1人はトラックの荷積みの仕事である。私の仕事は丸太を道端の土場に巻き立てて、トラックに荷積みすることである。さらに木の伐倒と横挽き〔玉切り〕、索の取り付け〔架設〕と労働安全に関して、新人労働者の訓練も任されている。

1987年にわが社は、優良林業経営で農林水産省の天皇賞を受賞した。社員全員にとって、これは大変な誇りである。

私は結婚して2人の娘がいる。家族は両親から相続した家に住んでいる。私は62歳になるが、まだ健康で、ひどい事故にあったことはないし、あと数年仕事を続けられればよいと思う。

自分が植林し手入れした木を見て とても満足している。

ミツユキ・ヤマスギ、日本（男性）



私は、1973年に本州という島の西端にある徳山市〔現、山口県周南市〕に生まれた。両親は兼業農家で、0.3haの水田で米を、ほかの0.1haでは野菜を栽培している。両親には3haの森林もある。わが家は、両親と2人の息子の4人家族である。

子どもの頃に農民になると決心した。それで、小学校と中学校で義務教育を終えてから、園芸を勉強しに農業高校に入学した。特に野菜、果物と花の栽培に興味があった。

1991年に山口県農業大学校の園芸課程に入学し、野菜園芸、生物学的原理によるメロンの特別な栽培を専攻した。私の研究には農業と林業の1ヵ月の現場実習もあった。この期間、とても美しい山林で囲まれた地域の東部錦町〔現、山口県岩国市〕にある1軒の農家に宿泊した。私の気持ちを変えたのは、この目を見張るような景色だった。園芸で働くという考えを捨てて、代わりに林業を選んだ。

宿泊した農家の人は、私に、この地域の森林を管理している吉川林業会社を紹介した。1994年の大学卒業後、21歳で私は林業労働者としてこの会社で職に就いた。

私は造林作業に従事する労働者の班に属した。班は春には植林に従事し、夏に

は雑草と灌木を刈り、さらに秋には若齢植林地の除伐、枝打ちと間伐をした。

仕事は全部が楽なわけではない。特に下刈りと除草は夏の炎天下ではきつい仕事である。われわれは長いシャフトが付きガソリンエンジン駆動の小型丸鋸〔刈払機、ブッシュカッタ〕で作業をしている。われわれは手袋、保護帽とゴーグルを着用している。多くの植生で覆われた急な斜面を数マイル歩くのは非常に消耗する。この種類の仕事に関しては、われわれは7人の班で担当している。班長、伐採作業の3人と刈り取りをかき集める3人である。われわれは20分から30分ごとに一休みし、スポーツマンが健康維持に使うビン入りのソフトドリンクを飲んでいる。

私が一番好きなのは枝打ちである。この作業は涼しくなる頃の秋に行われる。われわれは4mの高さまで、若齢のヒノキ（ジャパニーズ・サイプレス）の枝を切り落としている。その日の終わりに、良くできた仕事が見られるのは働きがいがあることである。

自分の仕事には本当に愛着があり、私が植林し手入れした木を見て満足している。結婚したときは、妻が私の森林への思いを共有してくれたらよいと思った。私の森林への愛と自然の偉大さを尊重する気持ちを託せる家族を持つことを期待している。

私の余暇の趣味は盆栽を育てること、そして山野や谷を歩き回ることである。

大都会から田舎の生活に戻った。

ヤスカザ・タヤ、日本（男性）



私は人生の最初の18年を滋賀県の田舎で、次の16年は大学を卒業し、結婚し、大きな製造会社で働いた京都、東京と福岡で送った。しかし、仕事はひどく骨の折れるものだった。さらに2人の息子は私が夜遅く帰宅したときは大抵眠っていた。

それで田舎に帰り、完全に自分の生活スタイルを変えることに決めた。和歌山県にある人口4,500人の村、龍神村〔現、和歌山県田辺市〕で職を見つけた。この村は日本のスギと日本のヒノキの森林で覆われた急な山々に囲まれている。森林はほとんどが私有林である。森林面積は2万4,300haで、私が林業労働者として雇われる森林組合によって管理されている。

新しい職に就いた最初の年に、チェーンソー操作、架線集材、フォークリフト運転などの訓練に通った。2年目にやっとチェーンソー作業員としての本当の仕事が始まった。これは、私が年をとって働けなくなる時まで続けたい面白い仕事である。

私は、18インチブレードで4.7kgのチェーンソーを2台持っている。4人か5人のわれわれの班は、午前7時30分に仕事を始め、昼食を含めて午後4時30分には終える。週の労働時間は40時間である。時々、われわれは雨天の日の埋め

合わせに、土曜日と日曜日にも働いている。雨がひどいときは、われわれは時々貯木場で働いている。

私自身を含めて約 30 人が生産作業に従事するサラリーマンである。約 20 人の伐採労働者と 30 人の造林労働者は日給を得ている。その他に請負業者が従事している。年間 4 万 m^3 の木材収穫のうち、協同組合のシェアは 1 万～1 万 5,000 m^3 で、請負業者のシェアは 2 万 5,000 ～ 3 万 m^3 である。

昨年、伐採残材に隠れた穴に足を突っ込んだとき、膝に怪我をした。この事故から回復する間、事務所で協同組合が森林管理協議会の認証制度を準備するのを手伝った。製造会社にいた時の仕事の経験が、この件では役に立った。けれども今は膝の具合が良いので、森林の仕事に戻るつもりでいる。

給料は製造会社でとった収入のちょうど半分だが、妻は老人向けのデイケアセンターで半日働き、わが家の収入に貢献してくれる。最初、協同組合はわれわれに住宅を提供してくれたが、今は持ち家に住んでいる。私の今の生活で最大の利点は、通常は午後 5 時に帰宅するから、自分の趣味の野球に費やす時間があることである。村の少年のチームを週に 2 回指導し、日曜日にわれわれはよく他の村で試合をしている。若者たちは中学校を卒業すると、村を離れて決して帰ってこない。自分の息子たちも同じことをするだろうが、私はここにいるつもりである。

会社が倒産したので、林業労働に就いた。

アン・グアンヒ、韓国（男性）



私は韓国の首都ソウルに生まれ、同市にある大学に行き、その後は父の所有する小さな会社に入った。会社は紙袋を生産し、私はその管理者として働いた。けれども 1990 年代の経済危機の間に会社は倒産した。この最悪な事態の結果、父の健康は悪化した。私は突然、両親、妹 2 人と自分の家族全員の面倒をみななければいけなくなった。

前の職業に見合うような新しい職業を見つけるのは難しかった。しかしその時、政府とソウル市の市民協会が始めたフォレスト・フォー・ライフ〔生命の森、韓国最大の環境 NPO〕と呼ばれる事業について耳にした。この事業を行っている当局は、マツ、カラマツとナラの人工造林をする地域で雇用する林業労働者を募集した。

雇用が認められ、私は大学教育を受けていたから、監督訓練課程を受講させられた。2 ヶ月のコースに加えて、植林、間伐、材積計算と管理の職務に関する 3 ヶ月の訓練が続いた。実習の 1 年後に私は班長に任命された。

午前 6 時にソウル市から少し外れたソンナム村にある家を出る。公共バスで森林事務所に着くのに 1 時間かかり、そこからマイクロバスで労働現場に行くのに 1 時間かかる。労働時間は昼休みの 1 時間を加えて 8 時間である。私は

午後7時くらいに帰宅している。

地形は急勾配で起伏が多いので、仕事はかなりつらい。われわれが使う道具はほとんどが輸入品で、小柄な韓国人には大きすぎる。林内には作業道がないので、それらの道具は操作するのには、また長い距離を持ち運ぶのには重すぎる。私は10人の班を任されているので班員の管理をしているが、他の時には班員と同じ仕事をしている。

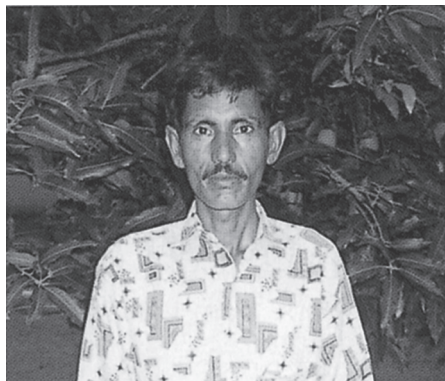
私の給料はおよそ1,000米ドルである。これは普通の林業労働者がとる金額より少し多いが、前の家族会社で得てきた金額よりはずっと少ない。妻はレストランで半日働いて、われわれの収入に貢献している。妻はまた私の病気の父を介護している。家族が人並みな生活水準でいられるのは、彼女の貢献のお陰と最高に感謝している。私には5歳の男の子がいて、週末にその子の世話をできるのが嬉しい。

森林の仕事を通じて、人間の幸福にとって自然がどんな意味があるかについて、私はこれまで多くを学んだ。お金に関する私の見方は完全に変わってしまった。現在33歳になるが、森林とともに年をとり、森林がどのように変化するかを見て、人々がその真価を認めるよう力になりたい。



石工の次は林業労働者として働き、 今は石工に戻っている。

ナシル・フセイン、インド（男性）



私は45歳になるが、北部の州、ウッタール・プラデシュのビジノール地方で生まれ育った。ビジノール地方はこの国で一番人口の多い地域である。雇用は限られ、多くの人がどこか他の所の、もっと良い職業と賃金を探している。一時的に移住して、毎年2～3ヵ月くらい故郷の村に帰ってくる人もいる。けれども多くの人は家族と子どもの将来性のために、永久に移住し、どこか他の所に定住している。私はそうした人間の一人である。ウッタランチャルという新しい州に近年編入されたデヘラドゥン地方に移ったところだ。そこは亜熱帯の低地からヒマラヤ山脈の高地針葉樹林に広がる丘陵の多い地域である。

私は大家族に生まれた。家族と4人の叔父全員が同じ家に住み、同じ炊事場を使った。父は林業労働者だった。私は母と叔父たちと他の家族の人たちと一緒に村に残ったが、父は冬の間は毎年サル〔インド北部に分布するフタバガキ科の落葉広葉樹〕の森林へ出稼ぎし、良い暮らしができるだけのお金を稼いでいた。村の小学校で勉強を始めたが、1年後に退学し、読み書きができるようになる機会には恵まれなかった。それから家族の手助けを始めた。10歳のとき、大変慕っていた叔父の1人が石工だったから、ちょっとした石工仕事を身につけ始めた。18歳になるまでに、私はまあまあ腕の良い石工になっていた。

けれども父は、私が伐採作業の林業労働者になるべきだと随分熱心だった。だから父と一緒に林業労働を始めた。私はこの後 20 年間、インドの基準では良い収入の木材伐採者として雇われた。仕事は請負制で、1 日 12 時間と長時間だった。われわれがいた林業小屋の宿泊施設は大変粗末だったが、食べ物にはよかった！われわれは 4～5 人で金を出して食材を買い、大抵は自炊した。それで出費がなくてすみ、家族のためにお金を蓄えることができた。

伐採は面白いがつらい仕事だ。われわれは自国製の簡単な鋸と保守用具を使って働いた。われわれは、回し鋸〔弓鋸〕と鈎齒〔鋸の機械目立てができる〕型の横挽き鋸のような高性能鋸を使った実演を経験したが、それらの鋸は市場で入手できなかった。他の職業では労働条件がだんだんと改善されてきたが、それは林業では当てはまらない。不利のもう一つは、林業労働が悪天候に影響されることである。われわれを援助してくれる合法的な労働組織はない。結局、私はつらく粗野な仕事と家族と離れた 1 人暮らしを十二分に送り、また石工として働き始めた。

最近の 7 年間はデヘラドゥンで働いたから、私は経済的にも他の面でもかなり順調である。家族は妻と 3 人の子どもだが、この地が好きで、私はそこに 2 部屋のある家を建てたところである。地域は経済的に発展しつつあり、私は今まで仕事が不足したことはない。石工として雇用される他に、小規模の建築を 1 人で請け負っているが、そのお陰で収入は増えている。子どもはみんなが学校に通っている。子どもには良い教育を受けて欲しい。最年長の子は 14 歳の娘で学校の成績がよい。娘のために、結婚時に満期となる本人用の少額の銀行預金を始めたところである。

全体的にみると、林業から石工仕事にまた切り替えたのはいい判断だったと思う。金銭的に見れば、私は林業でずっと順調にやっていたが、そこには生活の質はなかった。さらに 40 歳になって、林業労働をするためには、あとどれくらい十分強健でいられるだろうかと疑問を覚え始めた。私と同世代の労働者のほとんどが、自分と同じように考えて、林業労働から他の職業に移った。

けれども、私は今も林業に関連した活動に手を貸している。大抵の週末は金持ち連中の庭で、大きく繁ったマンゴーや他の木の不要な枝を刈り込むために働いている。サルのように木に登り、小さな斧と長いロープ付きの鉋を使っている。この類の臨時仕事は楽しいと思うし、お金もいい。

今まで林業の仕事を 後悔したことはない。

ルネ・アンガーマン、オーストラリア（男性）



私はフランスのミュルーズに生まれた。父がチェコスロバキア生まれで帰国を望んでいたから、私が6歳になる1935年に両親はその国に移住した。共産主義者が権力をとった後の1948年に、私はCSSR〔チェコスロバキア〕から西ドイツに脱出し、そこから19歳で政治亡命者としてオーストラリアに移住した。その国は言語は1つ、隣接する国もなく、国境もなく、壁もなかったので、魅力を感じた。

私は移住者なので、自分で分野を決めて、2年の間働かざるを得なかった。熱帯雨林にずっとあこがれていたから、決めた仕事は林業だった。ブリスベンの北にある、当時は孤立した小さな山地の開拓地であるジムナ〔同国の一州〕に行った。トラックの荷台に乗せられて、他の人たちと一緒にそこに到着した。われわれはテントはあるものの電気は来っていない粗末な冬の飯場に移った。当時はバター、お茶、それにガソリンに関して配給量の制限があった。われわれは6オーストラリアポンド（現在、12オーストラリアドル）の賃金で、週44時間働いた。

われわれの仕事は汚くて危険だった。原生の熱帯雨林はすでに伐採され、破壊され、燃やされていた。焼け跡に残った残骸をさらに燃やすために、鋸で挽き、斧で切り刻み、それを山積みする必要があった。われわれが使える道具は、手工

具しかなかった。結局、合わせて約 80ha の区画が切り開かれると、われわれは灰と埃の中を歩き回って、そこにフープパイン〔ナンヨウスギ〕を植林した。この仕事はクリスマス前の暑い時期に行われた。

われわれ移住者の待遇は、オーストラリア人とまったく同じだった——われわれは立場、労働条件、賃金さらに他のすべてが同じだった。しかもわれわれはジムナの人々から広く受け入れられた。たとえ英語を話せないとしても、ジムナの人々は大変助けてくれた。

計算が得意だったので測量の飯場小屋付きにされて、最後は主任にまでなった。測量の訓練を受けて、その後に国際通信教育課程も卒業した。私は遂に測量監督になった。

1959 年に北クインズランドにあるフォレスト・レンジャー・サーバイヤー〔林業測量調査士〕の職を得て、それからチュリーにある巨大なキング牧場の測量に 2 ヶ月を費やした。われわれはワニが群がる入り江のそばに野営し、ワニが水をかき分けて行くときは、人間の安全の確保のために、男にライフルを持って座らせておいた。

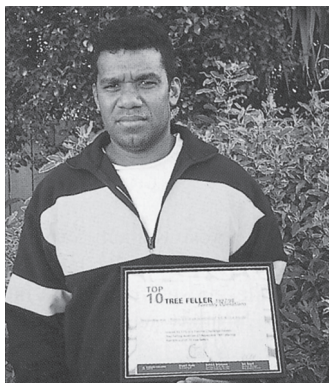
私は数年間クインズランドをあちこちと移動し、測量を行い、測量監督たちと測量士補たちを指導した。当時は、われわれは測量にコンパスとチェーン〔測鎖〕を使い、それらが長距離ではかなりの累積誤差につながった。われわれの仕事には、森林調査用の標本地と列状試験地の設定も必要だった。飯場の水準を改善するため、私は林業省に対し、テントを移動住宅に取り替えるよう働きかけた。

1970 ～ 80 年代の電子測量機器の出現で、測量労働はかなり楽になり、ずっと正確になった。後の衛星利用測位システムがさらに測量精度を上げた。教育省の林業の講師だったので、私はいつも、新しい技術の成果について十分に情報を与えられていた。

私は戦後、沢山の苦労と困難を経験せねばならなかったが、オーストラリアに來たことを決して後悔していない。林業に従事した 40 年で、1 日も仕事を休んだことはなかった。私は初めからもう一度、すべてこれまでのとおりしたいと思う。一つも人生を変えたくはない。

もっと高い賃金を稼ぎに、 オーストラリアに行くかもしれない。

コロイ・ジリナカウモリ、ニュージーランド／フィジー



私は、1965年にフィジー諸島の一つ、ガロア島に生まれた。ガロアは大変小さい島で、およそ6kmの長さで3kmの幅がある。約300人の住民が根菜類を育て、島の周囲で海産物と魚を収集・捕獲して暮らしている。いくらかの現金は、他所で職を見つけた血縁者が送金してくれる。

家族には7人の兄弟と姉妹があり、そのうち2人だけがまだ島に住んでいる。私は6年前にわれわれの村にある小学校を卒業して、3年間近隣のカンダブ島にある高校「小学校に続く中学校」へ通った。その後は自分の村に戻って、野良仕事と魚取りを手伝った。

20歳のとき、私はガオラを去って、フィジー諸島本島のビティ・レブに行った。2シーズンを、サトウキビ収穫者として働いた。この仕事は重労働であることに加えて賃金は高くない。しかも季節労働に過ぎなかったので、私はもっといい職を探していたところだった。運良く、叔父の1人がニュージーランドで働いていた。叔父は私が1987年にそこへ移れるように助けてくれた。

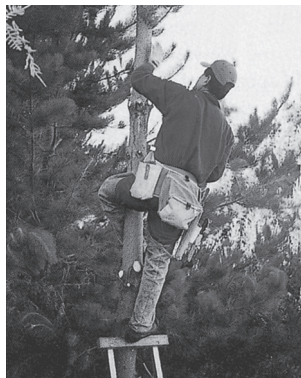
私は北島のギスボーンの請負業者のところで、ラジアータパインの枝打ちの職を見つけた。1992年にはタウポでもう一つの請負業者に移った。最初はラジアータ植林地の間伐に雇用された。会社の講師からチェーンソー作業の職場内訓練を

ずっと受けてきたので、今は皆伐作業のチェーンソー作業者として働いている。今までのところ事故や健康上の不平はない。1997年にフレッチャー・フォレスト〔ニュージーランドの林業不動産会社〕が実施した木材伐採検査の間に、私は100点満点で93.5%を取り、70人の伐採者の中から6番の評価と記された検定証を受賞した。

私は会社のバスで午前4時くらいに出勤し、午後4時くらいに家に戻る。われわれは毎日、途中の短時間の休憩を入れて8時間ぶっ通しで働く。私は1日に、胸高直径で30～40cmの木を30～40本伐採する。玉切りと枝払いは、他の労働者が土場に集材した後に行われる。私の賃金は2週間の労働で正味1,200NZドルである。

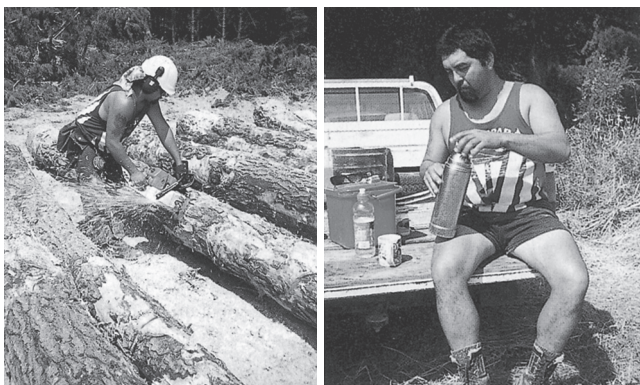
1991年にフィジーで結婚した。今は妻と9歳と7歳の息子とともに借家に住んでいる。われわれには永久労働許可がある。子どもは学校に通い、ニュージーランドに慣れている。妻は家政婦の仕事をして、家の収入に貢献してくれる。

ここでの自分の職業と人生にかなり満足しているが、もっと高い賃金を稼げるかもしれないオーストラリアへ行くことも考えている。



機械化がもっと進むせいで、 森林の職を失うだろうか？

ロジャー・ティ・アホ、ニュージーランド（男性）



カインガロア・フォレスト [カインガロア・ティンバーランズ社が所有・経営する巨大な森林] に隣接する小さな町、ムルパラで私は育った。

父は林業局でディーゼル整備士として勤務した。16歳のとき、私は6学年で中学校を終えてウェリントンに向かった。そこで大工の訓練を受け、それから3年後に技能試験に合格した。1987年から1989年には建築部門で働いたが、経済が悪化すると職をなくした。それでムルパラに帰り、林業労働者の職を見つけた。

いろいろな請負業者に使われて、例えば植林、枝打ちと間伐等のあらゆる種類の仕事をした。賃金はかなり低く、特に枝打ちは低かった。ロトルアに本部を置く伐採請負会社ムック・ホーネックに、私は1993年から雇用されてきたが、その会社はいい労働条件を提供した。現在の仕事は集材地での丸太作り [造材] と横挽き [玉切り] である。

林業労働者として受けた唯一の訓練は、丸太の測定と格付けに関する1週間の教育コースだった。私が初めてチェーンソーを使ったときは、同僚が使い方を実地で教えてくれた。今までに自分自身は一度も事故に遭ったことはないが、動いた丸太が動いて班員の脚を折った事故を、一度見たことがある。

作業は午前7時に始まる。スモーク、つまり朝10時の半時間の短い休憩と午

後にもう一度休憩を入れて、作業は8時間続く。労働現場へは、往復で2時間か3時間かかる。給料は現在、2週間で正味1,360NZドルだが、まあまあの金額である。

私は持ち家に住み、既婚者で子どもが4人いる。妻は保育園でマオリ人に教えている。家族と私はムルパラに暮らしてとても幸福である。私は今31歳だが、55歳か60歳になるまで林業労働を続けたい。けれども、収穫機械と造材機械の利用が増えて、その歳になる前に職を失うかもしれない。

日本の林業労働者が自らを語る（2010）

—労働と生活についての世界報告（林業部門）を読んで—

菊間 満

（山形大学教授）

ここに紹介するのは、日本の民有林林業労働者の労働組合として最も原則的で、水準の高い労働組合活動をする京都府農村労働組合の組合員（林業労働者）が自ら記した、本書への感想を含む物語である。訳者は林業を含む在村労働者の課題に取り組む同労組と30年近い交流があることから、同組合に拙訳（草稿）を参考資料として送付したところ、次のような組合員の物語を頂くことができた。

拙訳の趣旨を補うために本書に所収させて頂いたが、これらの物語は次のように、もっと大きな意義を持つものである。

まずILOの世界報告（2003）と対比することで、林業という同じ職業の労働者が抱える仕事と暮らしの歴史、その苦しさと同時に仕事への誇り（職業意識というべきもの）の共通性と異質性を理解できる。したがって、働くこと（労働）を通じて、逆に世界規模での林業の地域差と発展段階差を読み取ることもでき、あらためて日本林業の課題——世界の潮流との落差——が浮かび上がってくる。

次に、他国の林業労働者の物語とは、いわば労働運動のもっとも重要な一点においてだが、やや遠慮が感じられる世界報告所収の日本の物語（この要因は現在の日本社会にある）を、これらの物語は十分に補ってくれる。2010年の物語は、単に言葉ではなく、優れて現実的である。それ故、日本の林業労働者の実情と労働の実態を知る上で、世界の林業労働者には興味深く、かつ有益であると思われる。また、ILO報告から7年後の世界の林業労働者の現状を、日本から発信する役割も果たしている。

さらに、この物語は労働が人格を形成することの重要性、それに果たす労働組合の役割までも考えさせてくれる。人間にとっての労働の意味を理解した組合運動があって初めて、こうした物語も生まれる。「困難な労働と生活の中で、指導などなくても自分から読んで書いてくる、この本は読んだ生産労働者が自分のことを書きたくなる力を、生産にかかわっている労働者を励ます力を持っているよ

うだ」とは、同労組山口伸書記長の言葉である。日本の林業労働者に物語を話すきっかけを与えてくれた、この同報告の持つ力について、京都府農村労組書記長の言葉を借りて、繰り返し強調したい。さらに、この物語が同報告とは違って取材されたものでなく、労働者が自ら筆を執ったものであることに敬意を表する。

世界の林業労働者への共感、彼らとの連帯の第一歩である。もっと多くの物語が、日本の林業労働者から話され、一歩でも多く国際的な連帯が進み、世界の林業労働者の仕事と暮らしの改善が進むことを期待したい。

林業労働者の仕事と暮らしの持続なくして、森林の持続はありえないからである。

(題名は訳者の責任で付した)

山の仕事は 夫婦でないと難しいのです。

高橋 宮子（女性）



学校を卒業するとすぐに、家の手伝いや田畑の仕事、山の仕事を8年ほどしました。その後、家を出て会社員となり、12年間いろいろな仕事をしました、そして1996年頃、森林組合の保育造成業に夫婦で携わることになりました。

業務内容としては木を育てるのが主な仕事で、下刈り、除伐、間伐、枝打ち、熊・鹿よけのテープ巻きやロープ巻きなど仕事は色々ありました。初めは慣れない作業ばかりで大変でした。また、山の仕事は女ではできないことが沢山あります。例えば、間伐で大きな木を切ることや、枝打ちで高い木に登ることなどは、とても女の力ではできないことです。私が現在も山で仕事ができるのは、夫と一緒にからです。

ある日、女性が仕事場へ見学に来られ、私はその女性から「私は山の仕事が好きだから、山の仕事がしたいから見学に来ました。一人で山の仕事ができますか」と聞かれました。私はびっくりして返事にとても困りました。私自身、チェーン

ソーや刈払い機等、いろいろな機械を使うことはできますが、直すことはできません。夫が故障した機械を直したり、いつも機械が順調に動くように整備してくれるから、機械を使うことができるのです。自分が使う機械を直すことも山の仕事の一つなのです。このことを考えると、思わず「一人ではね…？」と言葉を濁してしまいました。

山の仕事を始めてから約14年になりますが、私にできない仕事は山ほどあります。仕事によっては、夫の補助的なことも大いにあります。山の仕事は夫婦でないと難しいと思います。枝打ちは、男の人と違って女は手の力が弱く、木に登って片手でチェーンソーを持ち枝打ちはできません。また枝打ち用の斧で太い木の枝は打つことができないため、細い木の枝は私が打ち、太い木の枝は夫が打つというようにしています。さらに、間伐にしても、元切り・中切り等の木の太い部分は夫が切り、細い木の部分は私が切るといったように、仕事の分担をしています。このように仕事を分担し、夫婦で協力しながら、私にできることはがんばってしています。

森林組合は65歳で定年になり、今は臨時で山の仕事をしています。これから、夫婦でできる限りはがんばってゆきたいと思います。今、私は67歳です。

現場の仕事は厳しく過酷でした。

高山 静代（女性）



1983年に主人と息子の3人で宮崎県延岡から滋賀へ来ました。最初は人夫が6人いて、私はその人たちの食事と洗濯をしていました。けれど、1989年から主人と二人で山仕事をすることにしたのです。私が38歳！

木起こし、下刈り、地拵えと少しずつ仕事にも慣れてきて、「山仕事も悪くないなあー」と思うようになった5年目の1月に突然主人が病気で倒れ、そのまま1ヵ月もしないうちに他界してしまいました。アツという間に先立たれたショックは大きく、3ヵ月過ぎても氣力を失いボーッとしている私に、ある日高校から帰った息子が、「お父は死んで飯食わんけど、ワイは生きてるし、腹が減った！」といい、その言葉でハッと我に返りました。このままではいけない。息子だけは何としても高校だけは卒業させなくては…。氣を取り直して森林組合へお願いして山仕事を続けることにしました。一人では不安で2匹の犬を連れ、毎日山に行くようになりました。しかし、下刈りになれば一人では危険な作業だなあーと思

案していると、協同話が持ち上がり、その人と一緒に仕事をすることにしました。枝打ちは初めてで、梯子に登ることさえ怖いのに、ましてやその上で鉋を持ち枝を打つなどとんでもない！　と思いながらも子供を養い生活するには泣き言もいってられず必死でした。数年するといつしか仕事にも慣れて、チェーンソーでも高さ8～10mの枝打ちもできるようになっていました。

そんなある日、枝打ちの最中にガツーンと、衝撃と同時に顔面に激痛が走りました。キックバックです。タオルで顔を押さえると真っ赤に染まってしまう、「うわあーやっちゃったあー」どうしよう。とにかく山を下り病院へ…。幸いヘルメットの前部に刃が当たりメガネも吹き飛ばしましたが、当たりが軽かったのか10針程度縫う裂傷ですみました。

今思い出しても背筋が寒くなります。

現場での作業は厳しく過酷でした。真夏の炎天下、油と汗にまみれて真っ黒になり、冬の吹雪混じりの日には手袋もすぐビショビショになり、かじかんだ指を曲げたり伸ばしたりさすったり、それでも仕事が終わる、家に帰りホッと落ち着くと、「今日も一日頑張った」やり遂げた！　と思える充実感で満たされました。山師は私の天職とさえ思えるようになっていました。

しかし、いつ頃からか指先が冷たくしびれるようになりました。山仕事もまた少なくなってきたので、未練を残しながら、山師をやめる決心をしました。

これまで元気にこのような仕事を続けられたのも、健全な心と肉体でこの世に送り出してくれた今はなき両親のお陰と、深く感謝しています。そしてこれからも残りの人生を明るく、元気で前向きに楽しもうとしている還暦を迎えた元女山師の私です。

これから先、少しでも労働条件が改善されることを願います。

上山 康成（男性）



私は現在、53 歳になる男性です。一人親方で林業に 30 年間携わっています。世界の林業労働者の過酷な自然環境と労働作業などは、私の地域の林業労働者と似ているところがありました。現在と違い、日本でも 50 年前頃には斧や鋸で木を伐採したり、玉切りしていたと聞きました。日本の山林は、急傾斜の山が多く危険な作業が多かったので、作業中に命を落とされる方も多かったようです。私自身も二度の怪我をしました。

私が 30 年前に山仕事を始めた頃は、架線集材がほとんどでした。作業能率は以前とは比べられないほど高くなりましたが、負傷される方も多くなり、安全な作業とは程遠いように思いました。また、以前は、安全教育なども行われずに作業につく事業所も多かったようです。

30 年前と現在では、木材価格が 3 分の 1 程度まで下がりました。森林組合で仕事を請け負っている方は、請負代金も毎年下がっていると話される方もいます。

そうした中で生活を支えていくためには、今まで以上に作業能率を上げていかなければならないのが現状です。安全よりも作業能率が優先になり、雨が降っても、雪が降っても仕事に行かなければ生活が苦しいので、仕事に余裕のないのが現状ではないでしょうか。

私は、事業主からいろいろな資格を取らせて頂きました。現在、公共事業などに作業員として仕事に入るときには、資格がなければ仕事できません。この点については、有り難く思っています。多くの方は実費で受けられたり、また無資格の方も多いのです。

また、林業では他の業種に比べて同じ休業補償を受けるには、労災保険の掛け金があまりにも高いので、労災の掛け金を払えずに無労災で仕事をしている方もいます。

このように、厳しい山林作業ですから後継者も少なく、山も荒廃が進んでいる状態です。私は現在、個人業者ですので林業機械を購入するのに、森林組合のように補助金も出ず実費で購入しなければなりません。中古の機械を探しながら仕事をしています。

私には、2人の息子がいますが、別の仕事に就いているので、林業は私で終わります。私は、子どもに私の仕事をさせたくありません。

今、私の体は、チェーンソーの使い過ぎによって振動病になり、指先のしびれと指先の骨が曲がり、現在治療を受けています。現在、労働基準では、1日にチェーンソーを2時間以上使わない、また30分以上連続して使用しない、と決められていますが、守っている方は1人もいないのではないかと思います。

これから先、少しでも労働条件が改善されることを願います。



欧米で林業労働が子供に継がれるのは、 仕事に誇りが持てるからだ。

東 仁（男性）



私は現在 60 歳、林業労働歴は 35 年になる。

世界の林業労働者の体験集を読むと、私の林業労働の経験と似通った状況だが、途上国の人々には何かしら希望が感じられる。また、ヨーロッパ、カナダ等の人は機械化の代償として負債の償却に追われているが、親から子へと職業を継いでいる。それは林業労働に誇りが持てる状況があるからだろう。私の場合は、子どもの頃に手伝いで山仕事を経験したことから当初は別の職業を選んだ。3Kといわれるこの仕事をするのを望まなかったからである。

私は 20 年近く伐採、架線集材に従事したが、伐倒の技術の奥深さ、架線張りの技術の奥深さには、社会人として初めて就いた自動車修理（ディーゼル車が多かった）の経験が役立った。というのも、集材機はディーゼルエンジンを用いていたからだ。

考えて仕事をすれば、それだけの効果はある。伐出業は、私にとって天職ではないが適業であり、肉体的には危険できついが楽しく、また充実して仕事ができた時期でもあった。しかし、木材不況で、職種を変え、造林・育林作業に携わるようになって 15 年が過ぎた。

私は今、20 歳代 2 人、40 歳代 1 人の若者と一緒に山仕事に励んでいる。何度

か労働災害は経験したが、「安全」について考え始めたのは、彼らと仕事をするようになってからだ。

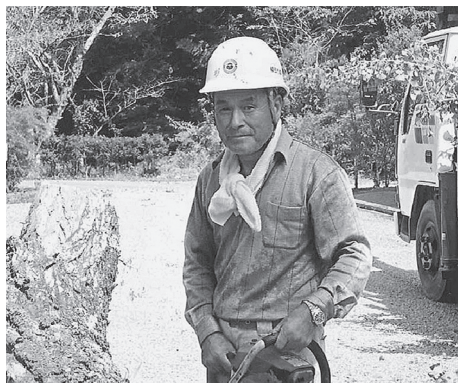
それまでは、少々痛い目をしてでも仕事を覚え、効率を上げるのが大事と考えていた。しかし、この考え方は間違っている。自分自身成長したものだと思う。ヘルメット等の装着物からの「安全」も大事だが、伐倒、刈払い、目立て等の技術の向上に加え、安全講習会への参加や KY（危険予知）活動の実施等の精神面の「安全」も進めている。

林業労働の「プロ」とは、怪我をしない、させないこと。

あと何年この仕事を続けられるかはわからないが、私は若い仲間に山仕事の技術を少しでも伝えられれば嬉しいし、「プロ」としてこの仕事を終えたい。

機械や重機の買い替え等に 多額の費用がかかり、大変困窮している。

木虎 治男（男性）



私は元林業労働者で72歳になります。

各国の林業作業者の作業内容などを見ると、国によって違いは多少あるけれども、人力にたよって、鋸、斧、牛馬等で作業していたものが、チェーンソー、重機等の機械に変わってきた様子は我が国でも同じであると思いました。また、作業機械等が非常に高価格なので、支払い等に困っている様子は各国共通だと感じました。これも時代の流れで、一度機械で作業を行うと今までのように人力ではできなくなり、体は楽でも生活は苦しいと思います。賃金、労働条件は各国共通のように感じました。

私が林業作業に従事するようになったのは、父が素材業を営んでいたからです。子供の頃から学校が休みの日などには、よく一緒に山へ行き父が仕事をする傍らで遊んだものでした。当時は夜明けと同時に作業を開始し、日没まで黙々と作業をこなす毎日でした。山から帰っても斧を研いだり鋸の目立てをして、明日の作業の準備をしました。

そして、私は1956年に高校を卒業し、同時に山林労働者として出発しました。最初は伐採木の寸検の記帳やトラックの送り状書きが主な仕事でした。私は早く山へ行って木を切りたいとの思いでいっぱいでした。そのうち、徐々に山での仕

事をし始めました。

伐採した木の皮剥ぎや薪の玉切り等を1年間ほど行って、ようやく立木の伐採をさせてもらえるようになりました。その当時は、まだ斧と鋸で作業を行っていたので、松を切る時には、鋸に松ヤニがつくために、鋸に石油を塗って切りました。

立木の伐倒は楽しかったのですが、伐採した木材の搬出といえば、牛車かウィンチで山の尾根まで架線で引き上げ搬出するという重労働でした。そのうち集材機を使うようになり大変便利になりました。その後、約2年間ほどしてチェーンソーを購入して使用するようになりました。とても楽に早く切れる性能には本当に驚いたものです。しかし、今から思えば当時のチェーンソーは大変重く振動が抜けず、チェーンが切れたりする故障等もある粗雑な機械だったように思います。

その後、父が引退をして私は30歳で独立をしました。そして、製材所が不要な木までは買わなくなり、注文木のみ取引となり木材市場に出荷するようになり替わりました。ところが、時代とともに立ち木の価格が上昇し、販売価格は下落していった採算がとれないようになり、やむを得ず造成地等の伐採業に転業しました。

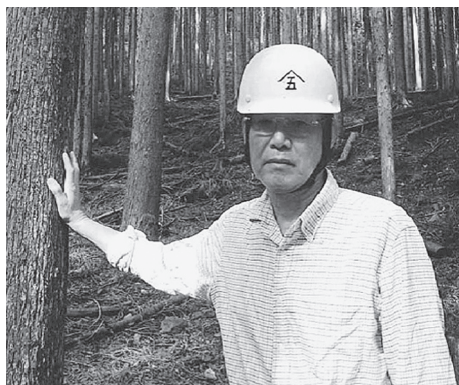
1980年頃から立木の買い入れを止め、大手建設会社の下請け業者としてゴルフ場、高速道路、工場等の建設前の造成地の伐採を行っています。重機を使用し、作業道を造り、伐採木を集積してプロセッサで玉切り、造材を行うようになり、数量的にもより多く生産することができました。しかし、段々新しい法律ができて排気ガス規制が1次規制から年を追うごとに2次規制、3次規制へと変わっていくたびに適合した機械を使用しなければならないので、機械や重機の買い替え等に多額の費用がかかり大変困窮しているのが現状です。

私は8年前に引退をし（高齢者は現場に入れないため）、現在は長男が後を継いでやっています。振り返れば47年間林業に従事することができたのも、父が林業に携わっていなければ現在の私もなかったでしょうし、長男が同じ道を歩むこともなかったでしょう。林業で命を落とす者もいる中、私も多少の怪我はあったものの、従業員に怪我人を出さずにすんだことが幸いだったと思います。

私が歩んできた道のりを書きました。

今では車で 30 分の現場でも、 当時は飯場暮らしでした。

足立 勝巳（男性）



世界各国には林業に従事している人や林業で生きてきた人が、いろいろな環境や賃金で、一生懸命生きてきたことを読んで知りました。同時に、日本の国の林業は北欧やロシア等より自然環境も恵まれ、賃金も多くはないけれども、少しは恵まれているようにも思いました。

私も 1958 年に高校を卒業してすぐ、父が戦死したため祖父たちが経営している木材会社に入りました。確か、当時山林労務者の日給が私たちの地方では 800 円だったと記憶しております。ちなみに私の月給は土日みなしで、雨天だけの休みで 6,000 円でした。同じ卒業生でも銀行へ勤務した友人は土曜半日、日曜休みで 1 万 2,000 円でした。林業はその当時から賃金が安かったのです。

本にもありましたが、日本でも、今では車で 30 分の現場でも飯場暮らしでした。夜になると飯場で人夫さんに焼酎を飲まされ、悪酔いしたことが思い出されます。伐採は鋸と斧を使い、搬出はワイヤーか場所によっては馬が活躍していました。正にこの本の通り、ヨーロッパも同じだったのですね。

現在は高性能機械で体力の消耗も少なく、能率も格段の違いがあります。

確か 1960 年の頃、河野一郎農林大臣が外材丸太の輸入自由化を行い、木材界は大騒ぎになったことを記憶しております。

その後には丹波の山奥にある製材所の土場にも大きな丸太が転がっていましたが、今は見ることはできません。そんな山奥の製材所すら姿を消してしまいました。このころから国産丸太の流通も変わり、大阪が京都にしかなかった木材市場も田舎に沢山でき、山林業者にとっては便利になりましたが、収入には結びつきませんでした。

そんな折、私も30歳になり（20歳で妻を娶り30歳で立ち40歳で迷わずサモン！というコマーシャルがテレビで流行りました。これに従い？）独立しました。しかし当時は林業が盛んで、業者として後発だった私には作業員が集まらず苦勞しましたが、後に素晴らしい作業班と出会いました。事故で労務者を亡くしたり、仕事が切れ立木の入札を高値承知で落札したり等、いろいろ苦勞もありましたが、60歳まで素材生産業を行いました。

2000、2001年頃から木材価格が下がり始め、素材生産業としては成り立たなくなり始めた2001年頃、県が（全国的ですが）森林施業計画という事業を一般業者にも認可を始めました。私も兵庫県より2002年に認定を受け、個人の森林や自治体の森林等約2,000haを管理し、現在に至っております。あと1年で10年目を迎えます。私も昨年山林で測量中怪我をし、近年体力と気力の衰えを感じ始め、この事業も2011年度で終わりにする予定です。

これからの林業は丸太価格が下がり大変ですが、国の林業に対する取り組みや方針を見極め、高性能機械の導入や造林事業に取り組めば、まだ生きる道はあると思います。

私も林業一筋の50年でしたが、それも終わりを迎えようとしております。この本によりますと、ヨーロッパ等では林業を息子や甥に仕事を継がす人もありました。私も息子が2人おりますけれど、林業を継がすには当時（20年前）では自信がなく、残念ながら祖父から続いた林業も、3代目の私で終わります。しかし、私にとっての、この50年の林業との繋がりは、今思えば幸いで有り難い50年でした。

中学を卒業すると、すぐに 父親に連れられて山に入りました。

中越 守雄（男性）



私は高知県の四国山脈の麓に 1939 年に生まれて、現在 71 歳です。この本を読んで感じたのは、どこの国の林業労働者も過酷な自然環境や労働作業などでは大変よく似ていることです。

私も中学校を卒業すると、すぐに父親に連れられて山に入りました。1954 年から 55 年でしたが、山奥の現場に小屋を造り、1 週間くらいの食料を持って、泊まり込みで働きました。朝は夜が明けたらすぐ作業でした。作業は鋸と斧で伐採をすることでした。働き始めてから半年ほどして初めてもらった 1 日の賃金は 150 円でした。額は少ないけれど、それでも自分たちの地域では良い方でした。

伐採した木材は、小場落^{コバオトシ}で搬出しました。伐採した木材を谷間の低い所に集材し、それを修羅^{シュラ}といって、木材を並べた上を集材した木材を滑らして途中まで出しました。次は檜^{ヒノキ}の板を 2 枚組んで木馬^{キウマ}を造り、そして木馬の道を造り木材を木馬に積んで搬出していました。土場からは、馬車やオート三輪車で市売市場まで運んでいました。

1960 年頃になると、架線を張り、奥山からでも楽に出ようになりました。1,000 ～ 1,500m くらいの架線は普通でした。長い線は 2,000 ～ 3,000m くらいの架線がありました。上と下との通信といえば「波信」といって、合図は叩く数で決めて

おき、詳細なことは手紙を書いて下に落として連絡を取りました。また下から上にも帰りの滑車に付けて上げました。出す木材が上にあるときは良いが、上に木材が無い時に故障や事故が上で起きたときは大変でした。波信では詳細は分からないので、1人連絡に降りてゆきました。

1963年から64年頃になると、連絡網も有線電話になり、飯場もランプから発電機になり、テレビも飯場で見えるようになりました。

木材の集材と搬出もエンジン付き集材機でできるようになり、伐採は山で元切りと枝払いだけをして、長木のまま土場まで出し、そこで玉切りをしました。

1990年頃になると伐採現場は元切りだけになり、トラックに積み込み、土場で枝払いや玉切りまでするようになりました。

現在は日本でも、人工林や場所の良いところでは大型機械で元切り、枝払い、玉切りまでできるようになりました。

最近では、林業作業も昔と違って楽にはなりましたが、木材市場の低迷で、山林作業も少なくなり、山林労働者が大変苦しんでいます。これにはもっと国が手を差しのべて欲しいと思います。

最後になりましたが、私がチェーンソーを使い始めたのは1960年頃でした。

私が体験してきた記憶の限りをしたためました。

森林組合を「労働」から再考する

——小規模森林組合等のミニシンポ報告をかねて——

菊間 満

(山形大学教授)

1. 環境・森林・林業を「労働」から再考する

(1) 小規模森林組合等に関するミニシンポジウムについて

筆者の所属する山形大学農学部林政学研究室では、1983年に全国で最初に「森林組合論」を開講した。理由は、日本林業の有力な主体の一つである森林組合が、その重要性にもかかわらず独自の講義科目として開講されていないこと、実践家の講義を学生に聴かせたいなどの理由からである。森林組合関係者を講師に迎え、26回目を数えることになった今年は、内外の協同組合研究の第一人者である石見尚氏を講師に迎え、5月にこれまでの取りまとめとなる講義をお願いした。また、講義の一環として、同月25日に、「いま見直す、農林業の小規模・非営利事業体の役割」をテーマに、講義をかねた市民向けのミニシンポを協同総合研究所と本研究室で共催することになった。

報告者は、沼倉昭二氏（秋田県・小町の国手づくり工房《旧秋ノ宮森林組合》元工場長）、竹内信男氏（宮城県・登米町森林組合参事）、平吹誠一氏（山形県・山元林業協同組合）、座長は石見尚氏であった。なお、シンポの概要は、拙稿（小規模の森林組合と山村の協同組合の役割——これまでとこれから——）も含めて『協同の発見』（第195号、2008年10月、協同総合研究所）に紹介されている。なお、本稿は、同誌所収の小稿に加筆したものである。

(2) 環境・森林・林業を「労働」から再考する

同シンポジウムに参加され、前記『協同の発見』にコメント（これからの森林と山村を支える市民的技術）を寄せられた山田純氏（国民森林会議事務局）から、本稿の執筆依頼を受けた。依頼の荷は重く、承諾をためらうような、森林組合を「労働」から再考するというテーマであった。については小稿もやや理屈っぽくなるこ

とをまずお断りして、筆を進めたい。

地球サミット（1992年）の主導者の一人であるエルンスト・U. フォン・ワイツゼッカーは、本来一体であった「労働」がフォーマルな経済の基盤となる就業労働（産業労働）に一面化されていると指摘し、われわれにとって不可欠な睡眠、食事、愛情の行為、子どもなど、人間存在全体の基盤である「インフォーマル部門」の存在なしに、フォーマルな経済はまったく役に立たないと指摘している。そして、「インフォーマルな部門」の一つとして環境をあげ、次のように指摘する。「（インフォーマルな部門の、引用者）生存維持労働は環境に対して配慮ある関係を維持しなければならなかったが、産業労働にはそうしなければならない理由はもはやなかった。そして農業でさえも経営理論が必要になった。熟練した職人はもはや自分がつくる製品に惜しみなく時間を費やす余裕をもたなくなった。家事は季節や食料の過不足とますます無関係になった。このような進歩の流れのなかで、人間労働はその本来もっていた環境持続可能性を維持することは不可能であった」¹⁾。

資本論の著者たちも、「労働」を仕事（ワーク）と雇用労働（レイバー）とに峻別し、資本主義経済に対する社会的な規制による労働の在り方を展望した。資本主義経済では利潤を目的に仕事の中から雇用労働が部分的に引き出されるだけであり、したがって逆に社会的に必要で有益な仕事であっても利潤が確保されなければ、雇用には結びつかない。しかし、失業は、あくまで資本にとっての相対的に過剰な人口問題でもあるから、仕事を雇用に拡大することは、社会的な規制によって、現在でも可能な課題である。そして、その解決のためには、本来社会性と協同性をもつ労働を取り戻しうる雇用の創出と、それを担うべき非営利・協同の主体の役割が、仕事を雇用に変えてゆく仕事（ビジネス）の創出として、特に重要であるとの論理が導かれる。

（3）森林の持続性を「労働」から再考する

生産力は労働力と労働手段の他に、労働対象があって現実化する。つまり、生産の持続性は、労働対象の持続性を条件とする。その意味で、戦後の日本の拡大造林政策（広葉樹を針葉樹に転換する）は、まず森林資源の多様性と持続性を失わせ、次に薪炭生産の崩壊を起点として山村での雇用機会を減少させ、さらに地域の農林業が多様に展開する可能性を奪ってきた。事実、全国の人工林率は第一

次過疎法の制定された1970年の30.3%から2005年には41.2%に増加したが、過疎比率（面積）も41.5%から54.1%に増加し減少はしなかった。政策の想定した予定調和論（人工造林による林業近代化と地域振興）は、すでに根拠を失っている以上、求められることは地域の雇用力を創出しない産業用木材の生産を目的とする林業経営から、地域の雇用創出を伴う、[日本では伝統的に「林野利用」と呼ばれてきた]森林経営に移行することである。それは、日本では農民的な薪炭林施業を母体に、狩猟、薬草採取、林内農業、林間放牧・牧野利用の畜産的利用などを伴う、伝統的に「林野利用」と呼ばれてきた森林経営であり、今日ではFAO等が提唱する「非木材生産物」の経営に符合する森林経営である。

こうした経営が意味をもつのは、自然の季節性を生かしながら、複数の利用主体が複数の作目等を生育させることが、国土の土地生産力を増進するためのもっとも持続性の高い土地経営と国土利用といえるからである。しかし、現在の日本ではそうした経営と利用を助長する土地制度は容易には見いだせない²⁾。一方、この点で参考になるのは、世界遺産の石見銀山である。世界的にも希有な数世紀にわたる鉱山の持続的生産を可能にした一つの理由は、同銀山が大規模経営でなく、小規模な生産の集合体であったことにあるといわれる。

環境と自然を傷つけやすい農林業や住宅等の産業では、規模の経済の盲目的追求は規模の不経済に陥る危険性が大きい。したがって、森林・林業は人智を生かした小規模の生産の集合体として、また非営利・協同の人的な結合体として展開されるべきであろう。その場合、森林・林業・山村を維持する林業労働や山村の労働は、「単純労働」ではなく、「暗黙知」を前提とする「複雑熟練労働」なのである。しかし、保障されるべき社会的に見合う賃金と労働条件・労働環境はないのが現実である。

（４）日本の林業と山村を「労働」から再考する

山村の農林業と地域社会のインフラである農道、林道、農業用排水路、公民館などの維持管理、そして子育てなどの家族の維持は、世帯主の都市同様の超過勤務、主婦のパートタイムの複数勤務（午前、午後と複数のパート）のもとでは、高齢者の「生存維持労働」に、つまり無償のシャドウ・ワークに支えられている。また、山村は青年層の雇用機会は極めて小さく、地域で仕事に就ける可能性は同様に小さい。新規卒者（高校）求人倍率は全国が2006年度で1.63、過疎の多

い県（秋田、山形、山梨、和歌山、島根、高知、熊本、大分、宮崎及び鹿児島）が0.93となる。過疎の多い県の倍率は1970年以降2006年度まで全国を下回り続け、全く改善の様子はうかがえない。また、新規学卒者（高校）の県内就職率は2006年度で全国が78.1%、過疎の多い県が65.2%となる。1975年以降、求人倍率同様に両者が逆転することは一度もなかったのである³⁾。

加えて賃金状況も著しく悪化している。最近の京都府農村労組の調査によれば、林業労働の年収（200日就労）は新規参入者で160万円、ベテランで280万円、経費自分持ち出来高で400万円前後という状況にある⁴⁾。それは、都市部のワーキングプア層と同水準にある。地域の低賃金と正常な雇用機会の乏しさが青年層の地域からの流出を招き、高齢者のシャドウ・ワークへの依存を増している。

こうして地域社会の持続にとって、特に若者の雇用創出は高齢者の医療・介護問題と同様に焦眉の課題である。小規模の森林組合などの取り組みと山村での協同の取り組みは、そうした課題を解決するための運動として今日大きな重要性をもつものと考ええる。

2. 森林組合を「労働」から再考する—小規模森林組合の今日的意義

（1）小規模森林組合をなぜ重要視するのか

全国の森林組合数（単位組合）は、森林組合合併助成法の制定された1963年の3,399から2005年には846に減少した。特に近年の減少は著しい。2005年では1組合平均の組合員数は1,913人、組合員所有面積は13,178 haとなった。合併により規模拡大した多くの組合は経営の重点を造林から林産事業に置くようになり、一定の経営改善は実現したものの、組合員の組合への未結集傾向や運動の創意性の喪失といった点で、協同組合としての森林組合の運動自体の停滞が目につくことが少なくない。

これに対して、小規模なままの森林組合では食品事業に取り組む中で、消費者との対話を重視し、小粒だがきらりと光る組合も少なくない。そして、それらの組合は経営規模の飛躍的拡大はないが、地域に密着し、持続性が高いことが注目される。森林・林業が困難な中でも元気のよい組合は木材生産だけでなく、消費者との対面性・対話性の努力をいとわずに、地産地消・土着主義を維持しつつ食品の生産と加工をする、つまり「非木材生産物」（Non Wood Forest Products）

の森林経営に努力する森林組合である。しかし、森林組合統計上は縦割り行政を反映して、食品事業に関する公式統計は存在せず、また生産が組合出資の別会社などの場合もあって、全国的な実態把握は困難な状況にある。

森林組合の動向に関する表面的な理解を整序すると、①資源環境問題の地球規模化の中で、日本の林業政策の破綻が顕在化したことがあげられる。80年代半ばから製材工場などの大型化により国産材コストを外材に比べて低下させ、自給率を上昇させる政策をとったが（国際競争力のある日本林業）、現実には国産材価格が下がり、外材価格が上がり、自給率が下がったのである。この事実が示すように、この間の政策的破綻は明確である。そして、山林所有者の林業放棄、山村の過疎、森林組合の経営困難はここから生まれた。この根の部分の問題を無視することはできない。②そのもとでとられた森林組合の合併政策、経営の規模拡大と生産の効率化の政策に関連し、その政策の根底にある「規模の経済」への疑問を呈さざるを得ないような事実が、環境、資源、地域問題などで増加している。現在の国際的な金融危機で一層明確になったように、「規模の経済」の追求は、「規模の不経済」に陥ってしまったことは否めない⁵⁾。

（２）今後一層必要性が増す森林組合の多様性

しかし、大規模な森林組合の存在やその役割を全面否定するつもりはない。その内部で一定の組織的分権化が進むならば、おそらくその役割も今後より大きく、また合理的になってゆく可能性もあるだろう。だが、大規模組合の存在とともに、小規模の森林組合、生産組織などが多数、自立的に存在することが、逆に大規模森林組合が存在し得る条件になるのではないのかとも考えられる。それは、日本の大企業が多くの中小零細企業に支えられて国際競争力を維持してこられたのと、ほぼ同じことであるからである。

協同組合研究者の大田原高昭氏は、戦後日本の農協に関連して、系統農協は国の政策に直接組み込まれ、国の政策に連動して機能するよう制度化されてきたと分析している。つまり、日本型農協は「制度としての農協」であり、欧米の自主的民主的協同組織とは区別されるべきだろうと指摘する⁶⁾。森林組合も、農協と同じように「制度としての森林組合」として展開してきたことはあらためて指摘するまでもない。農協が「制度としての農協」を克服する課題に迫られているように、今日、森林組合も「制度としての森林組合」を克服する課題に迫られてい

る。その意味でもう一度、小規模組合を見直すことの必要性を強調したい。次に大規模と小規模が同時に併存する条件を明らかにし、併存することが実は林業振興の要点であることも強調したい。この点で、各報告の小規模の組合や小規模の経営の取り組みから学ぶことは少なくないのである。

農地と森林等の山村の地域資源を生かし、食品生産と加工、そして森林資源管理に取り組む山村の小規模の事業体、森林組合、森林組合以外の協同組合の実態と意義については、先に述べたように統計的な把握が困難である。そのため、地域の取り組みから、その姿と重要性を明らかにできよう。また、各地の運動の経験から学び、そして経験を共有することで一層具体的な把握ができるだろう。

3. 三つの組合等の取り組みから何を学ぶのか

(1) 三つの取り組みの概要

農業や林業で小経営（家族経営）か大経営かという選択は歴史的に議論されてきた課題であるが、今日ではそれに環境問題が強く関連し、より環境に親しい経営は何かといった視点が不可欠になっている。また、経営の質を問わず政策的に最初から大規模に誘導するのではなく、大にしろ小にしろ、組合員の議論で自らの道を選ぶことが必要なのであり、上からの押しつけ、ないしは政策的誘導は問題である。逆に三つの組合の取り組みは、林業不況、過疎化・高齢化のもとでも、いずれも政策的誘導に対置される、下からの道を選択し、模索してきた取り組み例である。

まず、旧秋ノ宮森林組合（面積 2,435 ha、組合員 194 人）は農村労組が出稼ぎ農家の森林所有者を中心に組織した小規模の森林組合であり、山菜など森林資源の加工と山仕事の確保を軸に経営を守ってきた。転作大豆の加工による味噌生産等にも取り組んできた。秋田県の森林組合合併指導政策によりやむを得ず 2002 年には広域合併組合に吸収されることとなったが、加工部門は地域社会のサポートにより別会社として維持してきている。また、この取り組みは農村労組と農村労連が、80 年代に取り組んだ農林事業団（労働者協同組合）の運動としても評価することができる⁷⁾。

次に登米町森林組合（面積 2,230 ha、組合員 413 人）は、作業班出身の経営者がリードする全国でもまれな小規模森林組合である⁸⁾。林産事業の他に、特用林

産、農産物、食品加工等と地域の農林資源の活用を軸としてその機能を拡大し、2008年には合併協議会を脱会し、小規模組合として維持する意志を明らかにしている。

山元林業協同組合（面積 1,550 ha、組合員 118 人）は中小企業等協同組合法による事業協同組合である。森林組合の合併時に、森林組合とは別に集落の私有林、生産森林組合（入会山）からの地域材を挽く製材工場を出資して維持している。年に数戸、建て替えをする農家のための建築材料の確保が主要な目的であった。現在でも、100戸の集落農家はほとんどが森組、事業協同組合、生産森林組合、農協等に参加し、形態上は協同組合集落を形成している⁹⁾。なお、この集落は、綴り方教室として有名な「山びこ学校」の地でもある。

（２）取り組みから学ぶべき点

第一に、農林業において農協、森組、漁協等の職能組合とは異なる地域協同組合の可能性を探ることにある。三つの事例は、すべて地域協同組合の先駆的事例と評価することができる。

特定農山村法（1993 年）で中山間地域対策の一環として実施が図られたが、大きな進捗が見られない森林組合の農作業受託、農協と森林組合の相互乗り入れを、この三つの組合は政策に先行して広げてきた。この点の評価は重要である。なお、農林水産省は 2007 年 9 月に「農業協同組合、森林組合及び漁業協同組合における事業連携促進方策について（中間取りまとめ）」を公表し、広域合併による農協・森組・漁協に地域住民が重複加入する場合が少なくないため、農協・森組・漁協が提携し、消費者や地元の関連産業なども交えて取り組むことの重要性を指摘している。

第二に、地域協同組合として展開するときの経営の在り方・原則を学ぶこと。例えば、旧秋ノ宮森林組合のように必要な資材はすべて地域から購入すること。それが、有限会社移行後も地域からの支持も得て、有限会社としての出資を実現できた理由であること等は重要な点である。

第三に、合併協議会を離脱した登米町森林組合の取り組みは、小規模な森林組合でも生き残れる可能性を示すものであることなど。いずれの運動も、小規模性、中小経営（家族経営）といった地域資源立地型、循環型、環境保全型、持続型、木材よりも非木材生産物の経営であることなどが注目される。

第四に、協同組合社会が集落単位でも存在する場合、農協、森林組合、事業協同組合、生産森林組合などが別々に設立され、そのため出資金も分散し、出資金の合理的な運用が困難なこと。山村の土地利用と資源管理の現実を無視した、日本的特徴である縦割り省庁別の農林業政策と協同組合政策の問題点、その解決の必要性も明らかである。

第五に、いずれの組合等も、小規模性の故に、経営の持続性と資源の持続的管理が可能であったことである。

4. 森林・林業・山村でのあらたな「労働」と協同の在り方

(1) 省庁縦割り主義政策の限界とその克服の道

これまでの林業の協同組合政策には、省庁の縦割り主義への固執、協同組合と地域協同組合への無理解、森林からの生産物を木材に限定する狭さ、農村と異なる山村資源の特徴(小規模多様性)を生かす視点の欠落などが明らかである。また、山村コミュニティの主体は山村住民であり、その自治が山村再生の要であるとの視点が全く欠落していることもあげられる¹⁰⁾。つまり、木材生産物とともに非木材生産物によって、雇用の創出とコミュニティの維持を実現し、森林維持を図るなどのFAO等が提起する森林経営の国際的潮流とは全く異質であり、官僚的な森林・林業・木材モンロー主義といえるものである。それ故、小規模な協同組合と地方自治体、特に小規模地方自治体(市町村)による分権的資源管理という対案が、今日必要とされるのである。

その対案として、農協や森林組合などのこれまでの職能組合から、山村地域の小規模協同組合の地域協同組合としての運動を提起したい¹¹⁾。

(2) 地域協同組合の取り組みをどう進めるか—協同組合と労働組合の役割—

第一は、技術的な理由である。①国際農民組織「ビア・カンペシーナ」の提唱する「小規模で持続可能な農業は地球を冷やす」といった地球温暖化対策上の意義である。日本の山村地域のこうした農業と林業は、森林と農地の複合的利用のもとでしかあり得ない。②小規模で持続可能な農林業は、同時に生物多様性を前提とする。農林業の作目の多品種少量生産は、山村地域の特徴であり、生物多様性を維持する農林業と資源管理は、少品種大量生産型に陥りやすい職能組合より

地域組合が適格的であるからである。③それは職能組合でない地域協同組合としての発展を条件とし、小規模で持続可能な農林業として可能である。④こうした農林業の担い手は農家（家族経営）と中小企業（零細経営）である。農家の農産物価格は生活費によって規定されるため、家族と地域の安定的な生活が保障されるならば、投機と利潤に縛られた農業株式会社より、安価で安定的な価格の農林産物供給を維持することができる。

第二に、主体の側から見た課題を指摘しておきたい。

① 1980年代に農村労組は、振動病療養者の復職運動、つまり労働者協同組合運動としての農林事業団運動に取り組み、その運動は少なくない地域に広がった歴史がある¹²⁾。事業は林業ばかりでなく、農業を含む在村労働者の仕事全般にわたるものであったが、全国組織の合併の中で今日まで運動は停止したままである。しかし、現在も、農村労組の活動家が地域の農林業、伝統的産業の維持と再建に貢献している事例は少なくない¹³⁾。もう一度、この運動に学ぶ必要がある。また、地域協同組合の展開には、山村の多数者である「今日的な在村労働者」との提携が必要となる。それは、国有林、民有林の〔雇用者側の〕所有の枠を越えた新しい労働者の運動として必要である¹⁴⁾。

②主に労働に協同の基礎をおく地域協同組合の具体化には、日本でも広く展開している労働者協同組合運動等との連携が必要となる。それは労働者協同組合が地域協同組合の可能性をもつからであるが、日本では根拠法がないため、それらを定義する法整備が必要である¹⁵⁾。

③最後に、現在山村で奮闘している小規模組合のネットワークづくりを提唱したい。このシンポジウムも、孤立分断化されている山村関係者が、自分たちの運動がいかなる運動なのかを理解し、その発展方向はどこにあるのかを考えてもらう機会として、多少の貢献はできたものと自負している。ネットワークの実現は、運動への大きな励ましになるはずである。

注

- 1) エルンスト・U. フォン・ワイツゼッカー著、宮本憲一他監訳（1994）『地球環境政策——地球サミットから環境の21世紀へ——』有斐閣、264～265頁。

ワイツゼッカーの生存維持労働に関連して、特に女性労働の重要性がある。フェミニスト思想の経済学者マリリン・ウオーリングは、（第三世界での、引用者）社会

-
- 的森林（林業、引用者）の強制が、公表された目的とは逆行した大規模産業、つまり市場に利益をもたらすユーカリ類の植林として促進され、この植林は女性から食料や飼料や燃料を奪い去るだけで彼女たちに何も与えず、市場と公共政策が結託して地域の需要や地域環境を無視すると指摘する。（マリリン・ウオーリング著、篠塚英子訳（1994）『新フェミニスト経済学』東洋経済新報社、242 頁）
- 2) 菊間満（2008）「林野コモンズ論に関する実証的研究——今日の入会林野管理と山村社会の自治——」『山形大学紀要（農学）』第 15 巻第 3 号、167 頁。
 - 3) 過疎対策研究会（2008）『過疎対策データブック——平成 18 年度過疎対策の現況——』丸井工文社、36 頁。
 - 4) 京都府農村労組書記局（2008.3）「京都府農村労働組合第 42 回定期大会決定」
 - 5) 林野庁の推進する森林組合等の「提案型集約化施業」のモデルである京都府日吉町森林組合は組合員数 934 人、管理面積 9,917ha と、現在ではむしろ小規模な森林組合である。きめ細やかといえる組合員本意の経営は大規模性ではなく、むしろ小規模性のなせるところであろう。
 - 6) 大田原高昭（2004.12）「低成長期における農業協同組合——『制度としての農協』の盛衰——」『北海学園大学経済論集』第 52 巻第 2・3 合併号、58 頁。
 - 7) 菊間満（1988）「労働者協同組合と農林事業団に関する研究（Ⅰ）——農林事業団の全国的分析——」『第 99 回日本林学会大会発表論文集』、51 頁～53 頁。
 - 8) 小川三四郎（2008）『森林組合論——地域協同組合運動の展開と課題——』日本林業調査会。
 - 9) 菊間満（1995）「山村の労働者協同組合に関する研究——山元林業協同組合（山形県上市市）の事例——」『日本林学会論文集』第 106 号、37～40 頁。
 - 10) 林野庁長官の私的研究会である「山村再生に関する研究会」の中間報告（2008.6）「山村の再生に向けて——環境・教育・健康に着目して 21 世紀を支える山村づくり——」は、そうした認識を率直に述べている。
 - 11) 農業協同組合の事業と森林事業協同組合の事業をあわせ行うものとして、つまり山村の実情からして農山村の地域協同体としての農林業協同組合が望ましいとの構想は、戦後の森林組合制度創設時に検討されたこともあったが、森林組合関係者の反対意見により検討段階で消えていったとされる。（全国森林組合連合会（1973）『森林組合制度史』第 2 巻、96 頁）
 - 12) 同注 7

- 13) 米丘寅吉 (2007) 『二人の炭焼、二人の紙漉』桂書房。同著は著者と妻の半生の自伝である。携わってきた薪炭出稼ぎ、林業労働者、紙漉職人としての半生から、職種はそれぞれ異なるが、共通するのは働くことへの信念、自然と伝統に対して敬意を払うことへの信念である。それは、手仕事の文化の重要性と、気候風土と歴史が様々な手仕事の品物を作るという認識ともつながる。(柳宗悦 (2003) 『手仕事の日本』ワイド版岩波文庫)
- 14) 元森林官のゲハルト・リーガ氏は、ドイツでは労働者性と職人性を生かし、労働者の権利を尊重し、労働組合の役割を重視した林業労働者養成が行われていること、また現在の日本の林業技術教育には教育システムとしては 80 年前のドイツのような印象を受けるとも述べている。(農林中金研究所 (2008.10.28) 「ドイツからみた日本の森林・林業の課題——2008 年『森林組合トップセミナー』・『ドイツ元森林官との意見交換会』の講演録——」『総研レポート』)
- 15) 日本労働者協同組合連合会を中心として「協同労働の協同組合」法制化運動は進み、2008 年 2 月には国会に超党派の議員連盟が発足した。10 月現在では全国の 250 の市町村議会で法整備を求める意見書が採択されている。なお、この運動は新しい公共と市民自治を目指すものであるが、こうした視点から森林・林業の公共性や公益性を、新しい公共として市民社会に即したものに現実化する課題もある。

* 国民森林会議『国民と森林』No 107、2009 年 1 月より転載
(写真は省略した)

** 一部に修正・加筆をした。

訳者解説

物語から見えてきたのは、 日本の林業労働者政策の転換である

菊間 満

(山形大学教授)

1. 世界と日本の林業労働者

(1) 世界の林業労働者

森林は、自然現象であると共に社会現象、つまり社会問題であるのは、森林への人間の社会的な生産行為（労働）の故であり、それは林業と呼ばれる。

ここではそうした林業労働の社会的認識の糸口として、先ず今日の世界の林業労働者の状況について述べておきたい。

その理由は、第一に森林の持続性と多様性が適切な林業によって実現するためには、林業労働者の持続性が必須の条件となるからである。第二に、森林の持続性を支える林業労働者と呼ばれる社会的存在の人口数とその増減、仕事と暮らし、労働者の運動について、大多数の学生と市民が知る機会は比較的少ないと思うからでもある。

さて最初に強調したいのは、世界の林業労働者の運動は、移民や季節労働の増加、直接雇用から請負企業化、多国籍企業に対する規制の必要性、さらに ILO が提起した労働の基本であるディーセント・ワーク (decent work) 実現を求めて、日本とは大きく異なり、21 世紀に入って量的にも質的にも大きく進んだことである。

ここではそうした運動の中心にある BWI について紹介しておこう。多国籍企業との「国際枠組み協約」を結ぶ BWI (Building and Wood Workers' International、国際建設・林業労働組合連盟) は、2005 年に IFBWW (国際建設・林産労働組合連盟)* と WFBW (世界建設・木材労働者連盟) が合併して設立さ

* その活動内容については、以下の文献にも詳しい。

(財) 日本 ILO 協会編集『国際労働組合のプロフィール』同発行、1999 年。

れた。建設と木材・林業労働者等を組織した同労連は、世界 130 ヶ国に 318 の加盟組合を持ち、組合員は 1,200 万人を数える。

特に、ソ連崩壊後の世界の労働運動のダイナミックな変化を受けて進んだのが、「国際枠組み協約」の取り組みである。この「協約」の目的は、多国籍企業が労働者の基本的人権とりわけ ILO の基本的条約を承認し、ディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）、賃金をはじめとする労働条件、安全で衛生的な労働環境を保障することにおかれ、BWI とは多国籍企業 11 社（雇用者数約 34 万人）が締結している**。

ILO と BWI によれば、建設林産部門の内、世界の林業労働者数は正規雇用に相当する労働者数で 1,300 万人、3,500 億米ドルの経済規模に達する重要な存在であるとする。また、女性を中心とする非正規雇用や途上国の自給自足経済部門を含めれば、世界の雇用総計の 1 % にも相当するという。しかし、ほとんどの工業国では機械化により労働者数は大きく減少している。また途上国を中心に多くの林業労働者は依然として貧困状態にあり、最低限度の公共サービスさえ受けられない状況にあるとも指摘している。これが ILO と BWI により示された世界の林業労働者の概況といえる。

林業が高度に機械化された北欧を中心に、労働者の運動の前進する中で、近年は林業労働者のストライキへの取り組みが増加傾向にある。労働組合の要求は、主に企業の社会保障費負担の回避等を目的とする「請負」の直接雇用化、二次下請けへの低請負単価の改善などについてである。世界市場の下での林業機械化は、一国内での機械化とは異なり、こうした複雑な側面を必然的に発生させる。林業大型機械化の日本のモデルである北欧が、そうした状況にあることに、日本の林業関係者が学ぶべき点は少なくない。

（２）日本の林業労働者

日本の農業・林業・漁業の労働組合員数の推定組織率は、2007 年を見ると、雇用者数 58 万人に対し労働組合員数 1 万 6,000 人であるから 2.7 % に過ぎない（厚生労働省「平成 19 年度労働組合基礎調査の概況」）。これは推定組織率平均が 18.2 % となる日本の全産業中でも最低の値であり、運動主体の力量低下が著しい

** 筒井晴彦『働くルールの国際比較』学習の友社、2010 年。

ことが読みとれる。

次に、林業の働く職場の状況を労働災害から見てみよう。ここでは、その重さの程度を表す強度率と並んで、頻度を表す度数率（事業所規模 30～99 人）から推移を見てみたい。高性能林業機械の導入過程に即して、第 1 期（1995～1999 年）、第 2 期（2000～2004 年）、第 3 期（2005～2009 年）に分け、各期平均を見ると、第 1 期の 29.36 から高性能林業機械の導入が本格化した第 2 期には 43.13 まで増加し、その後の第 3 期には 26.70 に減少した（同上「労働統計要覧」2006 年度）。しかし、度数率は第 3 期の調査産業計では 3.08、建設業でも 2.39 に過ぎず、林業は全産業中で最高である。また、同期の強度率は 1.24 と鉱業の 1.49 に次いで第 2 位である。加えて、木材価格低迷の下、林業の低賃金は一層構造的になり、大きな改善は見えない。

したがって新規卒者（中卒者以上）の林業就労者数は 2007 年には 165 人にしか過ぎない（文部科学省「学校基本調査」）。緑の雇用対策事業などの政府の林業労働対策にもかかわらず、山村の過疎と相まって就業者数は 2008 年には 6 万人（内雇用者数は 4 万人）まで減少した。雇用者数に占めるウエイトは、短絡的な比較は慎しむべきだが、先の国際的なウエイトの 1 % に対して、日本では就業人口比でわずか 10 分の 1、0.1 % にしか過ぎない。

しかし、日本ではこうした数的減少と逆に、中山間地の資源管理やコミュニティの維持など、その今日的な、また将来的な社会的役割はあきらかに増している。林業労働問題は、毎年深刻さを増している社会問題のうちでも、今や最も重要な一つになっている。

一方、日本の林業労働問題は林業の停滞ないしは衰退傾向のもとで、運動と理論の両面で 20 世紀中の課題がほとんど解決されないまま、さらに解決の展望を示すことができないまま 21 世紀を迎え、すでに 10 年が経過した。現政権のもとでの林業の見直しも、小手先の対応策の検討に終始しており、特に林業労働については根本的な対応策は皆無に等しいとさえいえる状況にある。理念と政策の両面で抜本的な立て直しが求められているのである。

2. 解決の視点と方向

では、その抜本的な解決の方向はどこにあるのか。

今必要な筋道の一つは、林業労働の新しい理念の確立である。それは、先ずILOの「協同組合の促進に関する勧告」(2002年)などに示される「ディーセント・ワーク」(働きがいのある人間らしい仕事)の視点から、林業労働の意義と価値、協同労働としての林業労働の意義と価値を明らかにすることである。

次に必要なことは、林業労働政策の立て直しである。それは、林業労働者を単なる労働過程の存在にとどめ、その労働の改善を求める一元的政策から、林業労働者であると共に家族や地域を構成する社会生活者として、その改善を図るような、多元的な政策に転換することである。それを林業の主要な場である山村(中山間地域)農林業者に対する直接所得保障(デカップリング)政策レベルで論ずれば、農民、山林所有者と共に、地域の資源管理者としての林業労働者も、小規模農林業を営む主体としてその対象に含めるということである。また、農林業政策以外にも、家族の就労機会確保、子弟の公的教育の保障、医療保障など、広範な分野にわたらなくてはならない。

小論(「森林組合を「労働」から再考する—小規模森林組合等のミニシンポ報告をかねて—」『国民と森林』No.107、国民森林会議、2009年1月)が提示したのは、こうした林業労働問題とさらには協同組合問題の多元的な理解とその理解に基づく政策の必要性という視点であるが、そうした多元的な理解と政策の実施を困難にしている要因は、農林業や環境問題では、今や規模の不経済に陥っている規模の経済論(スケール・メリット)にすぎず縦割り行政にある。しかし、それを受け入れてきた、これまでの協同組合と労働組合の運動と研究者にもその責任の一端はあるに違いない。したがって、本論はこれまでのそうした林業労働政策と運動論に対する対案としての問題提起でもある。

林業労働のみならず、地域の総合的な労働者を組織し活動する京都府農村労組と小論で紹介した小規模森林組合等の取り組みは、その多元性の故、国の政策との間合いでは恐らく少数派であるかもしれない。しかし、それは国内の林業労働者と森林組合の内発的な独自の多元的な取り組みであることに、さらに期せずしてディーセント・ワークという世界の労働の潮流と流れを一にしていることにも注目される。同時にこうした世界の流れと、日本の林業労働政策の多数派との大きな落差についても注目せざるを得ない。世界の流れの中では、日本の多数と少数の関係は全く逆転している。

したがって、これらの林業労働者の「物語」に続く課題は、ILO等が示す労働

問題の国際標準に基づいて、この逆転を正すことである。そのためには、現在の林業労働政策の抜本的な転換と何より日本の森林・林業政策の転換が望まれる。

3. 労働と生活に関する世界報告（林業部門）の特徴と意義

（1）報告の特徴と意義

林業労働問題の解決は、客観的な事実に基づいて行われるべきである。しかし、内外を問わず、林業労働者の状況については、そもそも統計的把握が困難であり、さらに統計数値自体が実態を反映しない場合は少なくなく、統計は必ずしも真実ではない。

そうした背景を念頭におき、ILO は 2003 年に、「林業の課題は木や森林ばかりではなく、人々も課題とする」（はじめに）、「林業に関心を持つすべての人、森林管理に関わるすべての人、森林所有者、雇用者、労働者組織、政府組織等の労働と暮らしを改善すべき立場にあるすべての人々に、そして最後になるが重要なこととして林学者と林学科の学生に読まれるべきである」（序言）とする「労働と生活に関する世界報告（林業部門）」*** を刊行した。同書は顔の見えない「統計主義」とは異なるアプローチで真実を明らかにすることを意図したものであった。また、本書刊行の動因の一つには、BWI 結成に結びつく林業労働者の運動の前進があったものと考えられる。

同書は、33 カ国 55 名の林業労働者の労働と生活を、統計数値によらずに物語として明らかにした貴重な報告である。また同報告は林業労働者に対する聞き取りを労働者自らが語る形式で、つまり物語の形式で編集された点に何よりも特徴がある。

物語は、世界の広く異なる条件での労働と生活に基づいており、男性と女性、若年者と高齢者、工業国と発展途上国、涼しい気候と暑い気候、手作業と機械作業などの林業の全範囲を包含している。また退職した林業労働者の物語からは、

*** Compiled by Bernt Strehlke (2003) SECTORAL ACTIVITIES PROGRAMME Working Paper (WP.207)
HOW WE WORK AND LIVE FOREST WORKERS TALK ABOUT THEMSELVES
: A global account of working and living conditions in the forestry sector. ILO, Geneva. ISBN 92-2-114390-2

各国の林業労働者の自分史と林業史が、かなりの程度で世界共通な傾向を持つという傾向を読み取ることが出来る。恐らく同書を読んだ日本の林業労働者が最も共鳴し、多くの市民が興味深く感じるのは、女性労働者の物語とともにこの点に違いない。林業で働く姿とともに、衣食住に関わる些細だが印象的な日常の姿、家庭生活に献身する親としての姿に、送った人生を回顧する高齢者の姿、将来を悩む若者の姿に、人間としての在り方さえ、この物語は問うているように感じる。

さて、やや専門的な話題となり恐縮だが、日本の林業労働研究との関連では、戦前の半封建的な林業労働組織を現在の第三世界の熱帯林伐採の労働組織に見いだすことも可能である。前者の特殊日本の特徴を今日の状況から再検討し、日本経済史上の課題として、再度位置づけるきっかけともなりうる。さらに、日本の戦後の国有林を先頭にしたチェーンソー導入が振動病を発生させたこと、つまり機械化が労働力と自然を破壊する過程を、現在のスウェーデンの大型請負業者の生活の困窮化（半世紀前に戻ったとの本書中の労働者の言）になぞらえることもできる。本来、機械は二面性を持ち、市場経済の下では社会的規制を伴わずに労働者の負担を減少させることは難しい。日本の林業と林業労働を改善する上で必須の大局観においても、同書から学ぶべきことは少なくない。

（２）物語から何を学ぶべきなのか

同書の編者ベルント・シュトレルケ氏は序言でその要点を示しているが、ここでは日本の課題とも関連させて、やや詳しく紹介してみたい。読者は、紹介する同書の物語の主人公の集合写真を確認しつつ、読んで頂きたい。

①林業は特殊な職種として親から子へ、子から孫へと継承される労働としての存在をすでに終え、他産業の労働と同様な存在になったのではないかと問いかける。それは、職能集団としての林業労働者の特異性に将来はないとの認識といえよう。

②伐採や造林といった作業の違いとともに、手作業と機械作業の併存、さらに手作業の一つとして集運材での畜力利用状況が取り上げられている。機械がそのウエイトを増していくことは必至としつつも、コスト主義の機械化万能論とは違った認識を示していることは重要である。

③直接雇用に代わる請負仕事の問題点について述べ、公正な請負価格の必要性、企業の社会保障負担回避策についての改善を強く訴える。

④給料の格差が依然として大きい。手作業と機械作業といったケースのみならず、特にヨーロッパでの自国労働者と移民労働者、アフリカでの企業海外駐在者と現地労働者といった現在進行形の問題と課題があることを示す。

⑤事故の危険は依然として大きく、職業的な疾病が残存すると指摘し、労働者がそれらを自ら語る場合は例外的ではないとする。

労災は世界の林業労働に普遍的であり、林業労働は世界的に見ても、建設労働と同様に“3D jobs” (dirty, degrading, and dangerous jobs) と呼ばれる労働である。ちなみに日本でも同様に、3K ないし 3K 1Y と呼ばれている(「危険」・「汚い」・「給料安い」・「休暇取れない」から3つのK、屋外作業のため「屋根がない」のY)。

⑥工業国では多くが飯場生活から通勤形態になったが、途上国では前者が今なお支配的である。しかもこの姿が、コスト競争の中で、北欧でもリバイバルしているという。歴史は、常に進歩するとは限らない。可逆的なことは少なくない。

⑦林業労働者の教育・養成策について工業国と途上国の格差を指摘するが、同時に林業労働の特性を反映して、森林での生活体験の豊かな途上国の労働者の高い技能水準も指摘する。

⑧女性が男性同様に林業労働の重要な役割を担いつつも、強いられている賃金差別を強く指摘する。その傾向は途上国で特に顕著である。

⑨林業労働が移民労働者にとって魅力的な仕事となっている現状を述べ、移民が建設産業同様に林業雇用の一般的形態になりつつあると指摘する。

⑩こうした状況を改善するために、労働組合として労働安全を含んだ林業の認証制度(労働安全諸規則、森林認証等)の重要性を指摘し、その成功例を紹介している。残念ながら日本の林業労働組合が、労働安全の観点から森林認証に取り組んだ例を筆者は寡聞にして知らない。

⑪なお、林業労働者の持続性なしに森林の持続性はないことは、編者の確信であることは、あらためて指摘するまでもないことである。

4. 日本の林業労働問題—転換への対案—

同書の内容を踏まえ、また同書では触れられていないように感じる日本の林業労働問題の特異性に即しつつ、政策の転換方向について述べてみたい。

(1) 森林と地域社会の多様性が林業労働の本質

労働の対象としての世界各国の森林は実に多様であり、したがって林業の範囲も、用材生産、薪炭材（薪）生産、コルク採取等の木材生産と狩猟業などの非木材生産、さらに木工、森林火災への防火作業、苗木生産から造園作業と多岐にわたっている。そのため、林業労働者の姿も極めて多様で個性的である。

多様な労働の主体たる林業労働者の雇用形態は直用、請負、自営等と多様である。雇用側の事業体は多国籍企業、大規模会社、中小規模会社、労働者協同組合、森林組合等と多様である。働く森林の所有形態は国有林、私有林、共同体有林などと多岐にわたり、さらに、労働安全や教育訓練制度、就業時間、就業条件、賃金水準と支払い形態も、極めて多様である。

林業労働問題を重要な要素である生活の視点から、地域性と歴史性を踏まえて総括し、類型化することは、多様性を持って本質となしうような側面を持つことから、論理矛盾であり極めて困難である。しかし、それは特に重要な課題であることから、日本の林業との関連を意識しつつ、次のように試論的に提起してみたい。

(2) ヨーロッパの林業労働から学ぶもの

①社会的な労働

開発段階の林業を終えたヨーロッパなどの林業労働は、先ず労働が農場経営などを伴う兼業労働であり、さらに配偶者の共稼ぎなどを伴う世帯としての再生産（後継者養成）と所得確保の課題として林業労働問題がある。いわば家族多就労の課題である。そして、日本とは違って、職業訓練を支える公的な訓練校の存在がある。一方、専門的林業労働者の存在は公的林業職業訓練制度のない途上国の熱帯林とプランテーション林業（ファスト・フォレストリー）、ロシアの未開発林などに確認できるに過ぎない。今や世界の林業労働の潮流は、日本のような縦割り行政的な専業労働力形成の課題としてはないことを、さらに林業労働は公共性の高い、社会的な労働であることを、ここでは強く指摘しておきたい。

②機械化はそもそも裾野の広い手作業、女性労働、畜力利用、在来型機械の基礎に支えられ、その頂点にわずかの高性能林業機械が存在する。基礎を失い、高性能林業機械が単独で生産を支える構造はヨーロッパには存在しない。換言すればヨーロッパの林業の生産構造は、いわば基礎の小規模生産の集積としての大規

模生産ともいえるものである。それが、世帯としての概ね小規模の農家経営と世帯員個人としての林業労働を無理なく一体化させている条件である。また、それは森林と労働の持続性を保障し、その結果として日本と異なり、後継者の育成も世帯等を単位に、公的な職業訓練学校での教育に保障されて進んでいる。実際の矛盾や困難はあろうが、本書に当たり前のように語られたヨーロッパの労働者の仕事と暮らしの物語は、日本では決して当たり前ではない。

③そうした機械化の頂点に立つ熟練労働者は、しかし合理化の中で、直接雇用から請負業者化を強いられている。所有する高性能林業機械の負債返済と過重労働（働き過ぎ）に悩み、その解決の方向を林業からの離脱に求め、離脱しない場合も木材生産ではなく非木材生産に将来性を求めている。さらに林業労働でも同様に、これらの非人間的な労働の克服の方向として、ILO が提唱するディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）の原則が適用されなければいけない。「林業労働力確保」などの用語に示される財界・官僚的思考から離れ、日本でも労働と人間の在り方の課題として根本から林業労働を再考し、将来を展望するという課題に迫られている。その展望は、ディーセント・ワークが可能な経営（ビジネス）の創出が条件となる。

④持続的な森林管理と林業生産を支える林業労働は、暮らしを支える地域と世帯の安定の結果でしかない。多様な地域労働（農村の仕事、山村の仕事）の一つとして、持続的な林業労働が存在するのであり、決してその逆ではないことを再確認する必要がある。したがって、こうした視点からヨーロッパと同じく開発段階を終えた日本でも、これまでの林業労働の産業別近代化政策とは異なる別の道が検討されなくてはならない。日本の縦割り行政型の林業労働近代化政策が、そもそも森林開発段階にしか対応しえない、過去形の政策であることは、ILO 報告の示したところである。われわれには資源的に成熟した森林と同様に、成熟した林業労働政策への転換が必要である。

⑤林業コストダウンのために、ヨーロッパでは東欧から中欧等への低賃金の移民林業労働者が導入され、それが労働者全般の低賃金を強いている状況にあることは見逃せない。今、日本で流行の、財界・官界提唱の「林道・機械化のヨーロッパ林業＝低コスト論」が見落としている重要な点はコストの分析である。つまり低コストの最大要因として、恐らく移民労働などの低賃金労働者の存在があることを忘れてはならない。

(3) 三つの対案

そのための第一歩として、次の三つを対案として提示したい。

まず、縦割り行政的な労働政策の廃止がある。その一環として、建築・木材・林業の一体化された労働政策が必要である。労働組合自身が、縦割り行政に縛られた産業別の運動から解放され、政府に一体的な労働政策の実行を要求する課題がある。ちなみに、2010年に全建総連が行ったドイツの労働組合調査でも、ドイツでは労働組合自身が建築・木材・農林業・環境は、各産別に分かれていない、関連分野の一体的組合であることが明らかになった。

次に、職としての林業から木造建築までを含む熟練した現業労働者の公的な職業訓練学校の制度化が必要である。日本の林業の現行制度は緑の雇用制度等の短期課程のみしかなく、長期課程、つまり労働者の訓練校は存在しない。この点では、韓国の山林組合中央会（日本の全森連）の職業訓練校に学ぶ点が少なくない。

さらに、宿命的ともいえる林業の低賃金構造を打開するためには、先進国では稀であり、日本の地域格差の原因である地域最低賃金制を廃止し、林業・木材産業・建築業の最低賃金を大幅に上昇させることを提唱したい。林業のウエイトの高い都道府県では、産別賃金に林業を含めることも必要である。

筆をおくにあたって、林業労働者の労働と生活の一体的把握という、素晴らしい視点を本書で貫いた編者ベルント・シュトレルケ氏に、心から敬意を表したい。同氏からは、翻訳刊行に当たり略歴と写真の提供をいただいた。さらに、本書の多くの調査者と写真撮影者に心から敬意を表したい。

翻訳出版について許可を頂いたILO本部、申請手続き等についてアドバイスを頂いた同駐日事務所にはあつくお礼申し上げる。

拙訳の完成に当たっては、訳者への激励と過分な序言を頂いた石見尚氏に心からお礼申し上げる。また学内外の多くの方々、さらに各国大使館などの多くの機関から、アドバイスや貴重な指摘を頂いた。紙幅が尽き、それぞれのお名前は掲げられないのが残念だが、援助を頂いた方々に、あつくお礼を申し上げる。刊行に当たっては、日本林業調査会の辻潔氏にお世話になった。

本書の公刊から8年が経過し、いささか遅きに失したともいえる日本語訳の刊行であるが、林業経済研究者の一人として、その社会的責任を若干だが果たせたことを心から嬉しく思う。

ベルント・シュトレルケ

1929年にドイツで森林官の子として生まれ、林業を身近にして育つ。ゲッティンゲン、フライブルク、ミュンヘンのドイツの各大学、さらにオックスフォード大学で学び、ゲッティンゲン大学で博士学位を修得。



ILOで勤務を始めた1964年から退職した91年末までの期間、計20年間はILOに勤務し、全世界の林業労働者の社会的問題に携わる林業専門員として、主に林業労働者の職業安全衛生と健康と職業訓練の問題を担当。多くの教育コース、セミナーとシンポジウムを組織する一方、研究と報告書の作成と刊行にも従事。さらに、発展途上国の技術援助関連プロジェクトの準備、運営と評価の業務に従事し、退職後も世界各国で林業労働訓練関連のコンサルタントに当たる。

またILO勤務前の期間を含め、計20年間はゲッティンゲン大学林学部の助講師及び研究員、林業労働訓練校の所長、機械化林業伐採造林センター所長、地方州有林管理者として送る。

最終的に、5大陸の多くの国で169の派遣事業に当たり、林業関係の雑誌に150弱の記事と25冊の訓練用マニュアルと包括的報告書を執筆。

1969年に来日。林野庁と共同で、林業労働技術と林業労働者の訓練に関するアジア地域FAO/ILOコースを担当。さら1981年に京都で開催されたユフロ世界会議に出席。

現在、スイスのチューリッヒに在住。

菊間 満

1949年東京生まれ。

農学博士、山形大学教授。専門は林学と経済学。

連絡先：電子メール（mkikuma@tdsl.tr.yamagata-u.ac.jp）

「物語」の個々人

フィンランド



スウェーデン



スウェーデン



スウェーデン



ノルウェー



イギリス



ドイツ



ドイツ／オーストリア



ドイツ



ドイツ／ポーランド



ドイツ／ポーランド



フランス



スイス



スイス



スイス



スイス



オーストリア



スロベニア



スロベニア



チェコ



ルーマニア



ルーマニア



ロシア



ロシア



ロシア



ギリシャ



ギリシャ



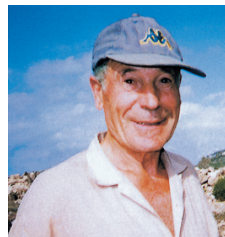
スペイン



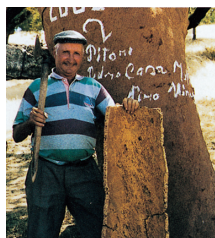
スペイン



スペイン



ポルトガル



ポルトガル



ポルトガル



ポルトガル



米国



米国／グアテマラ



カナダ



カナダ



カナダ



ブラジル



ブラジル



ブラジル



ブラジル



ブラジル



ブラジル



ブラジル



チリ



チリ



チリ



ガーナ



カメルーン



カメルーン



カメルーン



ガボン



タンザニア



タンザニア



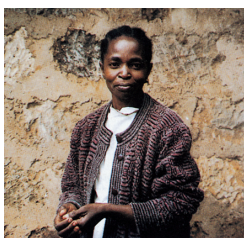
エチオピア



エチオピア



ケニア



レソト



レソト



日本



日本



日本



韓国



韓国



インド



オーストラリア



ニュージーランド
／フィジー



ニュージーランド
／フィジー



ニュージーランド



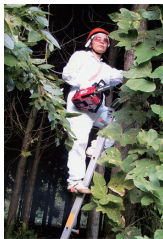
ニュージーランド



日本



日本



日本



日本



日本



日本



日本



日本



2011年 3月30日 第1版第1刷発行

2011年 5月31日 第1版第2刷発行

せ かい りんぎょうろうどうしゃ みづか かた
世界の林業労働者が自らを語る
われわれはいかに働き暮らすのか

著 者 ————— ベルント・シュトレルケ

訳 者 ————— 菊 間 満

カバー・デザイン ——— 峯 元 洋 子

発行人 ————— 辻 潔

発行所 ————— 森と木と人のつながりを考える
(株)日本林業調査会

〒160-0004

東京都新宿区四谷2-8 岡本ビル 405

TEL 03-6457-8381 FAX 03-6457-8382

<http://www.j-fic.com/>

J-FIC（ジェイフィック）は、日本林業
調査会（Japan Forestry Investigation
Committee）の登録商標です。

印刷所 ————— 藤原印刷(株)

定価はカバーに表示してあります。

許可なく転載、複製を禁じます。

© 2011 Printed in Japan. Bernt Strehlke

ISBN978-4-88965-207-9

再生紙をつかっています。